住吉宮町遺跡

（第19次・第20次調査）

－阪神・淡路大震災に伴う発掘調査－

２００１

神戸市教育委員会

住吉宮町遺跡

（第19次・第20次調査）

－阪神・淡路大震災に伴う発掘調査－

２００１

神戸市教育委員会

序　　文

平成７年１月17日に起こった阪神・淡路大震災は神戸市に甚大な被害を及ぼしました。そしてこの日から復興へ向けての多大な努力が各方面でなされ、５年以上経過した現在、神戸はよみがえりつつあります。

本報告の住吉宮町遺跡第19・20次調査も震災復興事業にともなって行われた発掘調査であります。１日も早い被災者への住宅供給の要求の中で、非常に限られた期間の中での調査でありましたが多大な成果を得ることができました。

19次調査では埋没した古墳を確認し従来から知られていた古墳群がさらに広がることを確認しました。また多くの完形に近い弥生土器がみられたことはこの遺跡の弥生時代の状況を知る上で重要なものであります。20次調査では多量の土器と木製品が出土しました。木製品は東灘区内での出土は珍しく、また花粉分析の資料が得られたことから当時の環境の一端を知ることができました。

これらの成果から先人達の歩みを知ることができ、未来に向かって復興にはげむ市民の皆様の心の糧ともなれば幸いです。最後に調査及び本書の刊行に御協力いただいた多くの方々に厚くお礼申し上げます。

平成13年３月31日

神戸市教育長　木　村　良　一

例　　言

1．本書は阪神・淡路大震災の復興に関して行われた共同住宅建設に伴う住吉宮町遺跡(第19・20次)の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。発掘調査は、国庫補助により神戸市教育委員会が実施した。

2．調査は、地方自治法第252条の第17項の規定に基づき、阪神・淡路大震災復興支援のため島根県教育委員会、福島県教育委員会、奈良県教育委員会、京都府教育委員会から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に派遣され、同教育委員会より神戸市教育委員会に人的支援にあたったものが調査を担当した。調査組織は以下の通りである。

平成７年度
神戸市文化財専門委員（埋蔵文化財部会委員）
　檀上　重光　　神戸女子短期大学教授
　和田　晴吾　　立命館大学文学部教授
　山岸　常人　　奈良国立文化財研究所遺構調査室長
教育委員会事務局
　教　育　長　　小野　雄示
　社会教育部長　　西川　和機
　文化財課長　　杉田　年章
　埋蔵文化財係長　　奥田　哲通
　文化財課主査　　中村　善則・渡辺　伸行
　事務担当学芸員　　菅本　宏明・松林　宏典・川上　厚志
調査担当職員
　第19次調査……小野田　義和　（福島県教育委員会）
　　目次　謙一　（島根県教育委員会）

平成８年度
神戸市文化財専門委員会（埋蔵文化財部会委員）
　檀上　重光　　神戸女子短期大学教授
　和田　晴吾　　立命館大学文学部教授
　山岸　常人　　神戸芸術工科大学助教授
教育委員会事務局
　教　育　長　　鞍本　昌男
　社会教育部長　　矢野　栄一郎
　文化財課長　　杉田　年章
　社会教育部主幹　　奥田　哲通
　埋蔵文化財係長　　渡辺　伸行
　文化財課主査　　丹治　康明・丸山　潔
　事務担当学芸員　　菅本　宏明・松林　宏典・橋詰　清孝
調査担当職員
　第19次調査……小野田　義和　（福島県教育委員会）
　　目次　謙一　（島根県教育委員会）
　第20次調査……岸岡　貴英　（京都府教育委員会）
　　大西　貴夫　（奈良県教育委員会）

3．調査に際しては、効率的かつ迅速な調査を行うために、六甲山麓遺跡調査会の浅岡俊夫氏の協力を得て、同調査会より以下の２名の職員を補助員として採用し調査の補助にあたった。
　　西田　明子(第19・20次調査)　　磯辺　敦子(第19次調査)

4．本書は第19次調査、第20次調査の遺跡の報告を編としてまとめ、それに序編を加えた。
　　序編
　　第１編　住吉宮町遺跡(第19次調査)……神戸市東灘区住吉宮町４丁目26-1
　　第２編　住吉宮町遺跡(第20次調査)……神戸市東灘区住吉宮町６丁目99-3

5．本書に示した方位は座標北を示している。標高値(レベル)は、すべて東京湾平均海水準(T.P.)である。

6．遺溝・遺物の実測・浄書および遺構の写真撮影はそれぞれの担当者が行った。空中写真撮影は委託して実施した(第19次調査)。遺物の写真撮影については、業者に依頼した。

7．本書の執筆は、各担当者が分担して執筆し、編集は小野田義和が担当した。

8．整理・報告書作成作業は、各担当者が主体的におこなったが、第20次調査出土の木製品については、京都大学大学院生（現　大阪市文化財協会職員）の杉本厚典氏が実測・トレースを行った。

9．基準点測量については、委託した。
　　第19次調査……GPS測量
　　第20次調査……３級基準点測量

10．自然科学分析については、次の諸氏に依頼した。
　　第20次調査……花粉分析……株式会社パレオ・ラボ……新山雅広
　　第20次調査……樹種同定……株式会社パレオ・ラボ……植田弥生

11．調査および報告書作成にあたっては、次の方々及び団体にご協力を頂いた。記して感謝の意を表します。
　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、浅岡俊夫、古川久雄(六甲山麓遺跡調査会)、兵庫県立人と自然の博物館、(株)イチケン、福島県教育委員会・(財)福島県文化センター、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、奈良県立橿原考古学研究所、京都府教育委員会、熊谷組

本文目次

序　編 …… 1
第１章　調査経緯 …… 1
第１節　阪神・淡路大震災と埋蔵文化財 …… 1
第２節　自然環境 …… 3
第３節　歴史的環境 …… 5

第１編　住吉宮町遺跡第19次調査 …… 15
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 16
第１節　調査に至る経緯と調査の経過 …… 16
第２節　調査の方法 …… 17
第３節　基本層序 …… 17
第２章　第１遺構面の遺構・遺物 …… 19
第１節　掘立柱建物跡 …… 19
第２節　柱穴列 …… 22
第３節　石組遺構 …… 23
第４節　井戸跡 …… 23
第５節　土坑 …… 25
第６節　遺構に伴わない出土遺物 …… 28
第３章　第２遺構面の遺構・遺物 …… 30
第１節　掘立柱建物跡 …… 30
第２節　柱穴列 …… 30
第３節　土坑 …… 33
第４節　遺構に伴わない出土遺物 …… 35
第４章　第３遺構面の遺構・遺物 …… 36
第１節　古墳 …… 36
第２節　小石槨 …… 43
第３節　溝跡 …… 43
第４節　土坑 …… 43
第５章　第４遺構面の遺構・遺物 …… 47
第１節　溝跡 …… 47
第２節　土坑 …… 47
第３節　土器集中地点出土遺物 …… 47
第６章　まとめ …… 57

第２編　住吉宮町遺跡第20次調査 …… 59
第１章　調査に至る経緯と経過 …… 60
第１節　調査の経緯 …… 60
第２節　調査地の層序と調査の経過 …… 60
第２章　検出遺構 …… 62
第１節　中世～近世（第１遺構面） …… 62
第２節　飛鳥～奈良時代（第２遺構面） …… 64
第３節　古墳時代中期～後期（第３遺構面） …… 68
第３章　出土遺物 …… 70
第１節　土器 …… 70
第２節　土製品・埴輪 …… 75
第３節　木製品 …… 76
第４節　石器 …… 76
第４章　まとめ …… 80

参考文献 …… 84

附編　住吉宮町遺跡（第20次調査）自然科学分析 …… 87
第１章　出土木製品の樹種同定 …… 88
第１節　はじめに …… 88
第２節　同定の方法 …… 88
第３節　結果 …… 88
第４節　まとめ …… 90
第２章　出土した大型植物化石の分析 …… 98
第１節　はじめに …… 98
第２節　試料と方法 …… 98
第３節　出土した大型植物化石 …… 98
第４節　考察 …… 98
第５節　大型植物化石の記載 …… 100
第３章　花粉化石群集の検討 …… 103
第１節　はじめに …… 103
第２節　試料と方法 …… 103
第３節　結果 …… 104
第４節　考察 …… 105
第５節　おわりに …… 105

挿図目次

第１図　神戸市の位置と行政区分 …… 2
第２図　住吉周辺の変遷 …… 4
第３図　周辺主要遺跡分布図 …… 6
第４図　住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より西） …… 8
第５図　住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より東） …… 9
第６図　調査区内各地点土層模式図 ……18
第７図　第１遺構面遺構全図 ……20
第８図　１・２号掘立柱建物跡 ……21
第９図　１号柱穴列 ……22
第10図　１号石組遺構・１号井戸跡 ……24
第11図　１～７号土坑 ……27
第12図　第Ⅱ層出土遺物 ……29
第13図　第２遺構面遺構全図 ……31
第14図　３号掘立柱建物跡・２号柱穴列 ……32
第15図　８～15号土坑・第Ⅲ層出土遺物 ……34
第16図　第３遺構面遺構全図 ……37
第17図　１号墳 ……38
第18図　２号墳 ……39
第19図　２号墳・３号墳出土遺物 ……41
第20図　３号墳 ……42
第21図　３号墳周溝内遺物出土状況 ……44
第22図　３号墳周溝内出土遺物 ……45
第23図　１号小石槨・１号溝跡・16号土坑 ……46
第24図　第４遺構面遺構全図 ……48
第25図　２号溝跡・17号土坑 ……49
第26図　２号溝跡遺物出土状況 ……50
第27図　第Ⅴ層遺物出土状況（１） ……52
第28図　第Ⅴ層遺物出土状況（２） ……53
第29図　土器集中地点出土遺物（１） ……55
第30図　土器集中地点出土遺物（２） ……56
第31図　第Ⅴ層出土遺物 ……56
第32図　土層断面図 ……61
第33図　第３遺構面下土層柱状図 ……62
第34図　第１面遺構平面図 ……63
第35図　第２面遺構平面図 ……65

第36図　旧河道１木製品出土状況 ……66
第37図　集石遺構平面図 ……67
第38図　石組遺構平面・立面図 ……67
第39図　第３面遺構平面図 ……69
第40図　旧河道出土土器（１） ……70
第41図　旧河道出土土器（２） ……71
第42図　旧河道出土土器（３） ……72
第43図　旧河道出土土器（４） ……73
第44図　旧河道出土土器（５） ……74
第45図　石組遺構出土土器 ……74
第46図　旧河道出土土製品 ……74
第47図　旧河道出土埴輪 ……75
第48図　旧河道出土木製品（１） ……77
第49図　旧河道出土木製品（２） ……78
第50図　旧河道出土木製品（３） ……79
第51図　旧河道出土石器 ……79

表　目　次

第１表　住吉宮町遺跡周辺主要遺跡 ……7
第２表　主要遺跡一覧 ……10
第３表　住吉宮町遺跡調査一覧 ……11
第４表　第20次調査出土土器観察表 ……81

図版目次

図版１　住吉宮町遺跡第19次調査地点
図版２　１段　　第１遺構面全景（北から）
　　２段左　１号井戸跡土層断面
　　２段右　１号石組遺構
　　３段左　１号井戸跡全景
　　３段右　１号土坑
図版３　第１遺構面検出遺構
　　１段左　２号土坑土層断面
　　１段右　２号土坑全景（北から）
　　２段左　３号土坑（西から）

２段右　４号土坑
３段左　５号土坑（北から）
３段右　６号土坑土層断面
４段左　７号土坑（東から）
４段右　６号土坑全景（南から）
図版４　上　第２遺構面全景（北から）
下　第２遺構面検出地割痕（北から）
図版５　第２遺構面検出遺構
１段左　８号土坑全景
１段右　10・11号土坑土層断面
２段左　12号土坑全景
２段右　10号土坑全景
３段左　13号土坑土層断面
３段右　13号土坑全景
４段左　14号土坑全景
４段右　15号土坑全景
図版６　第３遺構面全景
図版７　上　第３遺構面全景（南から）
下　１号墳全景
図版８　上　２号墳全景
下　２号墳全景（南から）
図版９　１段　２号墳南側周溝土層断面（C-C′）
２段　２号墳東側周溝土層断面（A-A′）
３段左　２号墳南西コーナー
３段右　２号墳南東コーナー
図版10　上　３号墳全景（西から）
下　３号墳北側周溝遺物出土状況（東から）
図版11　上　３号墳北側周溝遺物出土状況（西から）
下　３号墳北側周溝遺物出土状況（北から）
図版12　上　３号墳北側周溝埴輪出土状況（東から）
下　３号墳西側周溝埴輪出土状況（北から）
図版13　上　１号小石槨全景
中　１号小石槨掘方
下　１号小石槨土層断面
図版14　上　第４遺構面全景（北から）
下　第４遺構面全景（南から）
図版15　上　２号溝跡全景
中　２号溝跡土層断面（南から）

下　２号溝跡全景（南から）
図版16　上　第Ⅴ層遺物出土状況（２）（北西から）
中　第Ⅴ層遺物出土状況（２）（南から）
下　第Ⅴ層遺物出土状況（１）（南から）
図版17　遺物包含層・４号土坑出土遺物
図版18　１号墳周溝内出土遺物
図版19　３号墳周溝内出土遺物（１）
図版20　３号墳周溝内出土遺物（２）
図版21　３号墳周溝内出土遺物（３）
図版22　３号墳周溝内出土遺物（４）
図版23　第３遺構面・16号土坑出土遺物
図版24　遺物集中地点出土遺物（１）
図版25　遺物集中地点出土遺物（２）
図版26　遺物集中地点出土遺物（３）・遺物包含層出土遺物
図版27　上　第１遺構面全景（南から）
下　第２遺構面全景（北から）
図版28　上　旧河道１上層木器集中部
下　旧河道１上層建築部材
図版29　上　旧河道１中層土器木器集中部
下　旧河道１土層断面
図版30　上　石組遺構土器出土状況
下　石組遺構完掘
図版31　上　石組遺構西壁細部
下　集石遺構
図版32　上　第３遺構面全景（南から）
下　旧河道２全景（西から）
図版33　１段左　旧河道１中層瓔出土状況
１段右　旧河道１中層鍬先出土状況
２段　旧河道１中層土器出土状況
図版34　旧河道出土土器（１）
図版35　旧河道出土土器（２）
図版36　旧河道出土土器（３）
図版37　旧河道出土土器（４）
図版38　旧河道出土土器（５）
図版39　旧河道出土土器（６）
図版40　旧河道出土土器（７）・石組遺構出土土器
図版41　旧河道出土土器（８）
図版42　旧河道出土木製品（１）

図版43　旧河道出土木製品（２）

附編挿図目次

第１図　試料採取地点（北壁）の土層断面図 ……98
第２図　試料採取地点（北壁）の土層断面図 ……103
第３図　花粉化石分布図 ……104

附編表目次

第１表　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品等の一覧表 ……92
第２表　住吉宮町遺跡第20次調査（28層）から出土した大型植物化石 ……99
第３表　産出した花粉化石一覧表 ……106

附編図版目次

図版１　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（１）
図版２　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（２）
図版３　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（３）
図版４　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（４）
図版５　出土した大型植物化石
図版６　産出した花粉化石

報告書抄録

序　　編

序　　編

第1章　調　査　経　緯

第1節　阪神・淡路大震災と埋蔵文化財

本節については、平成9年3月31日発行の平成6年度神戸市埋蔵文化財年報に、「阪神・淡路大震災と埋蔵文化財」という表題で、震災後の埋蔵文化財に関する記録が詳細に所収されている。本書においては、それをふまえて、震災の発生から半年間の状況を追ってみる。

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北東部を震源とするマグニチュード 7.2、最大震度Ⅶの激震は神戸市をはじめとして阪神、淡路地区に未曾有の被害をもたらした。6000名を超える死者、30万人を超す人々が厳しい寒さの中で避難所生活を余儀なくされた。この混乱した状況の中、被災市民への援護をするとともに、迅速なる復旧・復興に対応するため埋蔵文化財包蔵地上における被災状況の把握に努め、兵庫県教育委員会、文化庁と連絡を取り対応策を協議した。

1月25日～29日　埋蔵文化財包蔵地の被災状況の調査。東灘区から須磨区の包蔵地207カ所の内98カ所を調査し、被災面積にして234.2haにのぼることが判明。

2月7～8日　被災状況の調査資料を基に、国・県・市合同で、東灘区から須磨区の13カ所の被災包蔵地調査。

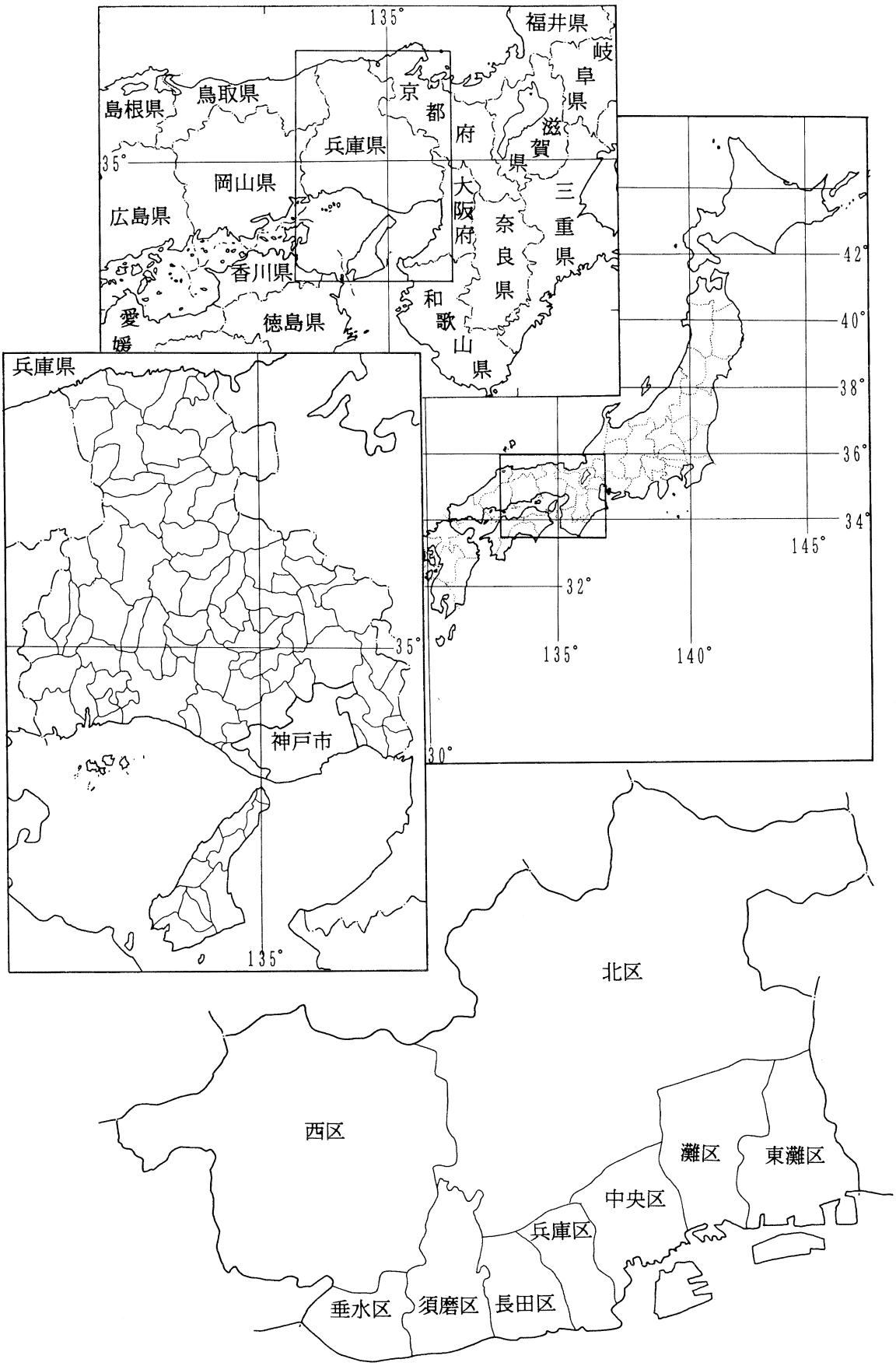
2月23日　「阪神・淡路大震災に伴う復旧工事に係る埋蔵文化財の当面の取扱いについて（通知）」（文化庁）　震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、5月末日までに着工されるライフラインの復旧等の緊急を要する復旧事業は、届出・通知を不要とする。

3月29日　「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針（通知）」（文化庁）　6月1日以降平成10年5月31日までは、復旧・復興事業により遺構が損壊される場合に限り発掘調査を実施する等の弾力的な措置を執る。

4月28日　「阪神・淡路大震災の復旧・復興に伴う埋蔵文化財の取扱い適用要領について（通知）」（兵庫県）復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の保護との整合を図ることを目的とし、個人住宅・店舗、小規模または簡易な集合住宅・事業所、生活関連公共施設、従前と規模・構造が大きく変わらない建物等の発掘調査を原則的に緩和する。発掘調査に関する費用は、公費による助成枠が拡大され、従来の個人住宅の他に中小企業者まで対象が拡大。

6月1日　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に2府15県より支援職員25名配属。（2月2日に兵庫県から全国知事会を通じての埋蔵文化財専門職員の派遣要請による）

本書で取り上げる住吉宮町遺跡は、包蔵地面積22万㎡のうち約50％にあたる11万㎡が被災した面積である。



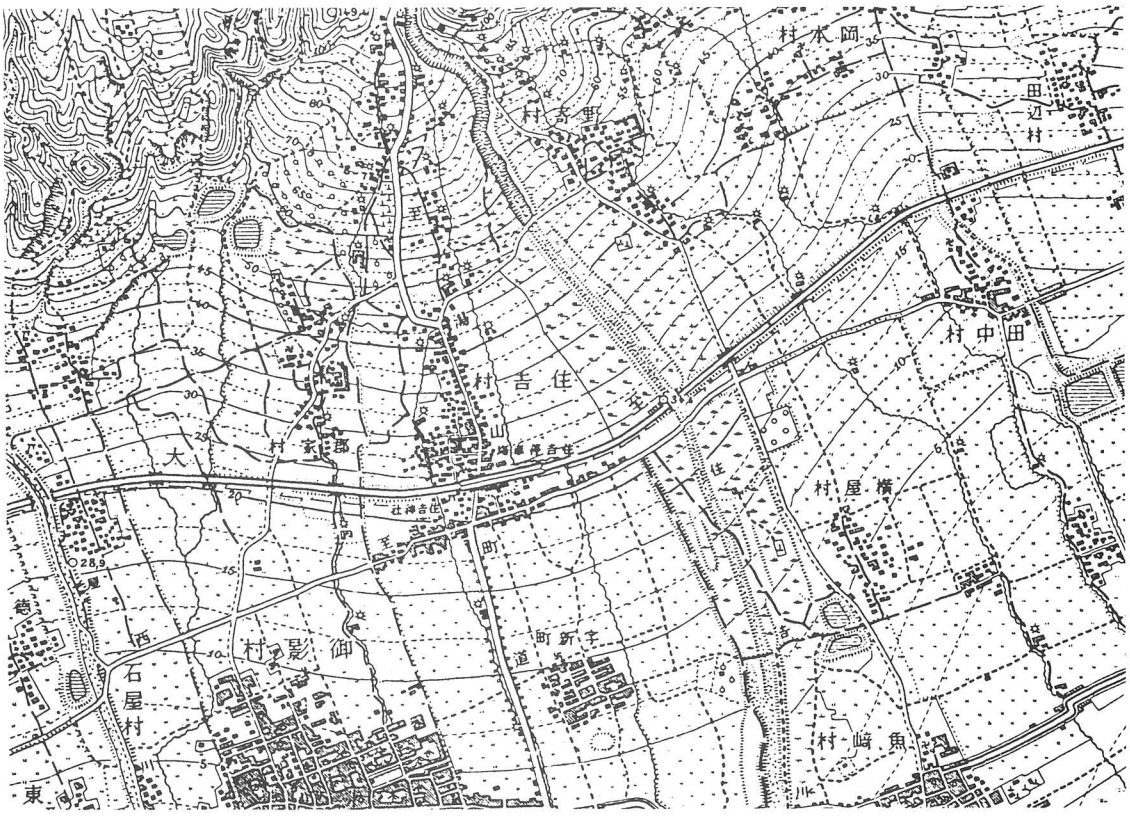
第１図　神戸市の位置と行政区分

第2節　自　然　環　境

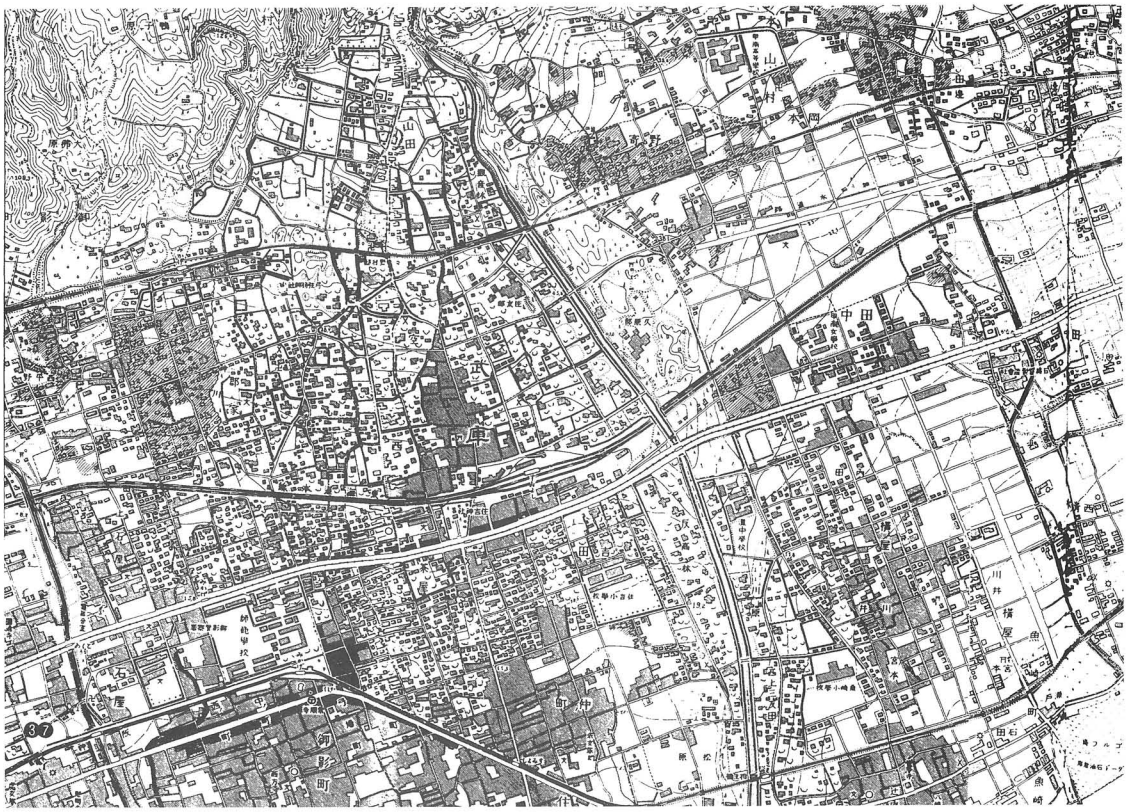
住吉宮町遺跡は、六甲山麓から南に流れる住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地の末端に近い緩傾斜地（現地標高20.0～25.0m）に立地している。北に連なる六甲山地は東西約30km、南北７kmの規模で最頂部の標高も約900mである。山腹は断層のため急峻であるが、複数の断層によって形成されていることが知られている。これら断層は破砕帯を多く伴っており、山崩れなどの誘因となっている。六甲山地の地質は主に風化花崗岩で構成されている。Ｋ－Ａｒ法による花崗岩の年代は約7300万年前の値を示す。現在我々が見ている六甲山地の前身は約120万年前にあったと考えられている。このことは淡路島を境として、大阪湾側と播磨灘側の地層が異なっていることで、その間を分けている高まりが想定されることに由来し、山上の地層からは現在の大阪湾と同様にこの時期の六甲山地もまだ海底にあった痕跡が認められている。この海底にあった六甲山の前身が断層運動によって分離される。今から50～60万年前からは「六甲変動」と呼ばれる現在の六甲山地を形成する隆起が起こったという。この隆起運動と大阪湾の沈降運動の結果、現在までの約100万年の間に1000m近い高低差を生じさせ、また、40kmに及ぶ山塊を形成させた。この隆起運動により六甲山地とそれに伴う断層が形成されていく。断層において特によく知られているものに、東灘区の五助橋断層と兵庫区から中央区にかけての諏訪山断層がある。そのうち五助橋断層は、六甲山を２つに分断する断層で、長さも10kmを測る。この断層は断層破砕帯の幅も広く、現在の住吉川はこれに沿って浸食された断層谷である。この五助橋断層を源に持つ住吉川は、六甲山地の隆起と共に現在の高さまで扇状地を形成しながら上昇していったものと考えられている。従って五助橋断層からは、礫を含む土砂が多量に流れ出ており、急速に土砂の堆積が進んでいった形跡が窺える。こうした場所では、集中豪雨などにともなう土石流が発生しやすい。このような土石流や洪水の痕跡は、発掘調査などでたびたび確認されている。

最も古い洪水の記録は慶長13（1608）年の住吉川の洪水の記録が初出である。江戸時代の六甲山の南麓では、40回を超える洪水、堤切れ、水や土砂の田畑への流入などの水害の記録がある。こうした洪水を起こしやすい六甲山の様子は、全くのハゲ山であったことを宝暦12（1762）年の幕府提出文書の写しが伝えている。また、明治初期に海上より六甲山を見た後の植物学者牧野富太郎は「・・はじめは雪が積もっているのかと思った。」と記述しているような何もない山であったようである。現在のような緑の山になったのは、明治25年（1892）に発生した土砂災害が契機になって、明治28（1895）年に植林や砂防ダムの工事が開始され、29・30年の河川法などの法制度の整備を経て、明治35（1902）年に始まる砂防植林事業の結果である。

神戸市域の気候は、比較的雨の少ない瀬戸内気候帯に属しているが、六甲山地によって南麓部分と北側ではだいぶ異なる気候状況を示す。南側の地域は山地が冬の季節風をおおむね遮断し、南面する斜面は日照も良く年間を通じて温暖である。山地の北側の有馬や道場地区は、標高200m前後と高く冬季は季節風などで冷涼である反面、夏場は盆地的高温になる。南麓は年間降水量1200～1400mmと全国平均降水量の1800mmと比べて少ない。六甲山の屏風状の形状は、南海上からの湿度の高い風を急激に上昇気流に変化させしばしば豪雨をもたらす。六甲南麓の年平均最高気温は19.7℃、年平均最低気温は11.7℃と温暖である。



①1885年（明治18年）測量　1/20000　　大日本帝国参謀本部陸軍部測量局　仮製地形図



②1932年（昭和７年）修正測量図　1/20000　　「神戸都市図」1995年　柏書房（株）より

第２図　住吉周辺の変遷

第3節　歴史的環境

住吉宮町遺跡はＪＲ住吉駅周辺に立地している。この地域は早くから市街化が進み、埋蔵文化財包蔵地であることはまったく知られていなかった。昭和60年（1985）に住吉宮町７丁目でマンション建設の際に遺物が出土し、遺跡の所在が明らかになった。その後、マンション建設や駅舎ビルの建築などに伴い18次の調査が実施され、弥生時代中期・終末期の竪穴住居や古墳時代後期の古墳群、奈良・平安時代、中世の集落等が確認されている。こうした都市開発等による発見・調査が急増しており、個々の調査面積は狭いものの徐々に、この地域における歴史解明の資料が増加しつつある。

住吉宮町の周辺地域からは縄文時代から遺跡が確認されている。隣接する芦屋市域の山芦屋遺跡では縄文時代早・前・後期の土器が出土している。また、同市の朝日ヶ丘遺跡からは前期の土器が出土している。神戸市域では、中央区の宇治川南遺跡では前期から弥生前期まで、同区雲井遺跡では前期から弥生中期まで継続している。灘区の篠原遺跡は東北地方にみられる遮光器土偶や注口土器が西日本系の土器と共伴して出土しており摂津地方の縄文晩期の標識遺跡として知られている。東灘区の本庄町遺跡と本山遺跡では晩期の土器片が出土しているが、いずれも少量の土器片の出土であり遺跡の全容を解明するものに至らない。

弥生時代になると発見例が増加する。前期前半のものでは臨海部の微高地上に立地する北青木遺跡、本庄町遺跡では弥生時代前期前半の水田遺構が検出されている。扇状地の末端部上に立地するものとしては本山遺跡などが知られている。本山遺跡からは偏平紐式四区袈裟襷文銅鐸が出土している。

弥生時代中期になると更に発見例が増加する。それに伴って遺跡の立地にも変化が認められる。臨海部では遺跡の継続が見られず、標高10m以上の扇状地上や台地上に現れる。本山遺跡や、森北町遺跡、住吉宮町遺跡がこれにあたる。さらには標高100m以上に立地する高地性集落が出現する。保久良神社遺跡は中期後半の「磐境」と考えられている。本遺跡から２km東の芦屋市会下山遺跡までの間、15に及ぶ弥生高地性集落と銅鐸・銅戈の出土地が連続している。14個の銅鐸と７本の銅戈を出土した桜ヶ丘遺跡はこの西４kmに位置している。

弥生時代後期になると郡家遺跡や森北町遺跡などにおいて、円形周溝墓あるいは方形周溝墓と考えられる遺構や、竪穴住居跡が確認されている。岡本北遺跡においても竪穴住居跡が確認されている。また低地の深江北町遺跡においては直径７～８ｍの墳丘墓が11基確認されている。

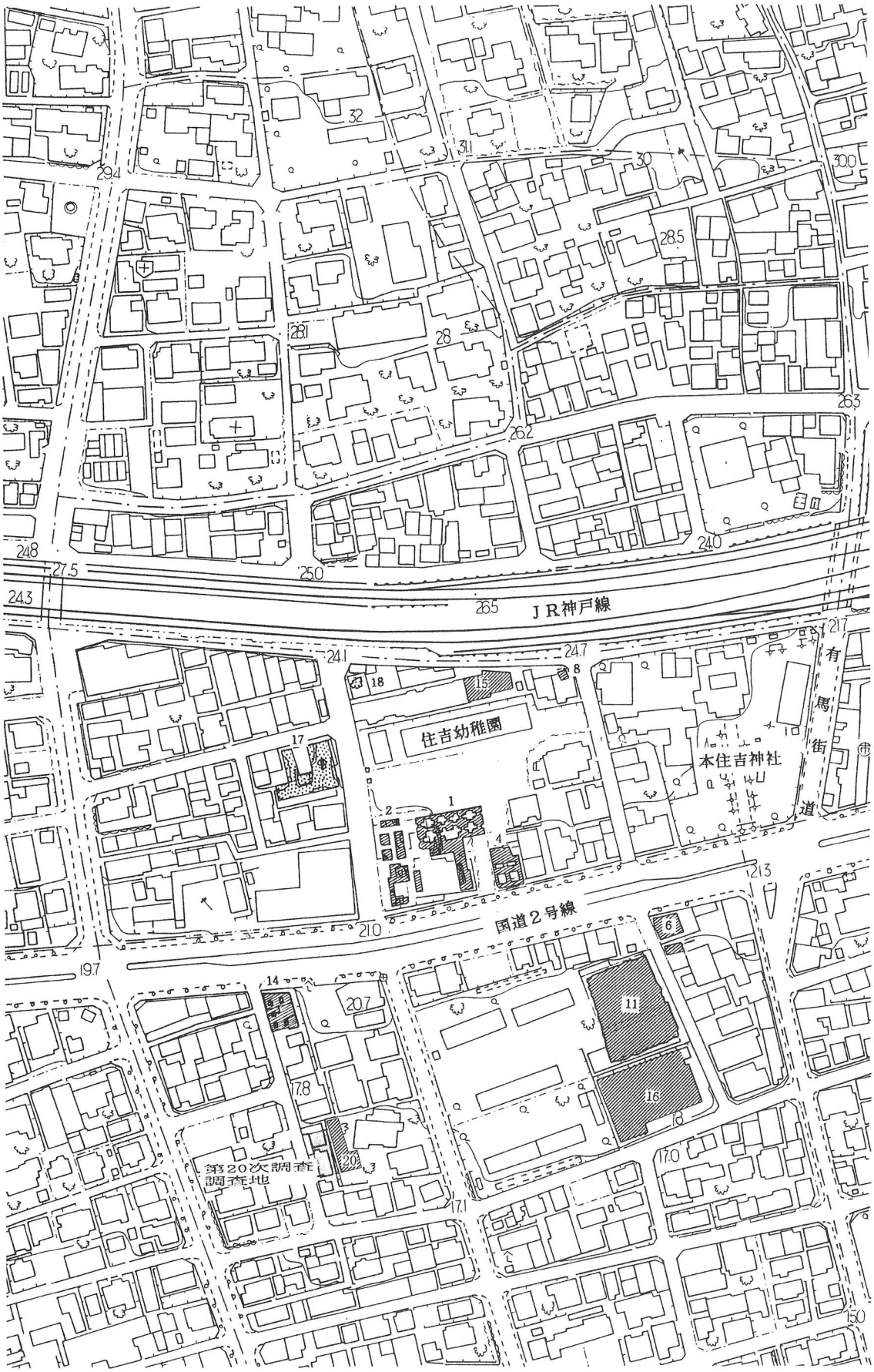
古墳時代では、ヘボソ塚古墳（64m）が前期中葉に推定され、この地区では最も古い様相を示している。その他の前期古墳としては西求女塚古墳（95m）・処女塚古墳（70m・前方後方墳）・東求女塚古墳（前方後円墳）があげられる。このうち西求塚古墳は平成６年（1994）にも調査が行われ、前方後方墳であることが確認された。この古墳は「慶長の大地震」によって墳丘盛土が地滑りをおこしていることが判明している。中期になると古墳の大型化が進み垂水区の五色塚古墳（194m）がその代表にあげられるであろう。後期では住吉宮町遺跡、岡本梅林群集墳や生駒古墳など多くの群集墳が造られている。都市化が進み、地上に出ていた墳丘は比較的早い時期から消滅している。集落では、長田区松野遺跡は柵や溝で区画された掘立柱建物跡群が確認されている。歴史時代では近隣の郡家遺跡が菟原郡衙に比定されており、古代の山陽道はこのあたりを通っていたと考えられている。

第３図　周辺主要遺跡分布図　　1/25000

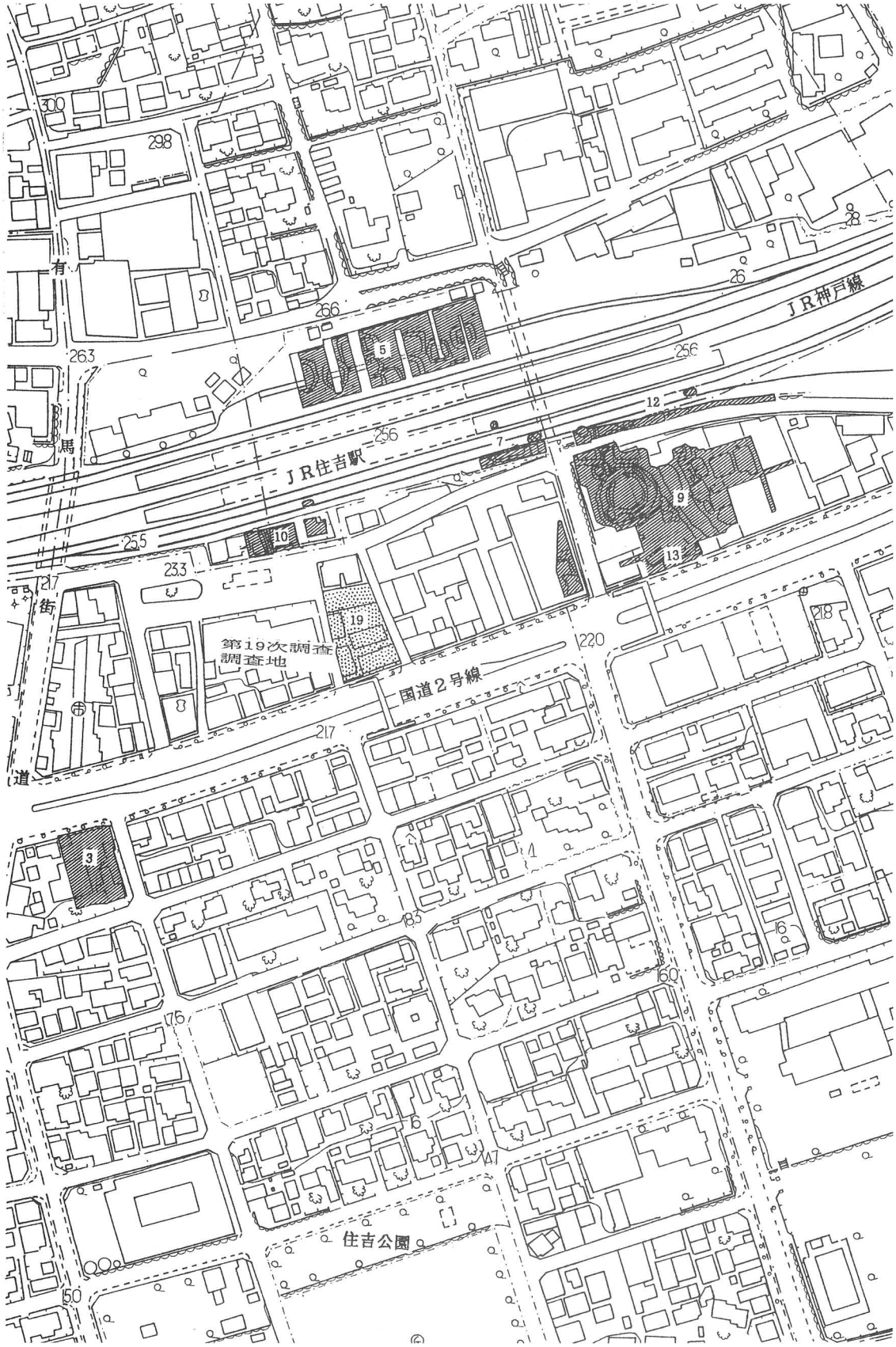
第１表　住吉宮町遺跡周辺主要遺跡

東　灘　区				灘　区			
NO	遺　跡　名	所　在　地	時　代	NO	遺　跡　名	所　在　地	時　代
1	渦ヶ森銅鐸	渦森台	弥生	3	桜ヶ丘銅鐸	高羽	弥生
2	荒神山	住吉台	弥生	4	申新田	高羽	縄文
3	赤塚山	住吉山手	弥生	5	滝ノ奥	高羽	旧石器～
4	伝　承	御影山手	古墳	6	十善寺古墳群	一王山町	古墳
5	郡　家	御影・住吉	弥生～平安	7	桜ヶ丘Ｂ地点	桜ヶ丘町	弥生
7	伝　承	岡　本	古墳	9	散布地	高羽	
8	伝　承	西岡本	古墳	11	伝　承	楠丘町	古墳
9	伝　承	住吉山手	古墳	12	伝　承	楠丘町	古墳
10	坊ヶ塚	住吉本町	古墳	20	伝　承	気田町	古墳
11	処女塚古墳	御影塚町	弥生・古墳	30	徳井町	徳井町２丁目	中世
12	東求女塚古墳	住吉宮町	弥生・古墳	32	桜口町	桜口町４丁目	中世
14	金鳥山	本山町	弥生				
15	岡本梅林古墳	岡本	古墳				
16	散布地	岡本					
17	八幡谷古墳	本山町	古墳				
18	保久良神社	本山町	弥生				
21	扁保曾塚	岡本	古墳				
22	散布地	本山北町					
36	本　山	本山中町	弥生・中世				
37	岡　本	岡本３丁目					
39	住吉宮町	住吉宮町	弥生～中世				
43	西岡本	西岡本６丁目	古墳・中世				
44	西平野	御影町西平野	弥生・中世				
45	魚崎中町	魚崎中町	古墳・中世				
46	岡本北	岡本９丁目	弥生・中世				
47	甲南町	甲南町４丁目	中世				
48	御影山手	御影山手	中世				
49	本山北	岡本１丁目	弥生～中世				

この表は神戸市埋蔵文化財分布図（平成７年３月）より抜粋して作成し、第３図周辺主要遺跡分布図に対応している。そのためこの表中では、欠番が生じている。

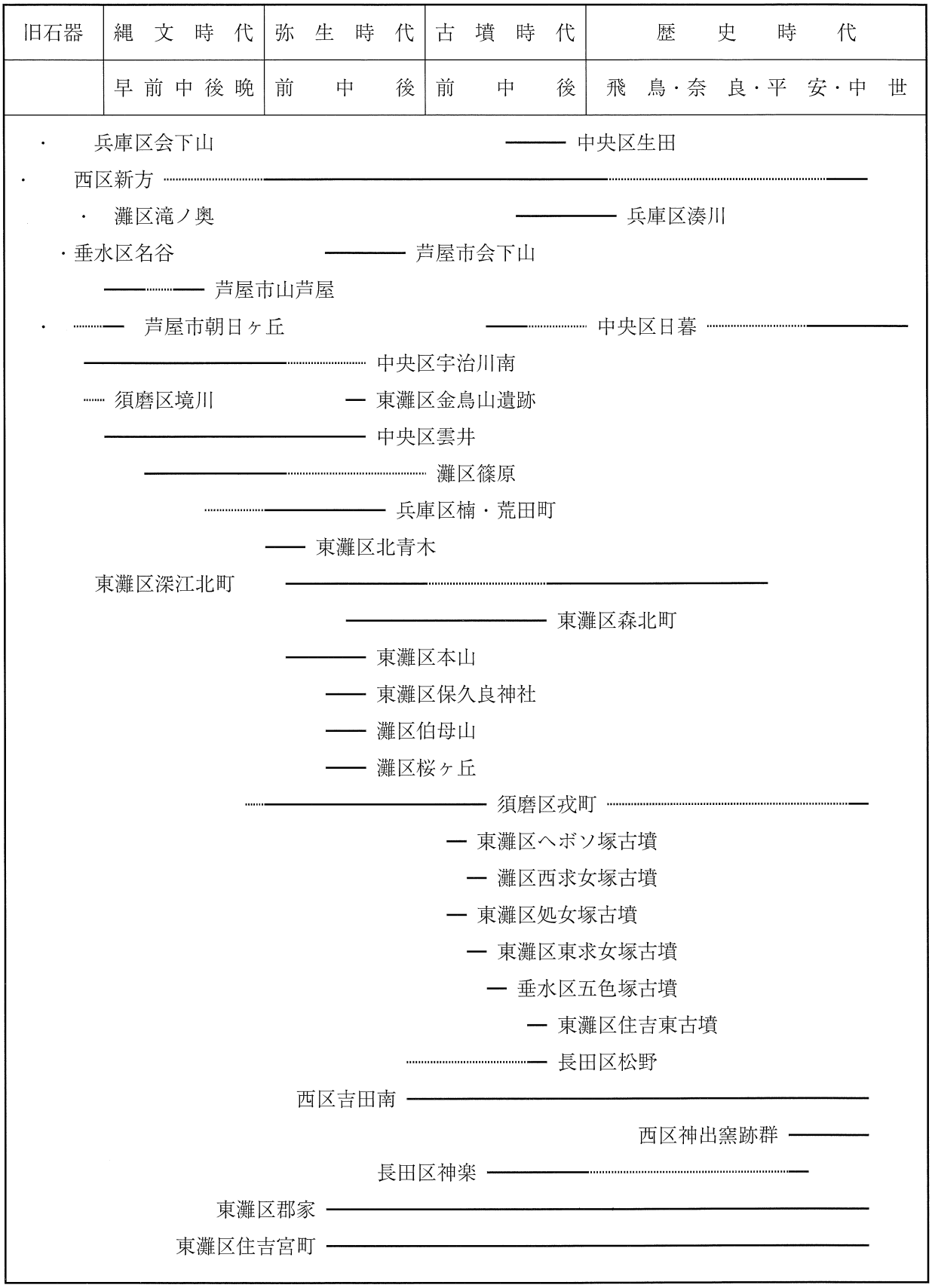


第４図　住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より西）　1/2500



第５図　住吉宮町遺跡調査地点（本住吉神社より東）　1/2500

第２表　主要遺跡一覧


旧石器
縄文時代
弥生時代
古墳時代
歴史時代
早 前 中 後 晩
前 中 後
前 中 後
飛鳥・奈良・平安・中世
兵庫区会下山
中央区生田
西区新方
灘区滝ノ奥
兵庫区湊川
垂水区名谷
芦屋市会下山
芦屋市山芦屋
芦屋市朝日ヶ丘
中央区日暮
中央区宇治川南
須磨区境川
東灘区金鳥山遺跡
中央区雲井
灘区篠原
兵庫区楠・荒田町
東灘区北青木
東灘区深江北町
東灘区森北町
東灘区本山
東灘区保久良神社
灘区伯母山
灘区桜ヶ丘
須磨区戎町
東灘区ヘボソ塚古墳
灘区西求女塚古墳
東灘区処女塚古墳
東灘区東求女塚古墳
垂水区五色塚古墳
東灘区住吉東古墳
長田区松野
西区吉田南
西区神出窯跡群
長田区神楽
東灘区郡家
東灘区住吉宮町

第３表　住吉宮町遺跡調査一覧

次	年	所　在　地	調　査　内　容
1	1985	住吉宮町７丁目	古墳時代後期の古墳３基・溝・土坑・ピット 鉄刀１・円筒埴輪・須恵器・土師器・甑・土錘 鎌倉時代の土坑、瓦器椀・白磁碗・羽釜・須恵器
2	1985	住吉宮町７丁目	古墳時代前期初頭の土坑、庄内式期の甕・壺・鉢 後期初頭の古墳８基、須恵器・円筒埴輪 後期末の河道・ピット、土師器・須恵器・円筒埴輪 ・飯蛸壺・土錘
3	1985	住吉宮町３丁目	古墳時代の溝跡、須恵器・製塩土器 中世の土坑、須恵器・土師器・瓦器・青磁碗・白磁碗 近世の石組み暗渠・ピット、陶器鉢
4	1986	住吉宮町７丁目	古墳時代前期初頭の土坑、庄内式期の甕 古墳時代後期初頭の箱式石棺３基　須恵器・土師器小型丸壺、 古墳時代後期末～奈良時代の溝跡　須恵器・土師器・円筒埴輪 土錘・蛸壺・水晶製切子玉
5	1987	住吉本町１丁目 坊ヶ塚遺跡	弥生時代末以前の水田３面以上、 後期末の方形周溝墓３基 古墳時代前期の竪穴住居跡・木棺墓・土坑墓、 後期の方墳９基・河原石積石室２基・水田 平安時代後期～鎌倉時代の掘立柱建物跡２棟など
6	1987	住吉宮町６丁目14	古墳時代・中～近世の土坑など、弥生～中世の遺物
7	1987	住吉宮町４丁目 住吉東町５丁目	弥生時代中期～古墳時代後期の水田、 弥生時代末の方形周溝墓３基、弥生土器 古墳時代後期の古墳２基・土器棺１基、 土師器・須恵器・円筒埴輪・鉄鏃・鎌 平安～鎌倉時代の遺物・・緑釉陶器・土鍋・瓦器・白磁

次	年	所　在　地	調　査　内　容
8	1987	住吉宮町７丁目	鎌倉時代のピット、須恵器・土師器・羽釜・瓦器
9	1988	住吉東町５丁目	弥生時代後期末の周溝墓１基、溝跡、庄内式期の甕 古墳時代後期の竪穴住居跡10棟 方墳３基・帆立貝式前方後円墳１基 （住吉東古墳　全長24m） 弥生時代末～古墳時代初頭の土器、 須恵器（坏・高坏・甕）、製塩土器、土師器 石製模造品（滑石製双孔・円盤・臼玉・管玉 ・紡錘車・剣型石製品・瑪瑙製勾玉） 鉄鏃、埴輪（円筒・朝顔形・人物・馬形） 奈良時代～平安時代の掘立柱建物跡９棟
10	1988	住吉宮町４丁目	弥生時代の土坑、弥生後期の土器片 古墳時代、第７次調査時検出の２基の古墳の一部確認 奈良時代の水田、溝跡 須恵器、 中世の水田、天目茶碗
11	1988	住吉宮町６丁目	弥生時代中期～古墳時代前期の竪穴住居跡６棟、 土器（第Ⅱ、Ⅲ様式、庄内式併行式）、管玉 石器（石鏃・石錐・刃器・太型蛤刃石斧・砥石） 古墳時代の竪穴住居跡４棟、庄内式～布留併行期・6C. 後半 平安時代前期の掘立柱建物跡３棟、地鎮遺構２基、 平安時代後期の掘立柱建物跡２棟、 東播系須恵器・灰釉陶器碗・黒色土器・羽釜・白磁碗 室町時代の採石跡・地震跡、備前焼のすり鉢
12	1989	住吉宮町４丁目	弥生時代の遺物包含層、 古墳時代後期の古墳３基・土坑１基・流路 奈良時代の集石遺構 鎌倉時代の石垣・溝 江戸時代の土石流痕・集石土坑

次	年	所　在　地	調　査　内　容
13	1989	住吉東町５丁目	第９次調査で地下保存をした地点（北地区）と第９次調査地に南隣した地点（南地区）の調査 北地区・・住吉東古墳の周溝、４号墳墳丘 南地区 古墳時代……古墳２基、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡１棟、土坑１基 奈良平安……掘立柱建物跡２棟、柵１条、溝５条、土坑２基、小穴20基
14	1990	住吉宮町６丁目	弥生時代後期～中世の遺物包含層 古墳時代後期の土坑 奈良時代の柱跡（建物跡）
15	1993	住吉宮町７丁目	中世の遺物包含層・土石流痕
16	1993	住吉宮町６丁目	古墳時代後期の自然流路 平安時代の掘立柱建物跡 中世末～近世初の採石跡
17	1995	住吉宮町７丁目 ４－13	弥生時代後期の遺物包含層、甕底部・椀 古墳時代後期の方墳８基、須恵器・土師器・鉄製鍬先・鉄鏃円筒埴輪・形象埴輪 古墳時代後期の竪穴住居跡16基、須恵器・土師器・砥石・滑石製紡錘車・土錘・飯蛸壺・製塩土器 飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡７棟 奈良時代の石敷道路と併行する柵、土師器・須恵器・布目瓦・円面硯 平安時代～中世の掘立柱建物跡と溝跡、土師器皿・甕・青磁皿備前甕・土鍋
18	1995	住吉宮町７丁目 ７－７	古墳時代後期の古墳１基　横穴式石室床部、須恵器・土師器

第１編　住吉宮町遺跡第19次調査

第１編　住吉宮町遺跡第19次調査

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯と調査の経過

本調査は、阪神・淡路大震災からの復興にかかる事業に伴う埋蔵文化財発掘調査である。

平成７（1995）年、東急不動産及び住吉宮町第４地区再開発準備会により、当該地を共同住宅兼店舗として開発するとの届出が当神戸市教育委員会に提出された。これを受け当教育委員会では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地（住吉宮町遺跡）の範囲内に位置することから、開発に先立ち確認調査を行って、遺跡の広がりを確認することが必要と判断した。

確認調査は、建設予定地内に試掘坑を２箇所設け実施した。試掘坑は、敷地の中央部と南部の２ヶ所に設定し、その掘削には重機と人力を併用した。その結果、両試掘坑において現地表面（標高21.8m）下1.5mまでに２ないし３層の遺物包含層を確認した。また、近接する住吉宮町４丁目―１・住吉東町５丁目―１の２地点では、現地表面下約４mで古墳時代の遺構面が確認されていることから、当該地においても同様の土層状況である可能性が高いと推測された。

この成果に基づき、当教育委員会は当該地に遺跡が広がっており、建設予定地での全面調査が必要であると判断した。調査地点は、ＪＲ住吉駅と国道２号線の中間、市街地に位置する。建設予定地は南北約40m、東西20～28mの台形状で、面積は927.11㎡である。このうち調査は、兵庫県教育委員会が各市町教育委員会に通知した「適用要領」に基づき、建設工事により遺跡が破壊されると考えられる500㎡を対象とし、平成７年12月18日より行った。

しかし、現地表面下1.1mで確認した第２遺構面の調査を終了した時点で、共同住宅兼店舗建設に伴う工事として、長さ10mのＨ形鋼材を調査区境界線に沿って打設する事となった。そのため、工事に伴い平成８（1996）年１月29日より同年３月14日まで、調査を一時中断した。その間、出土遺物や記録図面・写真の整理作業を現地事務所にて実施した。３月15日より調査を再開したが、工事にかかる地鎮祭が３月末に行われたこともあり、３月27日より４月８日まで再び調査を中断した。また、この期間には派遣職員の移動などもあり、兵庫県埋蔵文化財調査事務所で整理作業を行った。その後の調査は４月９日から５月14日まで行った。５月15日に現地事務所を撤収し現地調査を終了後、出土遺物を神戸市埋蔵文化財センターへ搬入した。遺物・図面等の実測・整理については、各自担当を決めて行い、兵庫県埋蔵文化財調査事務所・神戸市埋蔵文化財センターにて行った。遺物の写真撮影は、神戸市埋蔵文化財センターで、楠本真紀子氏が行った。遺構図版・遺物図版については、各自トレースを行い、割付作業を行った。文章原稿は、派遣元において各自執筆している。

第２節　調査の方法

調査の方法については、まず重機により現代の盛土を掘削・除去した。その後、人力により遺物包含層を掘削し、遺物採集・遺構検出・記録保存を行うといった作業を、各遺構面ごとに実施した。なお、第４遺構面の調査を終えた後、部分的に断ち割りのトレンチを設け、下層に遺構が存在しないことを確認している。

実測作業にあたっては、調査期間と遺構面数及び調査区の地形的制約を考慮し、1/40平板測量と1/10及び1/20手書き図面とを併用した。基準点については、測量会社へ委託し、調査区内に10m方眼の国土座標系に則った杭を計６本設置し、併せて水準点も設けた。（ＴＰ＝21.937m）

写真撮影作業には、35mmのモノクローム、リバーサル、ネガカラーの３種類のフィルムを随時使用した。また、第２・３遺構面調査後、無線操縦小型ヘリコプターによる空中写真撮影をそれぞれ実施している。

第３節　基本層序

今次調査地点における基本層序については、周辺の既調査地点の状況及び確認調査の結果を踏まえ、さらに調査進行途中での試掘作業に基づきその把握に努めた。

確認調査時、両試掘坑において現地表面（標高21.90m）下1.5mまでに２ないし３層の遺物包含層を確認した。確認調査では現地表面下約３m近くまでの土層状況を確認していた。また、近接する住吉宮町４丁目―１・住吉東町５丁目―１の２地点では、現地表面下約４mで古墳時代の遺構面が確認されていることから、当該地においても同様の土層状況である可能性が高いと推測された。

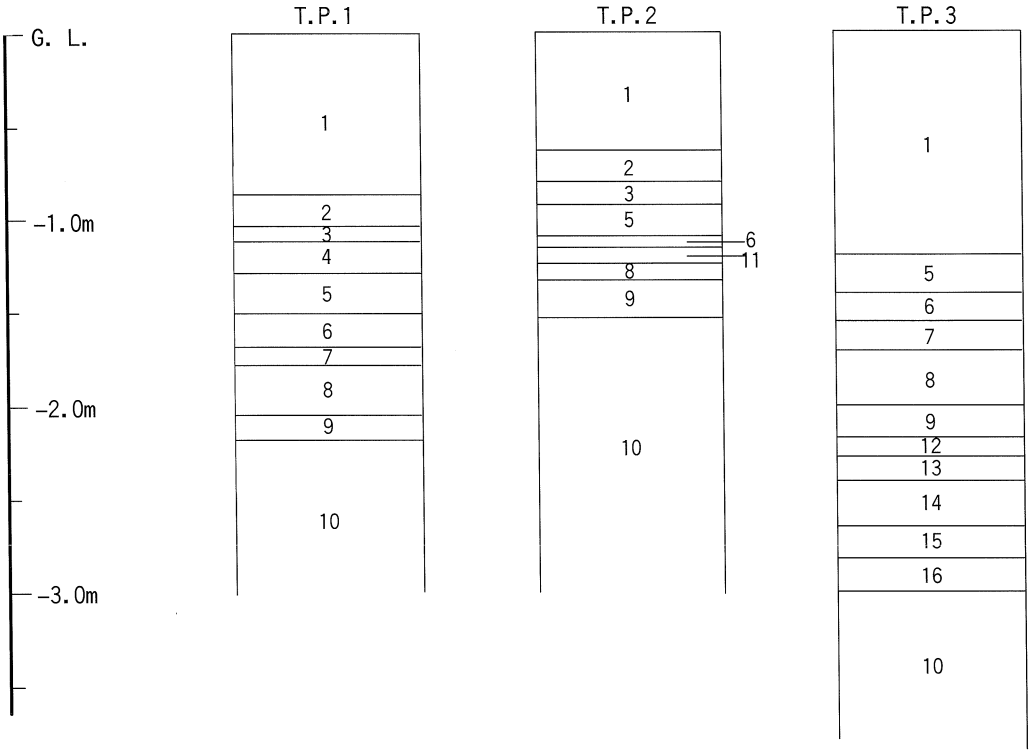
一方、調査地点北側では、従前あったパチンコ店が地下施設を有していたことから、広さ・深さとも相当程度攪乱を受けていた。調査途中で実施されたＨ形鋼材打設工事に関連し、建設工事の予定掘削深度である現地表面下６mまでの土層状況を確認する必要が生じた。そこで、調査地点北側の攪乱坑を利用して重機により掘削を行い、土層断面を観察した。

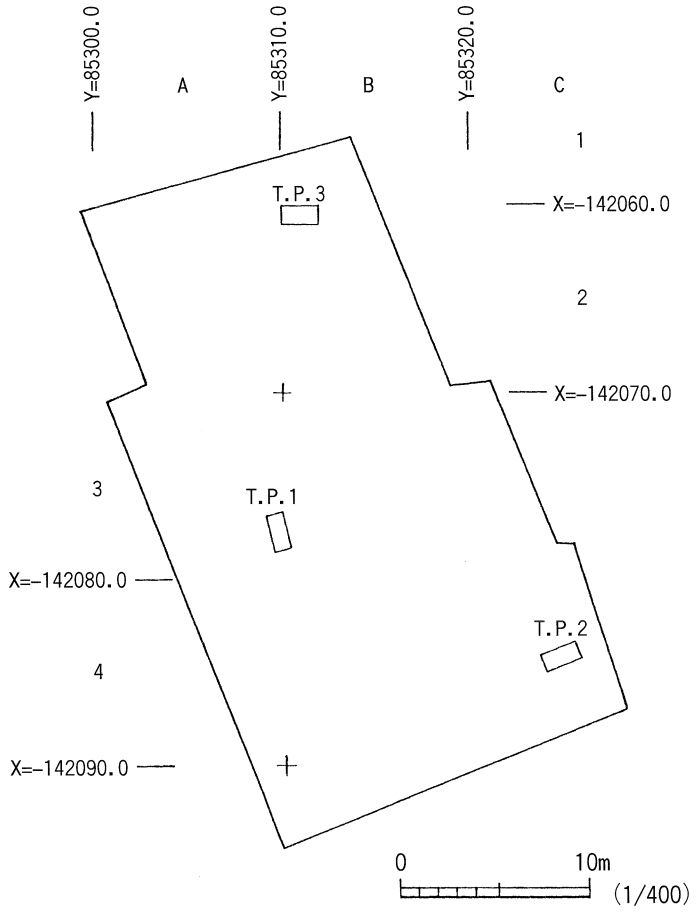
以上の作業により把握した基本層序については、第６図の通りである。まず現代の盛土層が約0.6～0.9mの厚さで存在している。この下に４層の遺物包含層があり、その下には遺物、遺構の認められない大小の礫が混じる粗い砂層が続いている。現地表面より3.0m以下では、砂層に人頭大の礫が多数混じる。なお、現代の盛土層と４層の遺物包含層を、上層より順に便宜上第Ⅰ～第Ⅴ層と呼称する。

各遺物包含層は、第Ⅱ層（淡灰色粘質砂）が中世後期～近世、第Ⅲ層（明褐色粘質砂）が古代～中世初頭、第Ⅳ層（灰褐色粘質砂）が古墳時代中期末から後期初頭、第Ⅴ層（暗灰色粘質砂）が弥生時代後期後半を中心とする時期のものとみられる。第Ⅴ層を除く各層の下部は、酸化鉄やマンガンなどを含むことの影響によるものか、赤褐色を帯びている。各層は、調査区北側から南側へ向け緩やかに傾斜して堆積していた。

各試掘溝（ﾃｽﾄﾋﾟｯﾄ）の位置は、T.P.１（X=-142077.0、Y=85310.0）

T.P.２（X=-142084.0、Y=85325.0）、　T.P.３（X=-142060.0、Y=85312.0）である。





1：盛り土
2：淡灰色粘質砂
3：明褐色粘質砂
4：灰褐色粘質砂
5：暗灰色粘質砂
6：淡褐灰色砂
7：暗褐色粘質砂
8：淡灰黄色砂
9：暗灰色砂
10：黄色粗砂（礫含む）
11：暗灰色シルト混砂
12：黄白色砂
13：灰褐色砂
14：淡黄褐色砂
15：灰褐色砂
16：灰白色砂

第６図　調査区内各地点土層断面図

第２章　第１遺構面の遺構・遺物

概　　要（第７図・図版２）　調査区のうち、北側及び西側あわせて約210㎡の部分は、既存の建築物による影響のため、ほとんど遺構・遺物をとどめていなかった。第１遺構面だけでなく、下層の遺構面も同様である。また、調査区南端部にも同様の攪乱坑がいくつか存在した。

第１遺構面で検出した遺構は、掘立柱建物跡２棟・柱穴列１条・井戸跡１基・石組遺構１基・土坑７基・ピット多数などである。遺物包含層からは、須恵器坏・高坏・甕や土師器皿・羽釜・堝・埴輪片・陶磁器碗・皿・蓋・擂り鉢などが出土した。遺物は全体的に小片が多く、また時期的にも幅がある。流水や土砂の移動・後世の耕作等による影響を受けているものと推測される。遺構出土の遺物や土層状況を考慮すると、第１遺構面の時期はおおよそ中世後期から近世と考えられる。

第１節　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第８図・図版２）

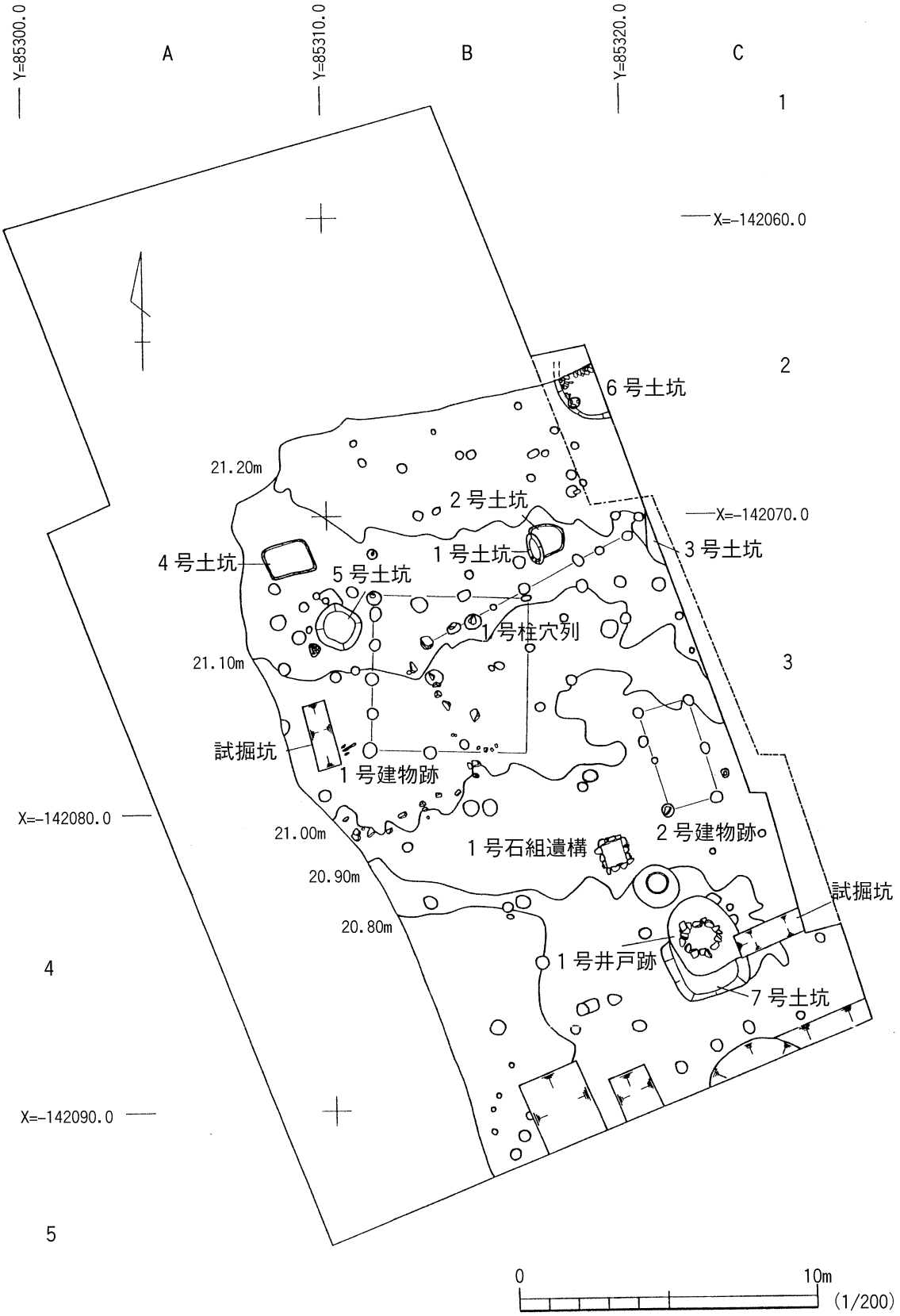
調査区中央に位置し、１号柱穴列と北東部分で交差する。Ｎ－２°－Ｅに主軸方向をとり、ほぼ南北方向に沿って建てられている。規模は、南北5.12ｍ東西5.19ｍの南北４間・東西３間であるが、東南部分の柱穴４基は確認できなかった。柱間の寸法は、南北1.18～1.54ｍ×東西1.54～2.11ｍである。北辺と南辺の柱穴の間隔にはばらつきが見られる。柱穴の配置から想定される平面正方形の建物面積は、26.6㎡になる。床面は確認できなかったが、検出面は南側へやや下がっていく。柱穴は、平面形が円形のものがほとんどで、検出面での直径は28～59㎝とやや幅がある。同じく検出面からの深さは最も深いもので21㎝と浅いが、後世の耕作等により削平されている可能性もある。一部の柱穴には、建築時に柱を固定する目的に用いたと思われる石が残っていた。

柱穴より出土した遺物はいずれも小片であるため、その時期比定は困難である。遺構面の時期から、中世後期から近世末期にかけてのものと思われる。

２号掘立柱建物跡（第８図・図版２）

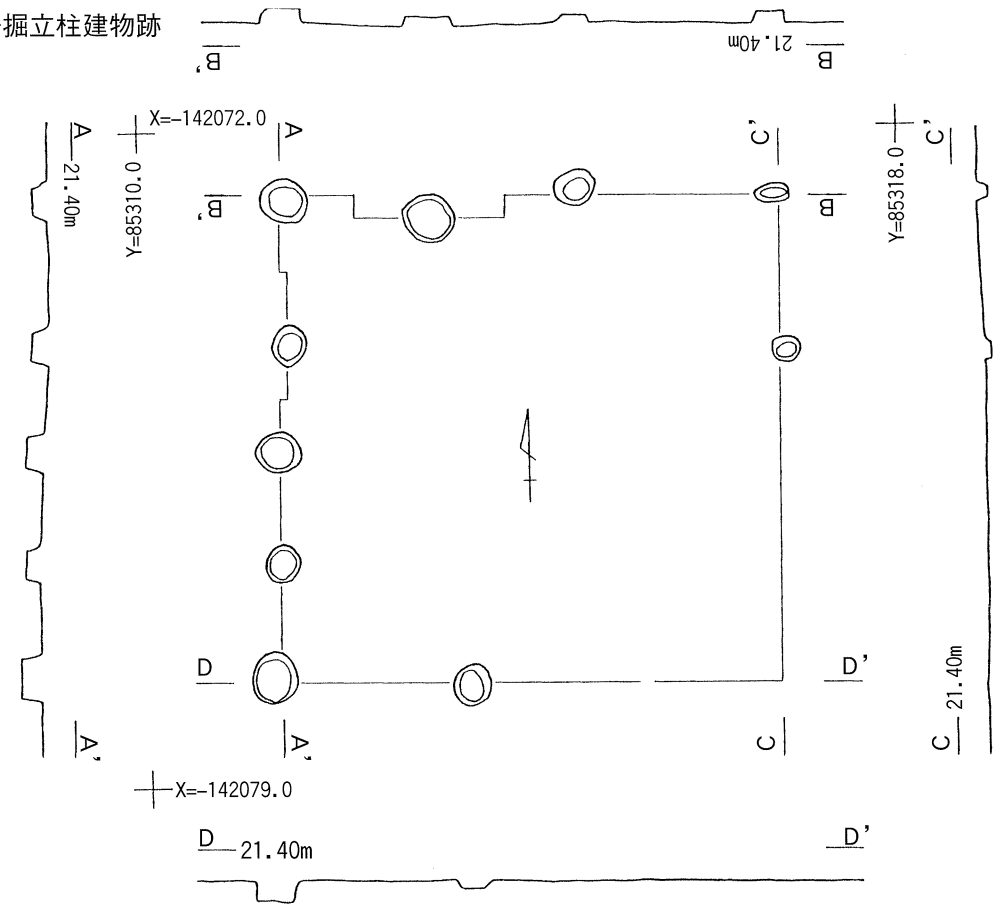
調査区東側に位置する。主軸方向はＮ－16°－Ｗにとる。後述する１号石組み遺構と主軸方向がほぼ同じである。規模は、南北3.42ｍ東西1.75ｍの２間×１間の南北棟であるが、東辺は調査区の境界に近いため、東西方向に調査区外へ広がる可能性がある。その場合、総柱建物になると思われる。柱間の寸法は、南北1.68～1.72ｍ×東西1.75ｍであり、東西と南北でほぼ等しい。建物は平面長方形になり、その面積は約6.0㎡になる。床面は確認できなかった。検出面は僅かに南側が下がっていく。柱穴は検出面での平面形が円形で、直径は１基を除き約40㎝程度である。また、柱穴の深さは最も深いもので14㎝と浅く、後世の耕作等のために削平されてしまった可能性が大きいと考えられる。南西隅の柱穴には上面の平らな石が入っていた。

柱穴からの出土遺物はいずれも小片であるため、その明確な時期比定は難しく思われる。遺構面の時期から、幅はあるが中世後期から近世末期にかけてのものと推測しておきたい。

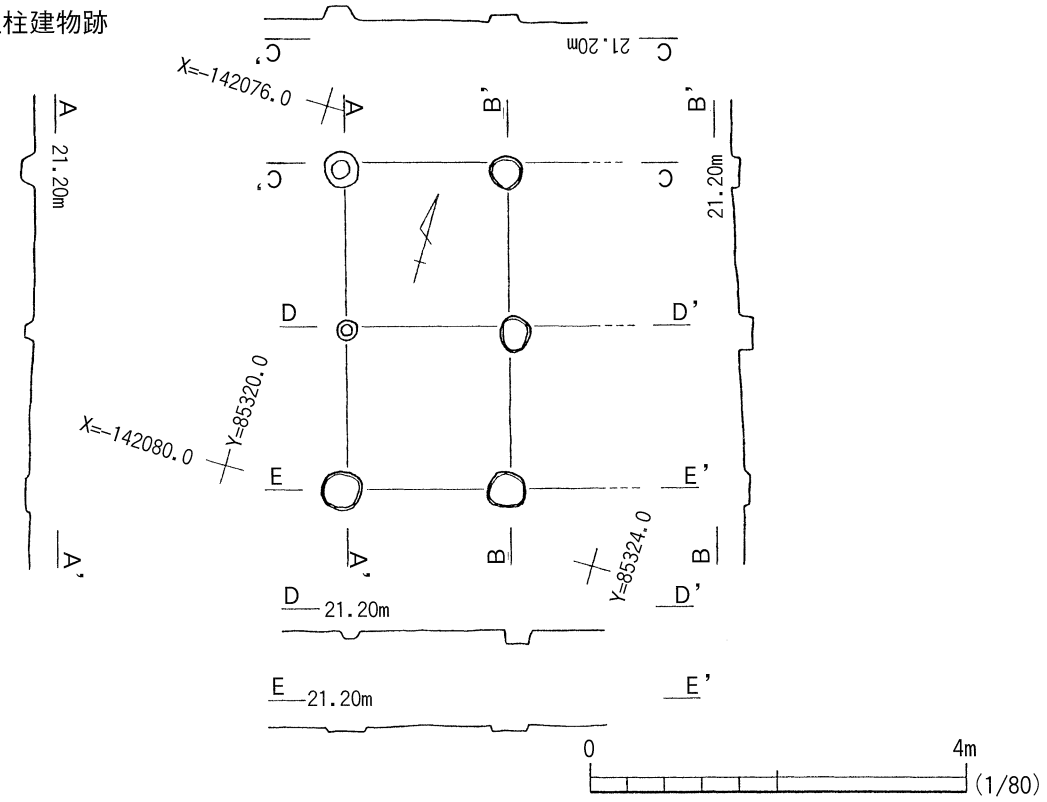


第７図　第１遺構面遺構全図

1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



第8図　1・2号掘立柱建物跡

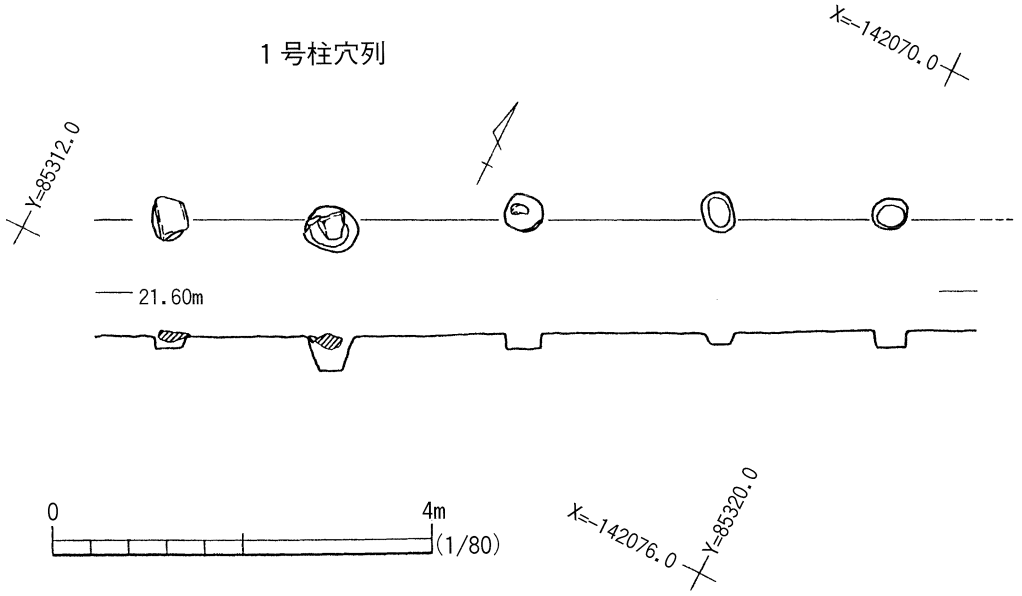
第２節　柱穴列

１号柱穴列（第９図・図版２）

調査区中央から東側にかけて東西に伸び、１号掘立柱建物跡の北辺に交差する。柱穴列の方向はＮ－63°－Ｅにとる。東端と西端の柱穴中心間距離は7.65ｍ、柱穴が1.70～2.07ｍ間隔で５個並び、４間分確認した。東端は調査区の東側境界にかかっており、さらに続けて伸びる可能性がある。

遺構検出面はほぼ水平である。検出面での柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、直径は36～57㎝とやや幅がある。柱穴直径の平均値は45㎝になる。検出面からの深さは最も深いもので37㎝であった。西側の２基の柱穴には柱を固定するのに用いたと思われる石が残っていた。

西側３基の柱穴からは遺物が出土しているが、小片であったため、時期を明確にする材料とはならなかった。１号掘立柱建物跡との前後関係も不明である。遺構面の時期から、中世後期から近世と想定しておきたい。



第９図　１号柱穴列

第３節　石組遺構

１号石組遺構（第10図・図版２）

調査区南東寄りに位置する。長辺1.52m、短辺1.22m、深さ0.47mの平面隅丸長方形の掘り方内に、人頭大の花崗岩を掘り方に沿って２段に組み上げたものである。用いられる石は長辺を横にした状態で組み上げられている。主軸の方向はＮ－17°－Ｗを示す。石組の内法は長辺0.84m、短辺0.66mである。内壁面は平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がるように揃えられているが、北側は若干外側へ傾く。

石組遺構の周囲にピットは認められず、しっかりした上屋を想定するのは難しく思われる。主軸方向が北東２ｍに位置する２号掘立柱建物跡とほぼ同じであるため、同時期に存在していた可能性もある。遺構の埋土は淡灰色粘質砂・明褐色粘質砂で、有機質を多く含むと考えられる。このように石を組み上げた土坑の機能としては、地下式貯蔵庫・便槽・水溜等が想定されよう。本遺構については、建物の外に位置する様であること、しっかりした上屋が想定しづらいことなどから、便槽あるいは水溜として使用されたと推測する。

埋土中より肥前系陶磁器が数点出土した。１は磁器染付筒型碗である。口径は6.85cmで、染め付けの呉須は淡い藍色、釉は青白色である。見込五弁花文はかなり崩れて描かれる。時期は、おおよそ18世紀代から19世紀にかけてと推定される。２は陶器小水差であり、ケズリ出し高台を持つ。蓋・身の内側および身の外側持ち手より下部は露胎であり、色調は灰白色を呈する。全体に灰色の釉がかかる。他には、陶器鉢の破片が出土しているが、小片のため図化し得なかった。

出土遺物より概ね18～19世紀代に属する遺構と見られる。

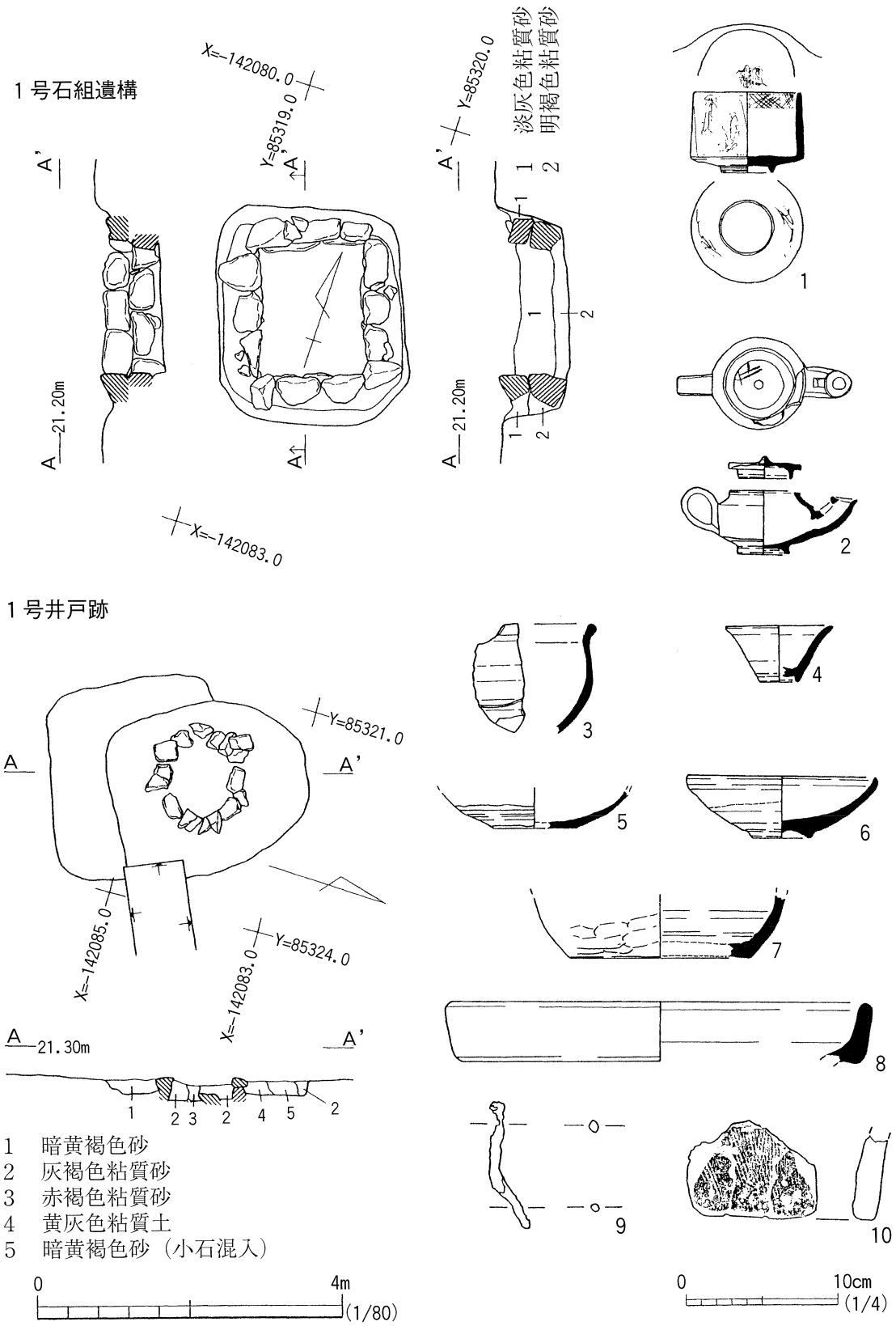
第４節　井戸跡

１号井戸跡（第10図・図版２）

調査区南東部に位置する。掘り方南東隅は、試掘坑により失われている。南側は７号土坑の北半と切り合う格好になり、土層観察から１号井戸跡が新しいことがわかる。北西には現代のコンクリート枠の井戸が存在するが、周辺には上屋を構成していた可能性のある柱穴などは見受けられなかった。主軸の方向はＮ－26°－Ｗを示す。掘り方は長径2.59m、短径2.19mを測り、埋土は暗黄褐色砂である。掘り方のほぼ中央に、直径約1.5mの円形に石が数段組まれていた。石組内側に幾つか石が落ち込んでいたが、廃絶時に石組上部から落ちたものであるかどうか、状況は不明である。使用される石には30～40cm程の花崗岩が多いが、形状にはばらつきがある。石組の北側では、外側から黄灰色粘質土をあて固め補強している様子が観察された。

出土遺物は、３から10である。４は磁器、９は釘、10は円筒埴輪小片、他は皆陶器である。４は口径6.9cmの小坏で、高台畳付を除く全面に施釉されている。ケズリ出し高台を持つ。５は碗の底部になると思われる。底部は露胎で淡灰茶色を呈する。淡灰緑色の釉がかけられた部分には、内外面ともに細かな貫入がみられる。６は肥前系の皿で、淡いオリーブ色の釉が見込みから外面体部半ばまでかかる。ケズリ出し高台を持ち、口径は12.3cmになる。３・７は鉢である。３には黒茶褐色の釉がかけられ、内側に鉄分の付着が認められる。７は底径11.0cmであり、焼成はよい。８は焙烙鍋の口縁部である。口径は27.0cmで、色調は淡灰橙色である。９は長さ8.65cm、周囲に砂が固着しており、中央で曲がっている。10は底部片で、残存部の高さは5.6cmになる。色調は淡灰橙色、焼成はよい。内面にはナデ調整がなされ、底部調整は認められない。周辺からの流れ込みによるものであろう。

時期は、陶磁器を中心とする出土遺物より近世後期から近代にかけてと考えられる。



第10図　1号石組遺構・1号井戸跡

第５節　土坑

１号土坑（第11図・図版２）

調査区東側で検出した平面長楕円形の土坑である。主軸の方位はＮ－11°－Ｗにとる。長径108㎝、短径49㎝、深さ11㎝を測る。断面は台形を呈し、底面は平坦である。東側壁面は、西側壁面より垂直に立ち上がる。２号土坑とは切り合い関係にあり、土層断面から２号土坑より新しいことを確認した。埋土は淡灰色粘質砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

２号土坑（第11図・図版３）

調査区東側に位置する、ほぼ円形の土坑である。主軸の方位はＮ－13°－Ｗにとる。規模は長径131㎝、短径122㎝、深さ19㎝である。断面は台形、底面は東側が幾分高くなる。切り合い関係からは１号土坑より古いと見られる。

遺物は１の須恵器甕が出土している。口径は22.8㎝、口縁端部はナデ調整がなされる。流れ込みによるものであろう。

３号土坑（第11図・図版３）

調査区東端に位置し、かなりの部分が調査区外となる。そのため、平面形は不明である。調査区境界にかかる部分で長さ202㎝、深さ24㎝であり、底面はほぼ平坦である。断面は船底状になる。淡灰色粘質砂の埋土には小石が多く混入していたが、遺物の出土は認められなかった。また１号柱穴列と重なる位置にあるが、時期的な前後関係については不明である。

４号土坑（第11図・図版３）

調査区北西寄りで検出した平面長方形の土坑である。主軸の方位はＮ－75°－Ｅにとり、長辺157㎝、短辺116㎝である。深さは７㎝と浅い。断面をみると、西側には明瞭な立ち上がりが認められない。埋土は淡黄色の粗い砂であった。

出土遺物はなかったため、時期は不明である。

5号土坑（第11図・図版3）

調査区中央に位置する。東側には1号掘立柱建物跡があり、土坑周辺にもピットが幾つかみられる。うち南東のピット内には小石が多数入れられていた。位置からは1号掘立柱建物跡との関連が推測されるが、明確には判明しない。土坑の平面形はほぼ円形を呈する。N－15°－Eに主軸の方位をとる。規模は長径158cm、短径146cm、深さ19cmである。断面は皿状になり、底面は中央へ向け緩やかに下がっていく。淡灰色粘質砂の土坑埋土からは、遺物の出土が見られなかった。そのため時期は不明である。

6号土坑（第11図・図版3）

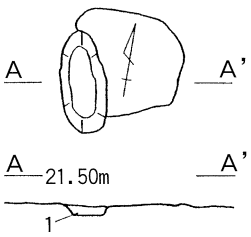
調査区東端に位置する。北側が攪乱部分に、東側が調査区外にかかっており、全体の大きさは不明である。残存部分では、東側の長さが187cm、北側の長さが148cm、深さ17cmである。北側には小石がまとまってみられる。底面はほぼ平坦である。埋土は淡灰色粘質砂が中心で、一部に暗灰褐色粘質土や灰色砂が堆積している。

出土した遺物には、須恵器や土師器の小片と共に2・3がある。2は陶器鉢あるいは甕の底部である。底径は21.6cm、外面の色調は淡赤褐色である。3は陶器片口擂り鉢である。口径は18.7cm、底径は10.8cm、器高は9.7cmになる。底部外面にはケズリが施される。間壁編年のⅣ期後半に比定され、15世紀後半から16世紀初頭にかけてのものであろう。

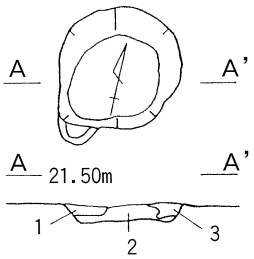
7号土坑（第11図・図版3）

調査区南東で検出した。北側に位置する1号井戸跡によって、かなり壊されている。残存する部分から、平面隅丸長方形の土坑であったとみられる。N－63°－Eに主軸の方位をとる。規模は、長辺約260cm、短辺約240cm、深さ12cmである。底面は幾分中央へ向け下がり気味になる。埋土は淡灰色粘質砂である。

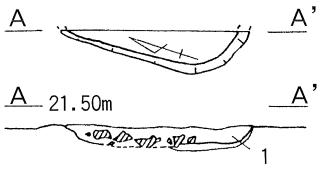
遺物の出土はなかったため、時期は不明である。



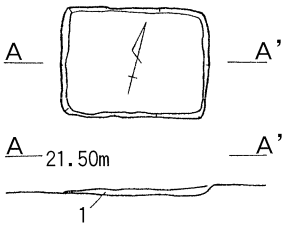
1号土坑
1　淡灰色粘質砂



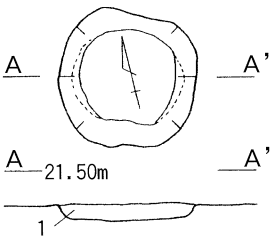
2号土坑
1　淡灰色粘質砂
2　明灰色粘質砂
3　明黄白色粘質砂



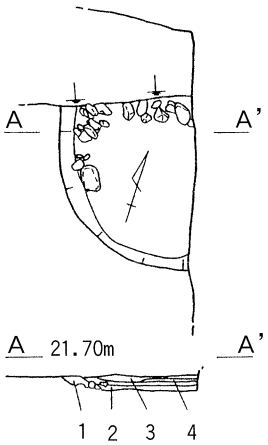
3号土坑
1　淡灰色粘質砂(赤茶色粒混入)



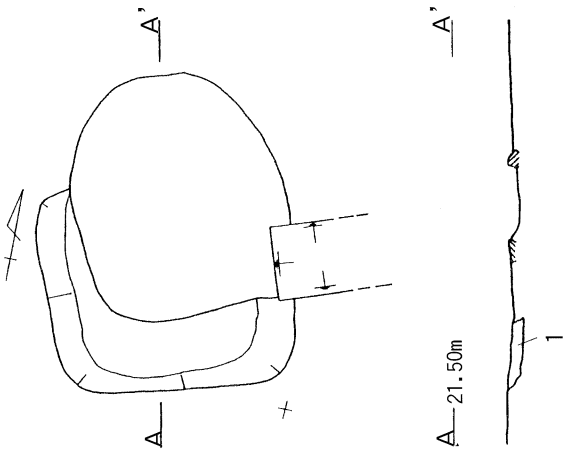
4号土坑
1　淡黄色砂



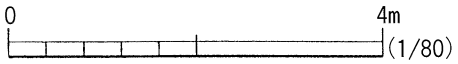
5号土坑
1　淡灰色粘質砂

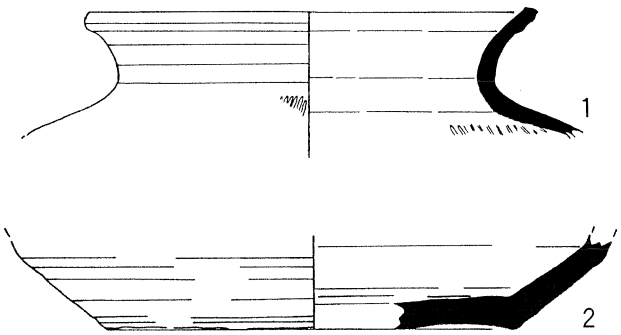


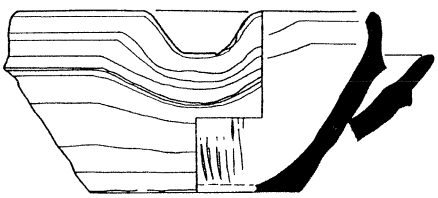
6号土坑
1　暗灰褐色粘質土
2　淡灰色粘質砂
3　淡灰色粘質砂(赤茶色粒混入)
4　灰色砂



7号土坑
1　淡灰褐色粘質土







第11図　1～7号土坑

第６節　遺構に伴わない出土遺物

概　要　第１遺構面を調査していく過程で、遺物包含層である淡灰色粘質砂層より様々な遺物が出土した。図化できたものは第12図に、一部は写真図版17に掲げる。時期的にも弥生時代後期後半から近世までと幅があり、流入したものが多く含まれるとみられる。

遺　物（第12図・図版17）

１から16は須恵器である。１・２・３は坏蓋である。２は口径11.4cm、６世紀末頃から７世紀前半のものと考えられる。１にはかえりが認められない。４から８はいずれも底部片である。４・５は台付甕の底部と思われ、５は４より底部が厚い。６から７は坏身だと考えられる。９から14は甕の口縁部である。12には自然釉がかかり、口縁部の波状文が不明瞭になっている。12・13・14では口縁部上端が平坦にされる。15は高坏の坏部であろうか。口径は16.4cm、色調は灰白色である。体部から口縁部へはまっすぐに伸びる。16は広口壷で、口径9.6cm器高10.4cm。底部には回転ヘラ切りの痕跡が観察される。部分的に自然釉がかかっている。

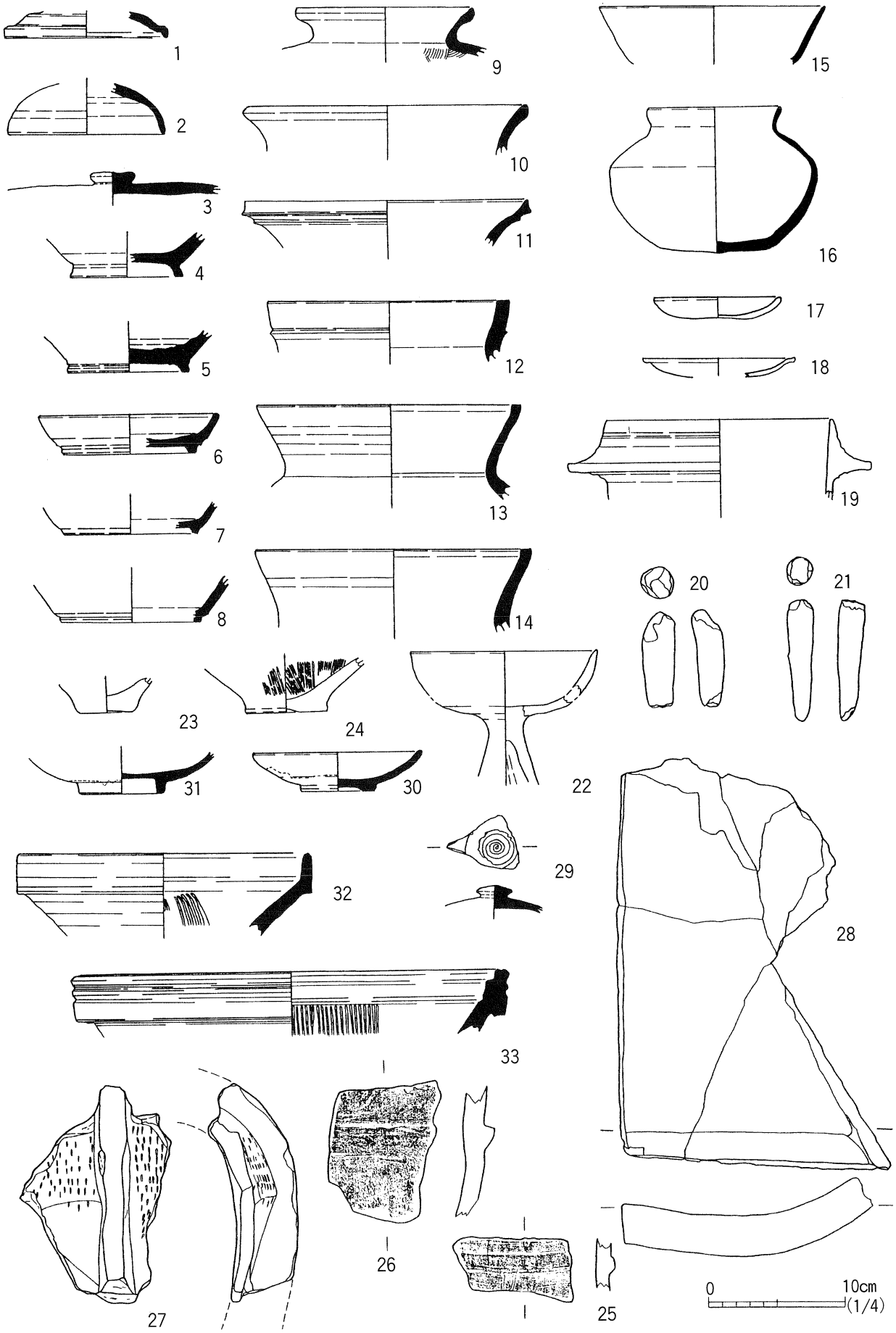
17から22は土師器である。17・18は皿である。17は底部の中心付近がやや薄くなり、僅かにへこむ。口径は9.2cm、胎土には0.1cm大の砂粒を含む。18は口縁部が屈曲する、いわゆる「て」字状の口縁の皿である。口径は11.2cm、色調は淡橙色である。10世紀後半から11世紀初めのものと思われる。19は羽釜で、口径は16.4cm、鍔径は22.2cm。鍔は器壁に対し、垂直に伸びる。20・21は脚部片である。20は淡黄褐色、21は茶褐色を呈する。22は高坏である。坏部の口径は13.6cm、脚柱部の頸径は2.7cmになる。坏部内面及び脚柱部外面はミガキ調整がなされる。

23・24は弥生土器の底部片である。23は底径3.8cmで、表面が磨耗している。底部中央はややへこむ。24の底径は5.8cm、底部中央は円形にへこむ。内外面ともにタタキが施され、内面のタタキは左回りである。23・24とも畿内Ｖ様式後半のものであろう。

25・26・27は埴輪片である。25・26は円筒埴輪片で、内面にはナデ調整がなされ、タガは断面台形である。いずれも焼成は良く、胎土には0.1mm大の砂粒が含まれる。26は復元すると直径48cm前後になりそうである。調整やタガの形状から、時期は５世紀代と考えられる。27は形象埴輪片であろう。色調は明茶色でやや赤みがかかり、焼成は良好である。残存部分の高さは16.1cmになる。馬の鞍の一部分にあたると推測される。

28は、瓦である。現存部分の長さが30.3cm、幅19.8cm、厚さ3.0cmの平瓦である。表面は滑らかに仕上げられている。時期は中世以降になると思われる。

29から33は陶磁器である。29は陶器つまみ付き蓋の一部分で、内側は露胎である。焼成は良い。30は陶器皿で、口径12cm、高さ2.9cm。内面から口縁外面には淡緑色の釉が施され、見込みには熔着痕が残る。高台はケズリ出される。31は陶器の皿もしくは碗の底部である。高台径は5.8cm、高台畳付から高台内は露胎である。32・33は陶器擂り鉢の口縁部片である。32は口径20.9cmで焼成は良い。口縁部はまっすぐ立ち上がり、端部は丸くおさめる。15世紀から16世紀初頭にかけてのものと思われる。33は口径30.4cmとやや大きく、色調は赤褐色である。立ち上がった口縁部外面には凹線が二条めぐらされる。また口縁部内面には段が付けられる。時期は近世のものであろう。



第12図　第Ⅱ層出土遺物

第３章　第２遺構面の遺構・遺物

概　　要（第13図・図版４）　検出遺構は、掘立柱建物跡１棟・柱穴列１条・土坑８基などである。また、遺構面上全体で下層の土砂が筋状に見られた。推測ではあるが、地震により生じた亀裂へ下層の土砂が吹き上がった痕跡にも見受けられる。第１遺構面では確認できなかったもので、近世以前であろう。

遺物では、多数の須恵器片に混じり、土師器皿・高坏・土錘・黒色土器碗などが出土しているが、小片が多い。遺構面の時期は、平安から中世前期といったところが考えられる。

第１節　掘立柱建物跡

３号掘立柱建物跡（第14図・図版４）

調査区中央東寄りに位置し、東側に主軸方向をほぼ同じにとる２号柱穴列が存在する。Ｎ－19°－Ｗに主軸方向をとる。規模は、南北6.00ｍ東西3.22ｍの南北３間・東西２間であるが、北東隅・南辺中央の柱穴２基は確認できなかった。調査途中のトレンチにより部分的に検出したピットもある。建物跡の柱間の寸法は、南北1.27～2.66ｍ×東西1.83ｍである。東辺の柱穴の間隔にはばらつきが見られる。これから想定される平面長方形の建物面積は、19.3㎡になる。床面については確認できなかったが、検出面はやや南へ傾斜している。また、１基を除く全ての柱穴が２段になっていた。検出面での柱穴の多くは方形で、長軸の長さは41～70㎝とやや幅がある。同じく検出面からの深さは最も深いもので19㎝と浅い。そのため、後世の耕作等により削平されている可能性が高い。

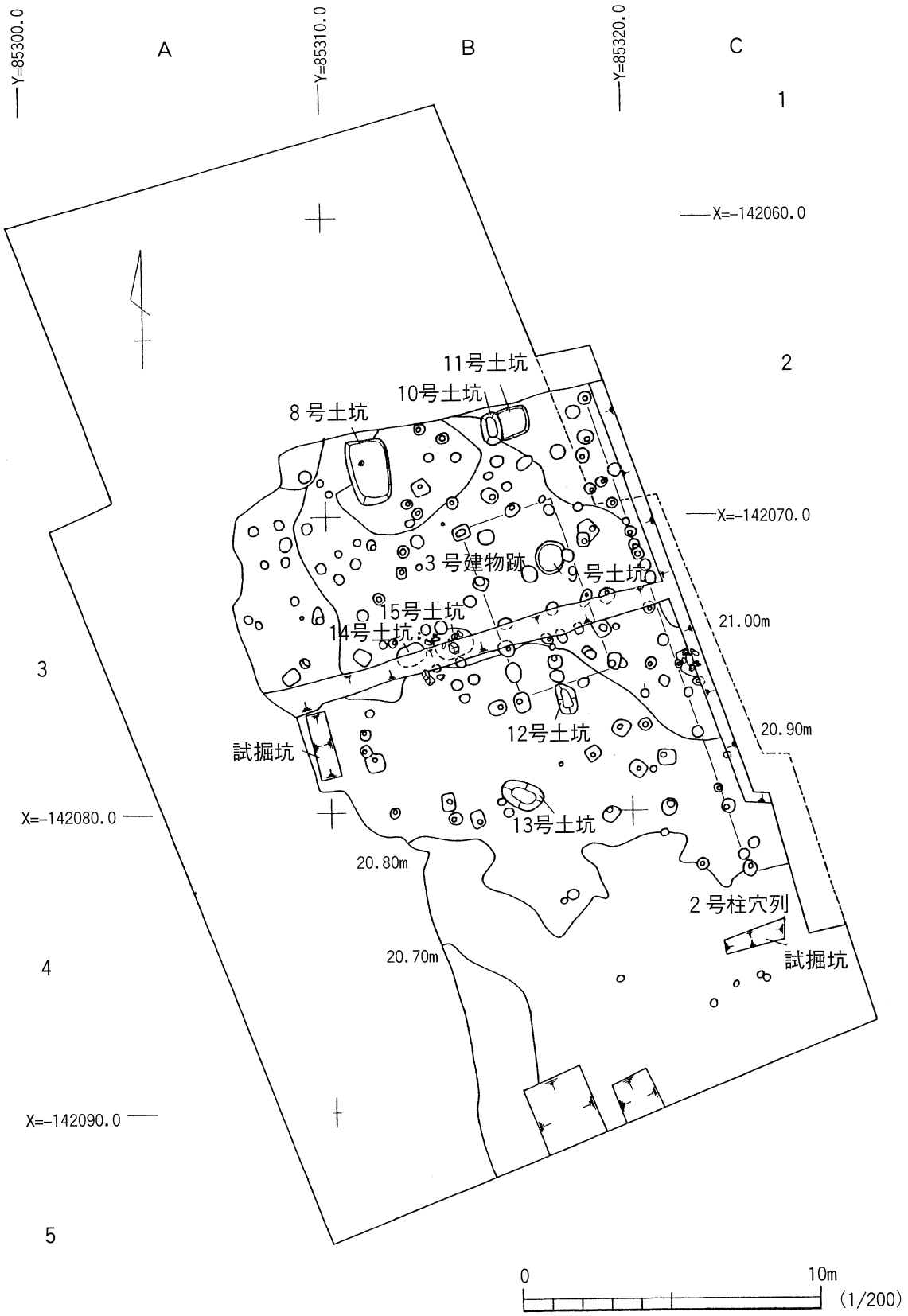
柱穴より出土した遺物はいずれも小片であるため、その時期比定は困難である。時期は、柱穴の形状などから平安時代のものと考えられる。

第２節　柱穴列

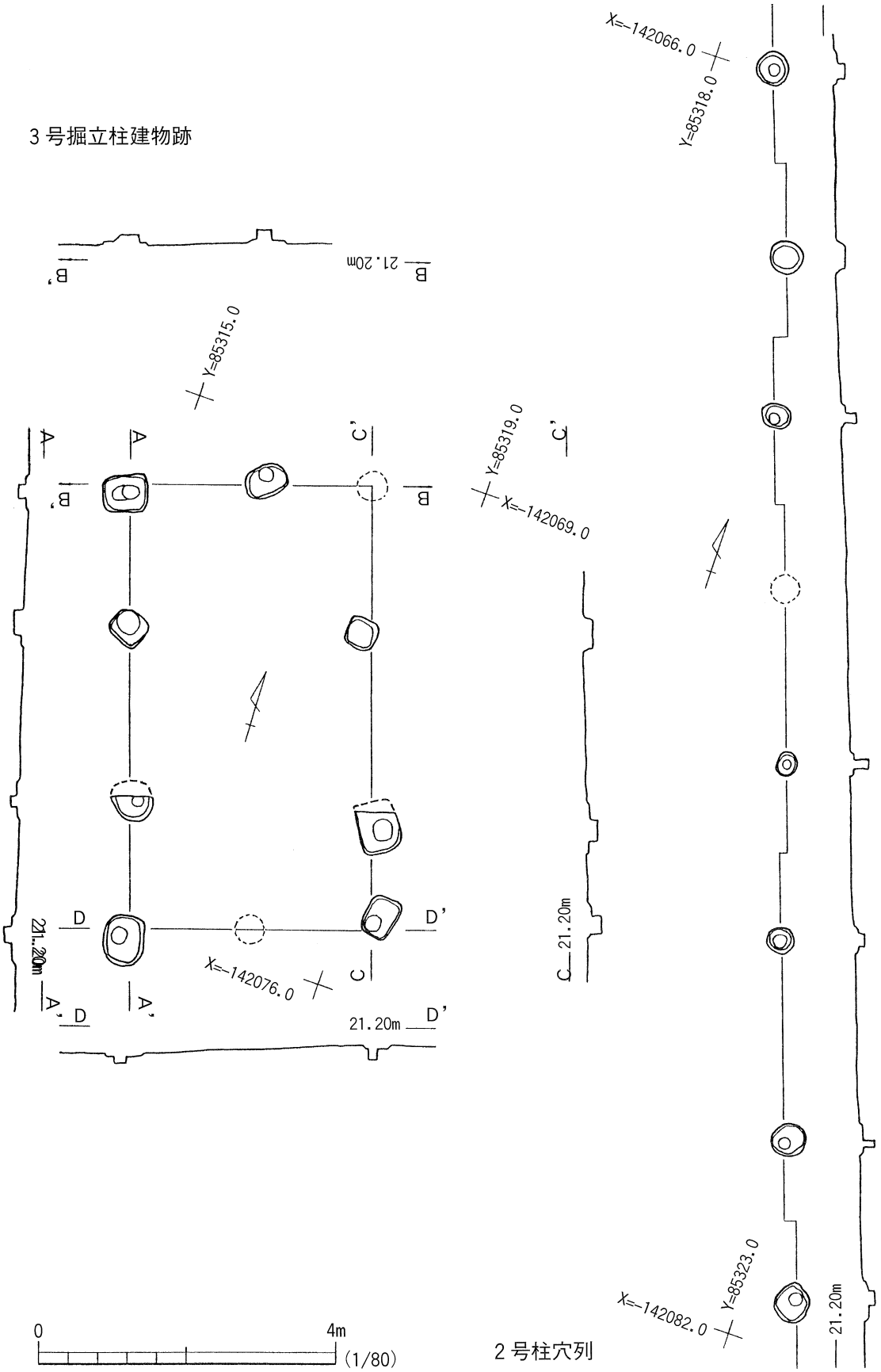
２号柱穴列（第14図・図版４）

調査区東側に位置し、３号掘立柱建物跡の東辺に沿って南北方向に伸びる。Ｎ－28°－Ｗに主軸方向をとる。全長は16.63ｍ、柱穴が2.11～2.72ｍ間隔で７基並び、７間分確認した。ただし、北側から３番目の柱穴と４番目の柱穴の間には、トレンチにより柱穴の存在を確認できなかった。北端は既存の建築物による攪乱部分にかかっており、まだ延びる可能性がある。この柱穴列は３号掘立柱建物跡のすぐ東側に位置しており、建物跡にともなう柵であったとも考えられる。検出面は建物跡同様北側から南側へ若干下がっている。北から２番目の柱穴を除き、柱穴は皆２段に掘られていた。柱穴の平面形は円形ないし楕円形で、その直径は34～46㎝、平均して43㎝である。検出面からの深さは最も深いもので25㎝になる。

いくつかの柱穴からは遺物が出土しているが、小片であったため、時期を比定する材料とはならなかった。３号掘立柱建物跡との位置関係から、時期も同じであると想定しておきたい。



第13図　第２遺構面遺構全図



第14図　3号掘立柱建物跡・2号柱穴列

第３節　土　坑

８号土坑（第15図・図版５・17）

調査区北側、攪乱部分近くで検出した。平面形は長方形で、南側の両隅は丸くなる。主軸の方位はＮ－14°－Ｗにとり、規模は長軸213cm、短軸138cm、深さ20cmである。断面は台形になり、底面は僅かに西側へ傾斜している。埋土は淡灰色粘質砂であり、下層には酸化物が沈澱したとみられる赤茶色粒が混入していた。

出土遺物は、１と２である。１は、内面黒色・外面灰白色の黒色土器碗である。口径は13.7cm、底径は6.4cm、器高は5.2cmである。森隆氏の編年では畿内系Ⅲ類に属し、時期は10世紀初頭から後葉にかけてと思われる。２は土師器甕の口縁部である。口径は17.2cm、胎土には0.5mm程度の砂粒を含む。

出土遺物から、この土坑の時期は９世紀から10世紀にかけてと考えられる。

９号土坑（第15図）

調査区東側に位置するほぼ円形の土坑である。また、３号掘立柱建物跡の内側に位置しているが、一部を建物跡の柱穴により切られていることから、建物跡より古い時期に掘られたものと考えられる。規模は直径105cm、深さ6cmであり、かなり浅い。遺物が出土していないため、明確な時期はわからないが、遺構面の時期範囲に収まるものであろう。

10号土坑（第15図・図版５）

調査区北東寄りに位置し、平面長方形の土坑である。主軸方位はＮ－17°－Ｗにとる。長軸157cm、短軸100cm、深さ10cmといった規模である。東側の11号土坑を切って作られており、11号土坑より新しい。埋土は単一で、遺物の出土はみなかった。

11号土坑（第15図・図版５）

調査区北東寄りに位置し、攪乱部分近くで検出した平面長方形の土坑である。Ｎ－73°－Ｅに主軸方位をとる。西側は９号土坑により切られているため全体規模は不明だが、残存部分の長さは東西106cm、南北70cmである。深さは10cmと浅い。埋土には部分的に赤茶色粒が混入している。出土遺物はなかったため、時期は不明である。

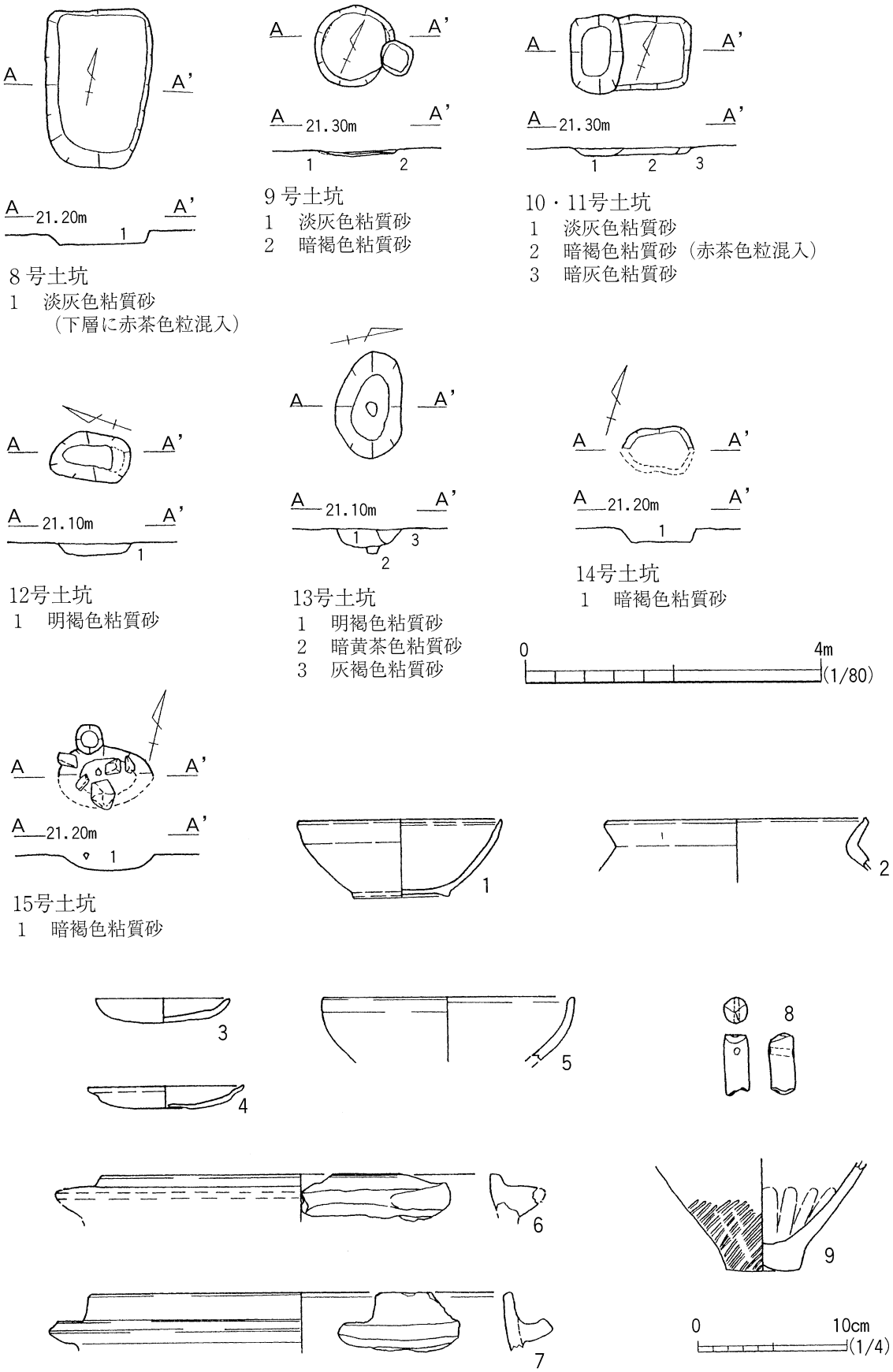
12号土坑（第15図・図版５）

調査区中央東寄り、３号掘立柱建物跡の南側に位置する。平面形はややゆがんだ楕円形を呈する土坑である。Ｎ－22°－Ｗが主軸の方位になる。規模は、長径110cm、短径63cm、深さ16cmである。底面はほぼ水平である。出土遺物には土師器があるが、細片のため時期を特定するまでには至らなかった。

13号土坑（第15図・図版５）

調査区中央南寄りで検出した。平面楕円形の土坑で、主軸方位はＮ－77°－Ｗにとる。規模は、長径142cm、短径89cm、深さ35cmになる。底面は中央へ向け緩やかに傾斜しており、中央部は、一段掘り込まれている。

若干の出土遺物があるが、皆細片であったため時期は明らかにならなかった。



第15図　8～15号土坑・第Ⅲ層出土遺物

14号土坑（第15図・図版５）

調査区中央に位置し、東側には15号土坑が存在する。調査区内に東西方向に設けたトレンチの断面観察により確認した。そのため、南側半分は失われている。残存する部分での規模は、長さ約100㎝、深さ18㎝である。埋土は暗褐色粘質砂単一であり、遺物の出土はなかった。

15号土坑（第15図・図版５）

調査区中央に位置し、14号土坑同様にトレンチ掘削後の土層断面観察により確認した。よって、南側半分が失われている。残存部分では、長さ128㎝、深さ20.5㎝になる。土坑内に多くの石が入っていることが認められた。出土遺物には須恵器・土師器があったが、いずれも小片であったため、時期は不明である。

第４節　遺構に伴わない出土遺物

遺物包含層より出土した遺物の内、７点を図化した。第15図に示したものである。

弥生土器である９を除き、他は皆土師器である。３・４は皿である。３は口径9.1㎝、器高1.6㎝である。４は口径10.4㎝、器高1.5㎝で、口縁内側に段がつくいわゆる「て」字状口縁を持つ。10世紀後半から11世紀初め頃の時期であろう。５は口径16.6㎝、高坏の坏部である。６・７はともに堝口縁部の一部である。６は口径26.4㎝、鍔の先端は欠けている。７は口径28.2㎝で、鍔は上方へ向け幾分反る。８は土錘である。９は甕の底部と思われ、底部の中央は窪んでいる。底部外面にはタタキが施される。畿内Ｖ様式後半に相当する時期のものである。

第４章　第３遺構面の遺構・遺物

概　要（第16図・図版６）　第３遺構面では、古墳３基、小石槨１基、溝跡１条、土坑１基を確認している。遺構上面まで後世の影響が見られ、遺構の残存状況は良い状態ではなかった。

第１節　古墳

古墳は３基検出された。いずれも方墳と考えられる。３基の古墳ともトレンチを入れた結果、周溝が確認されたことにより古墳の存在が確認されたほどで、周溝に堆積した砂質土と、墳丘を形成している土壌との差は平面的には判断の付きにくいものであった。

１号墳

遺　構（第17図・図版７）　調査区の東側Ｂ３～Ｃ３グリッドにかけて検出された遺構である。工事の都合で、調査区が東側に広がったために、結果的に墳丘の東側部分を排水用の側溝が縦断している。遺構は南西コーナーを中心に西側周溝、南側周溝のみの検出で、遺構の大半は調査区の外にあるものと考えられる。西側周溝の北端部分は、東側に向かって折れるような広がりを持つところから、南北10m程度の方墳と見られる。検出された周溝の幅は１～２ｍ。検出面からの深さが20cm程である。南側の周溝は、３号墳北側の周溝を切っている。周溝で囲まれた東側部分からは小石郭が検出されたが、土層断面の観察から本遺構とは直接関係はない。埋葬施設は確認できなかった。遺物は須恵器が５点出土している。西側周溝の北端部分から南に2.5ｍの所にならんだ状態で検出された。図中の遺物を示す番号は下記の実測図に相当している。２と３の須恵器は、蓋をした状態ではなく、２が上、３が下の重なった状態で出土している。

遺　物（第17図・図版18）

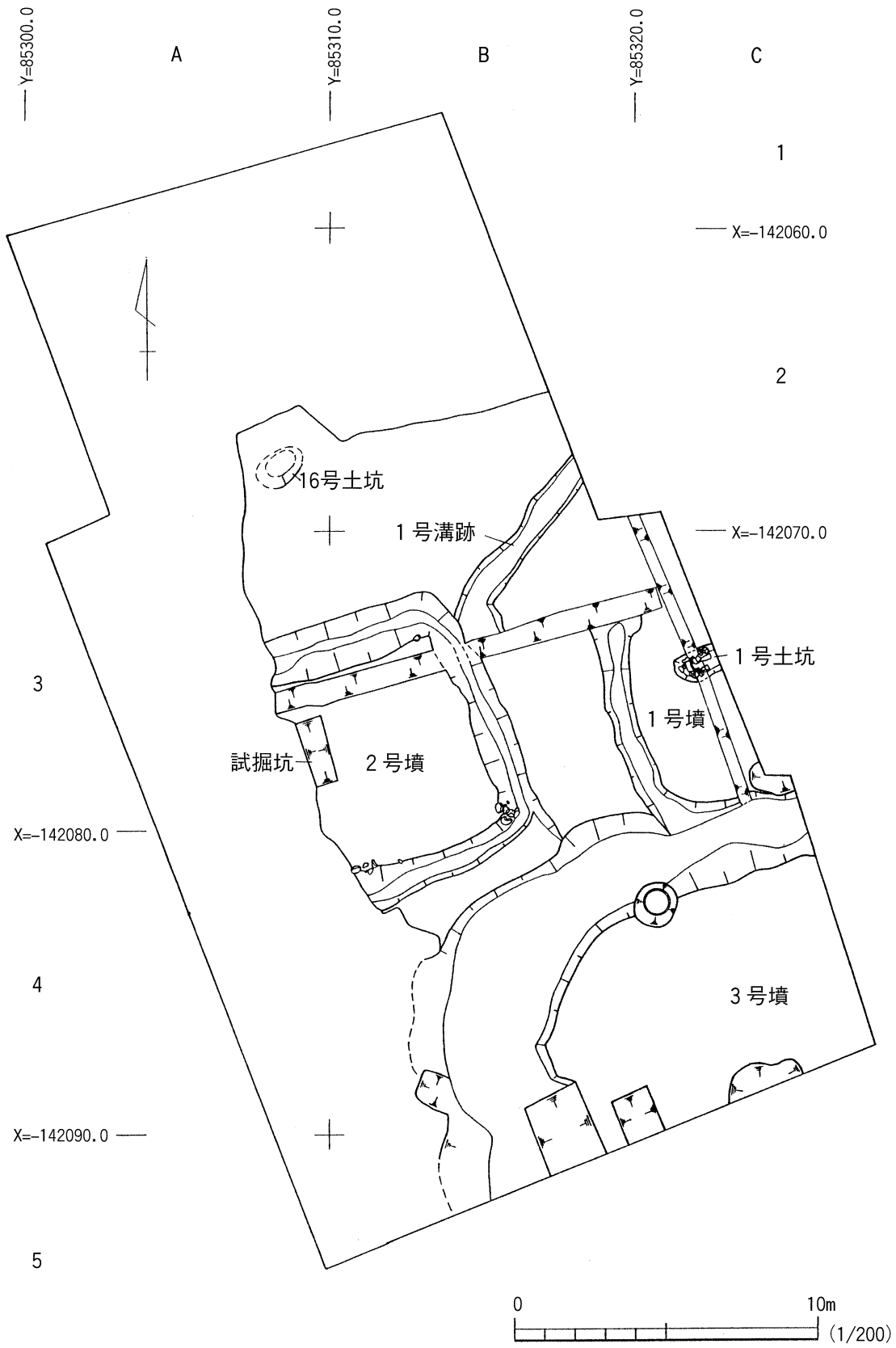
遺物は須恵器５点の出土である。すべて完形である。３のみが蓋で、他は坏である。１は口径9.8cm、器高4.7cm。２は口径10.0cm、器高4.9cm、３は底径12.9cm、器高5.0cm、４は口径9.4cm、器高5.35cmで、器底に直線の刻みがある。５は口径10.1cm、器高5.1cmを測る。器形の特徴により５世紀末から６世紀初頭にかけてのものと考えられる。

２号墳

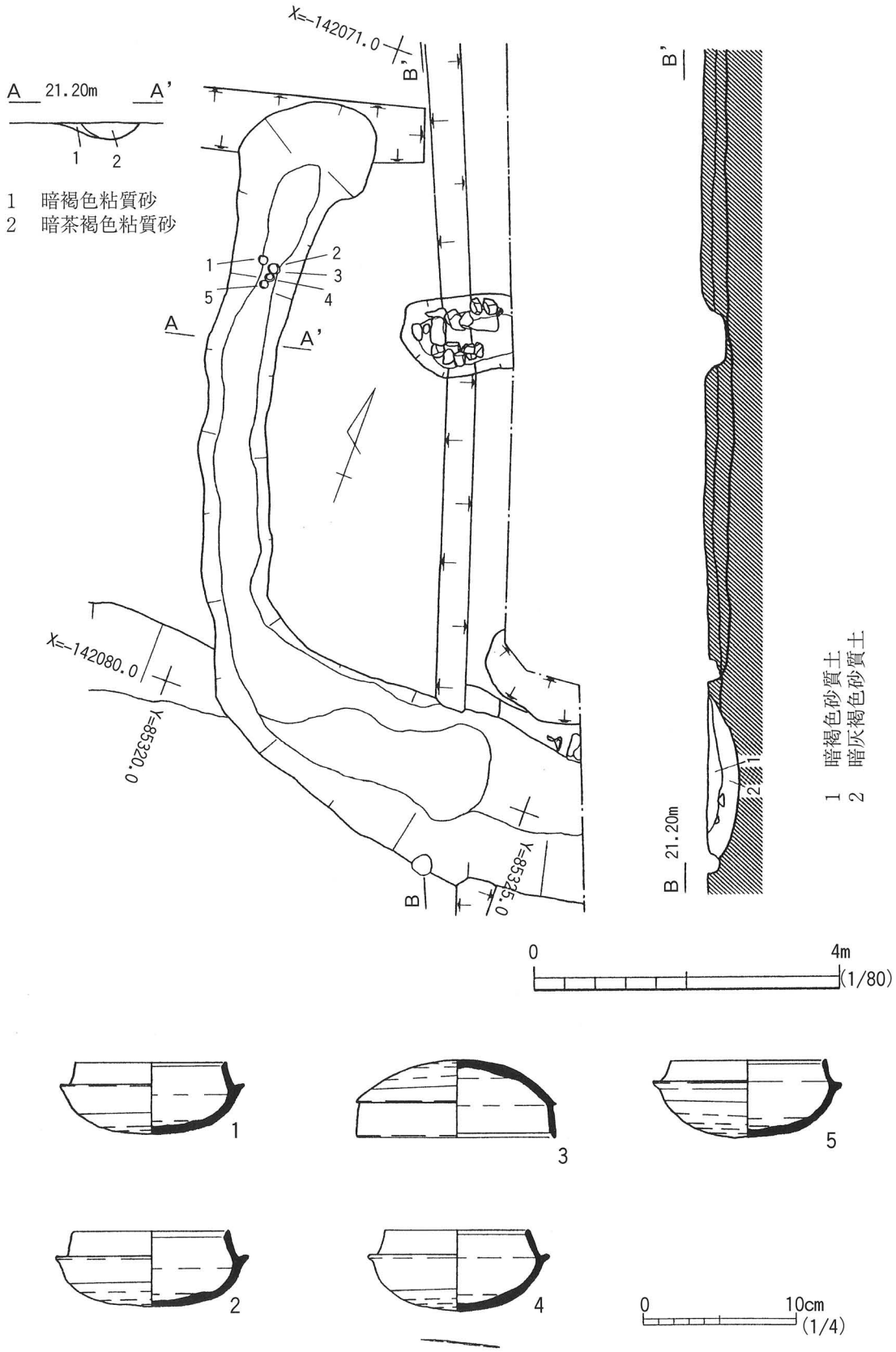
遺　構（第18図・図版８・９）

調査区中央のＡ・Ｂ３～Ａ・Ｂ４グリッドで検出された遺構である。遺構の西側部分は近年の攪乱により失われている。墳丘規模は周溝外径で南北約10mを測り、東西も同じ程度、周溝内径で約6.8ｍを測る方墳であると考えられる。墳丘のコーナーからは葺き石が検出されている。周溝の幅は、北側周溝で70～90cm、東側周溝で70～80cmを測り、周溝断面がＶ字型を呈する。南側周溝は40～50cmを測る。周溝中の埋土は砂を中心としているが、粘性のあるシルトが混入しており、乾燥した状態では非常に堅い状態であった。周溝上部に存在する黒褐色で粘性のある土壌は、墳丘上を覆っていた土によく類似している。２号墳の周溝南側は広い範囲で面的に削られており、墳丘面から30～50cm低くなっている。覆土が２号墳南側の周溝上を覆っていたものと同一で、３号墳の周溝上まで覆っていた。埋葬施設は検出されなかった。

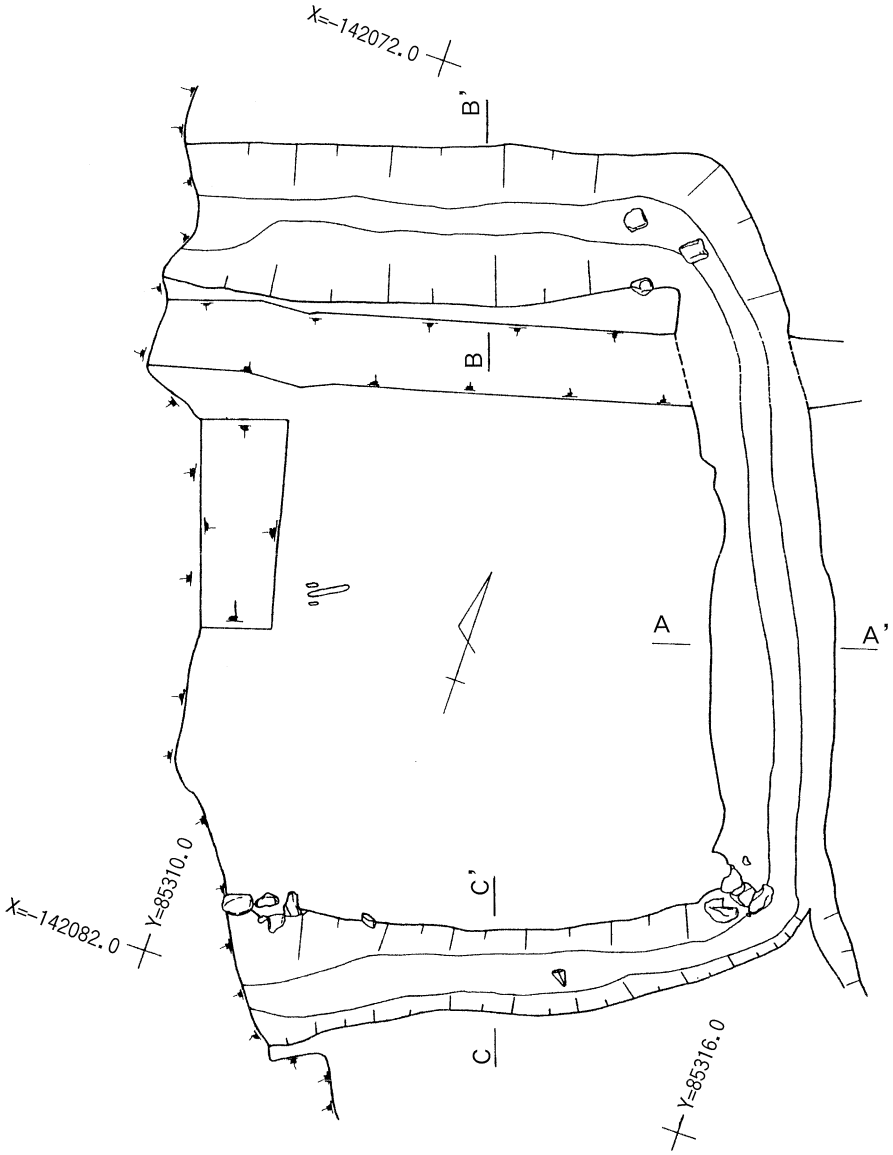
この遺構では、第１遺構面精査時に、鉄剣と鉄鏃が試掘溝の脇から検出されていた。この時点では、古墳

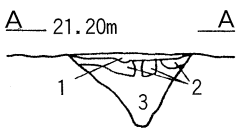


第16図　第3遺構面遺構全図

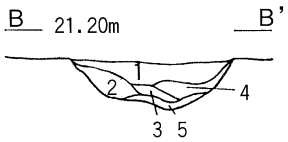

A 21.20m A'
1 2
1 暗褐色粘質砂
2 暗茶褐色粘質砂
X=-142071.0
B'
B'
1
2
3
4
5
A
A'
X=-142080.0
Y=85320.0
Y=85325.0
B
B 21.20m
2 1
1 暗褐色砂質土
2 暗灰褐色砂質土
0 4m
(1/80)
1
3
5
2
4
0 10cm
(1/4)

第17図　1号墳

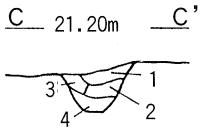




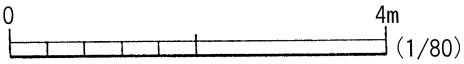
1　茶灰色砂質土
2　黒褐色粘質砂
3　灰褐色粘質砂



1　黒褐色粘質砂
2　茶灰色粘質砂
3　暗灰色粘質砂
4　灰褐色粘質砂
5　暗青灰色粘質砂



1　黒褐色粘質砂
2　暗黄灰色粘質土
3　暗茶褐色粘質砂
4　暗灰褐色粘質砂



第18図　2号墳

時代の遺構に伴うものとは考えておらず、江戸期の何らかの鉄製品と考え、その時点で位置の記録を取ったのみで取り上げてしまった。状況は鉄剣を中心に両脇に鉄鏃を配置してあった。取り上げた時点では銹化が著しく鉄鏃は塊状になっていた。鉄剣は東西方向に配置してあり、埋葬施設もこの方角になると考えられる。第１遺構面検出時、石列が東西方向と南北方向に存在していたが、現代に近い時代の何らかの建物の基礎部分と考えていたため、詳細な記録を怠ってしまった。２号墳検出後に墳丘のラインと合致する事がわかったため、墳丘上に並べた葺石と判断されると考えている。

遺　物（第19図上段・図版）

遺物は、墳丘上で検出された鉄剣と鉄鏃、周溝中から検出された土師器片・須恵器片・埴輪片である。鉄製品以外はは小片のため図化していない。１～19は鉄鏃である。１～４、13の根は切刃造りの特徴を持つ。他は頸部のみの出土である。11、14には木質部が付着している。20～22は鉄剣である。同一個体と考えられる。銹化が著しく全体像はつかめない。

３号墳

遺　構（第20・21図・図版10～12）

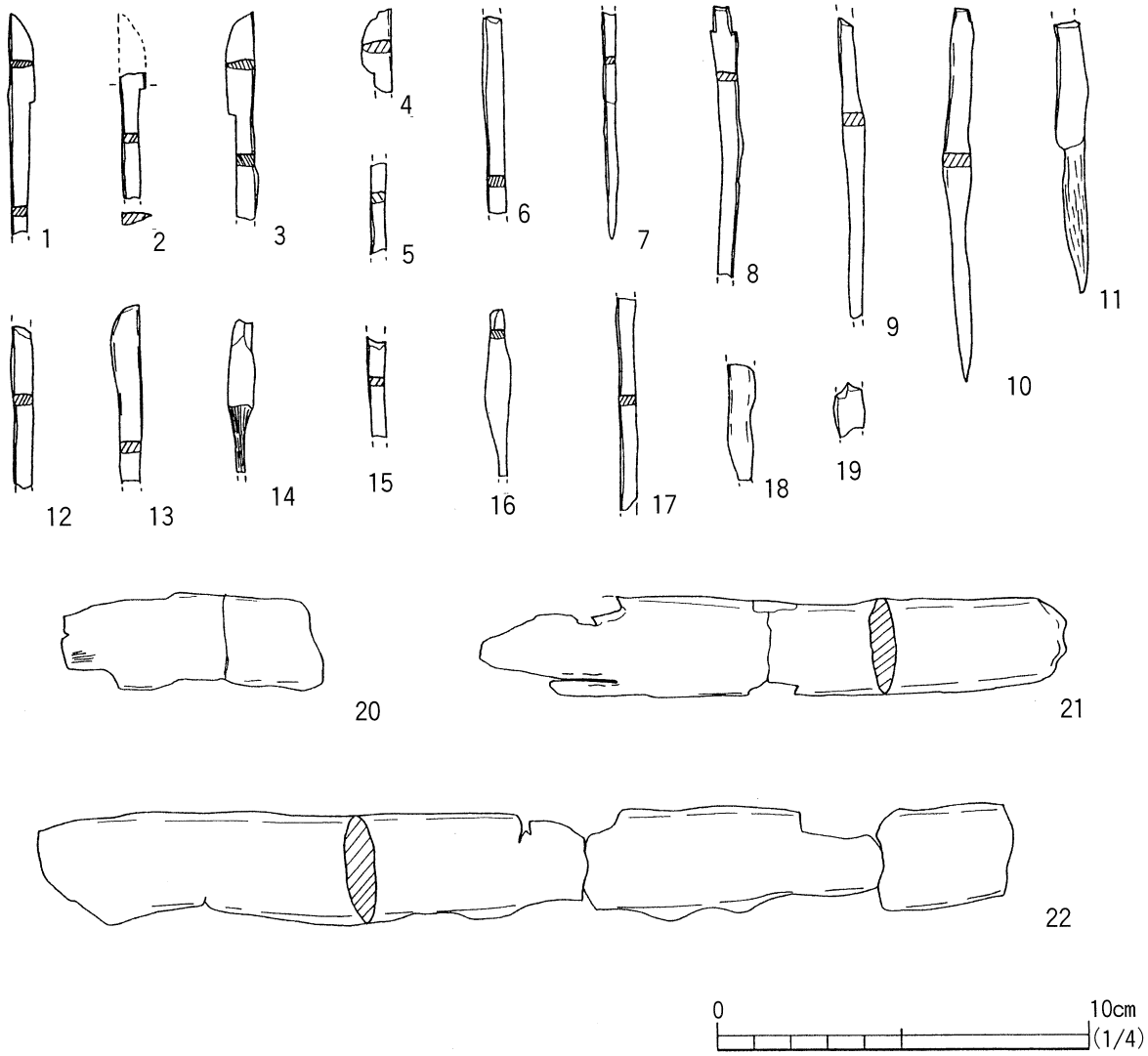
調査区南東端から検出された遺構である。遺構の状況から古墳の北西部分にあたると考えられる。墳丘の規模は遺構の大部分が調査区外にあるために不明であるが、周溝の幅が２～３ｍを測ることを考えれば、かなりの大きさになるであろう。墳丘の北西コーナーは調査時に土壌が軟質であったために削りすぎてしまった。これはこの部分に弥生時代の土坑が存在していたためである。西側周溝の外縁部分は近年の攪乱のために失われている。調査区の東側にかかる部分は１号墳の周溝によって切られている。

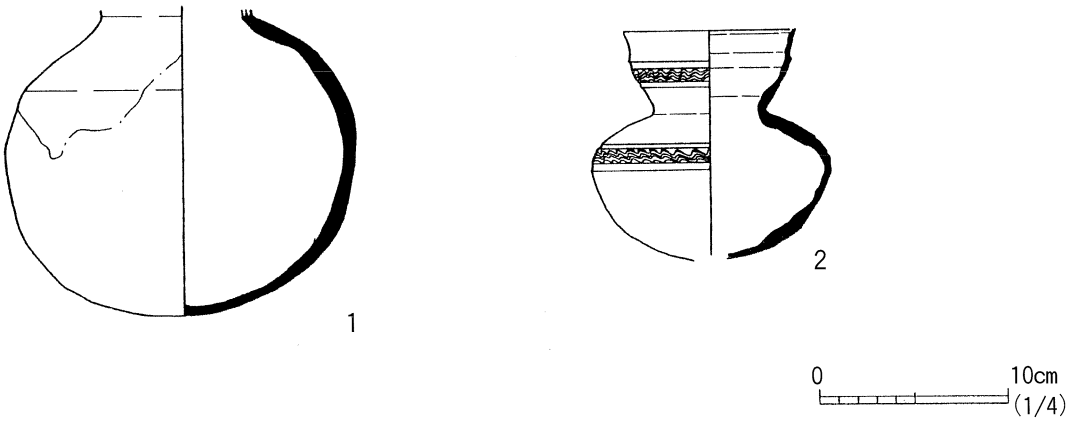
遺物の大半は第21図で見られるように、北側周溝中からまとまって出土している。他に北側周溝の調査区東端で埴輪片がまとまって出土したが、周溝埋土中でも中層にあり、本遺構とは直接の関係がなく流れ込みによるものと判断している。第20図中の土層断面観察地点Ａ－Ａ’付近でも円筒埴輪が潰れた状態で出土している。これは底面の直上で検出されたもので本遺構との関わり合いがあるものと考えられる。

遺　物（第19図下段・22図・図版19～23）

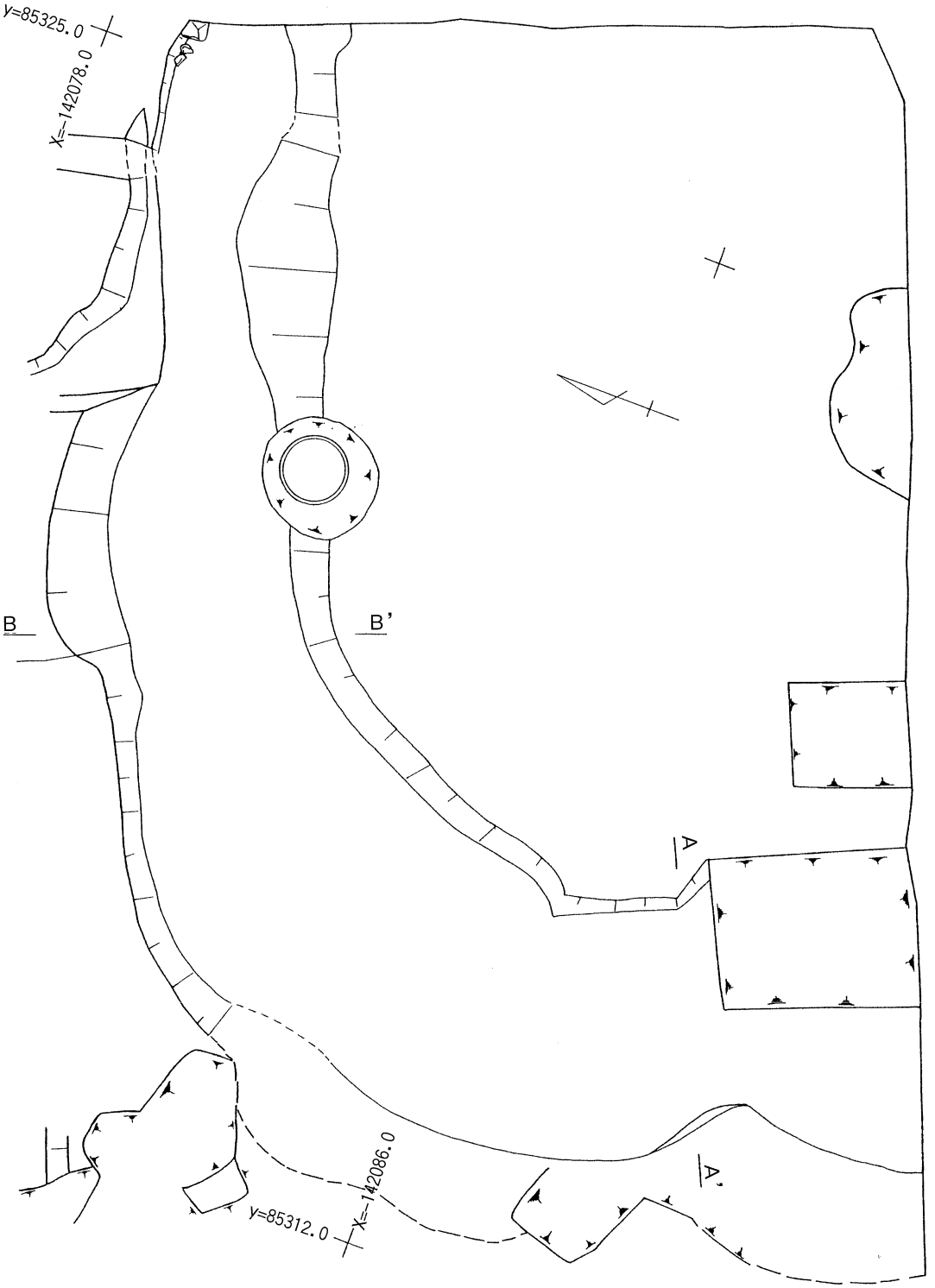
第19図中の１・２は西側周溝中より出土したものである。１は須恵器壺で口縁部が欠落している。残存高11.3cm、胴径13.5cmを測る。２は瓿である。胴部の小孔部分が失われている。口径9.1cm、復元高12.3cmを測る。第22図１～12は、第21図に見られる様な配列で、南北40cm、東西50cmの長方形の範囲に収まる。１・３～11は三方透かしをもつ有蓋高坏である。大半は上からの圧力で、蓋部が坏部に落ち込むように割れていたが、７は蓋をしたままの状態で出土している。埋没した時点のままの出土と考えられ、高坏の坏部底面には薄く乾いた砂泥が付着していた。これは水に浸かった後、そのまま乾燥していったものと考えられる。有蓋高坏の実測値は、蓋部の底径11.4～12.7cm、器高５～６cm。坏部の口径9.5～10.5cm、器高９～9.8cm、底径7.1～8.8cmを測る。第22図の２は土師器の坩である。焼きが甘いのか灰白色を呈している。口径6.5cm、器高11.0cm、胴径11.5cmを測る。12は須恵器の坏身である。口径10cm、器高4.5cmを測る。13は須恵器の甕である。第21図で見られるように、人頭大の石で破砕された状態で検出された。細片が南側に飛び散っているところから周溝の北側から石を投げつけたと思われる。器高89.0cm、口径47.2cm、胴径72.0cmを測る。第21図14は土師器甕である。13の須恵器甕の東隣で検出された。器面はハケによる丁寧な調整が施されている。口径26.6cm、器高31.0cmを測る。

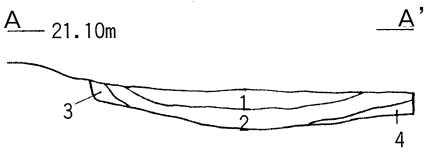
出土した遺物などの特徴により本遺構は、５世紀末～６世紀初頭のものと思われる。



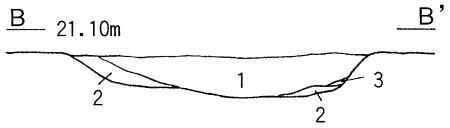


第19図　２号墳出土鉄製品・３号墳出土遺物

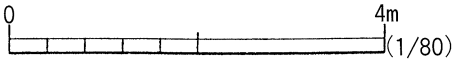




1　茶褐色粘性砂質土層
2　黒茶褐色粘性砂質土層
3　茶褐色粘性砂質土層（0.4cm大の礫含む）
4　灰黄褐色砂質



1　茶褐色粘性砂質土層
2　灰黄褐色砂質土層
3　黒茶褐色粘性砂質土層



第20図　3号墳

第２節　小石槨

１号小石槨（第23図・図版13）

本調査区からは１基の小石槨が検出された。調査区東側Ｃ３グリッドで検出した遺構である。遺構の一部が調査区外にかかっており、全体像はつかめない。工事の関係により調査区が拡大し当初設定した排水用の側溝がかかっている。遺構の規模は、小石槨部分で東西120cm以上、南北80cmを測り、深さは約35cmである。大小の花崗岩を用いて組み合わせて作られている。墓坑は東西150cm以上、南北110cmを測る。蓋石は検出されなかった。

遺物は土師器、須恵器の小片が掘方の埋土中より検出されたが小片のため図化する事はできなかった。

第３節　溝　跡

１号溝跡

遺　構（第23図）　本遺構は調査区東側、Ｂ２～３グリッドに位置し、調査区内の全長7.0m以上、最大幅1.8m、深さ0.2mである。東北端は調査区外へ続いており、西南端は屈曲する部分で２号墳周溝により切られている。古墳の周溝とも考えられたが、明確な根拠がなくここでは溝と考えておく。

遺　物　遺物は須恵器・土師器の細片が多く含まれていたが、図化に適するものはなかった。

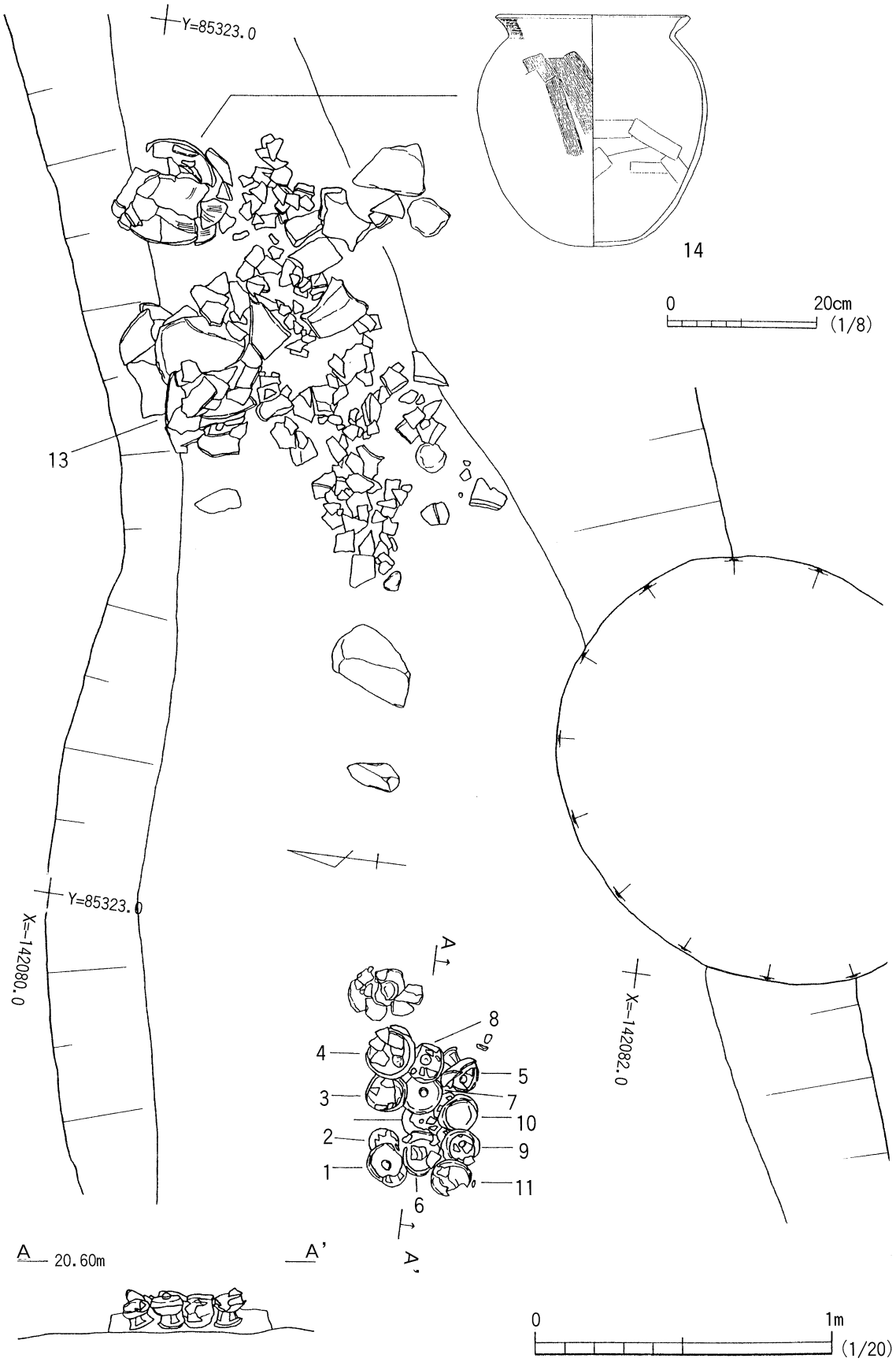
第４節　土　坑

16号土坑

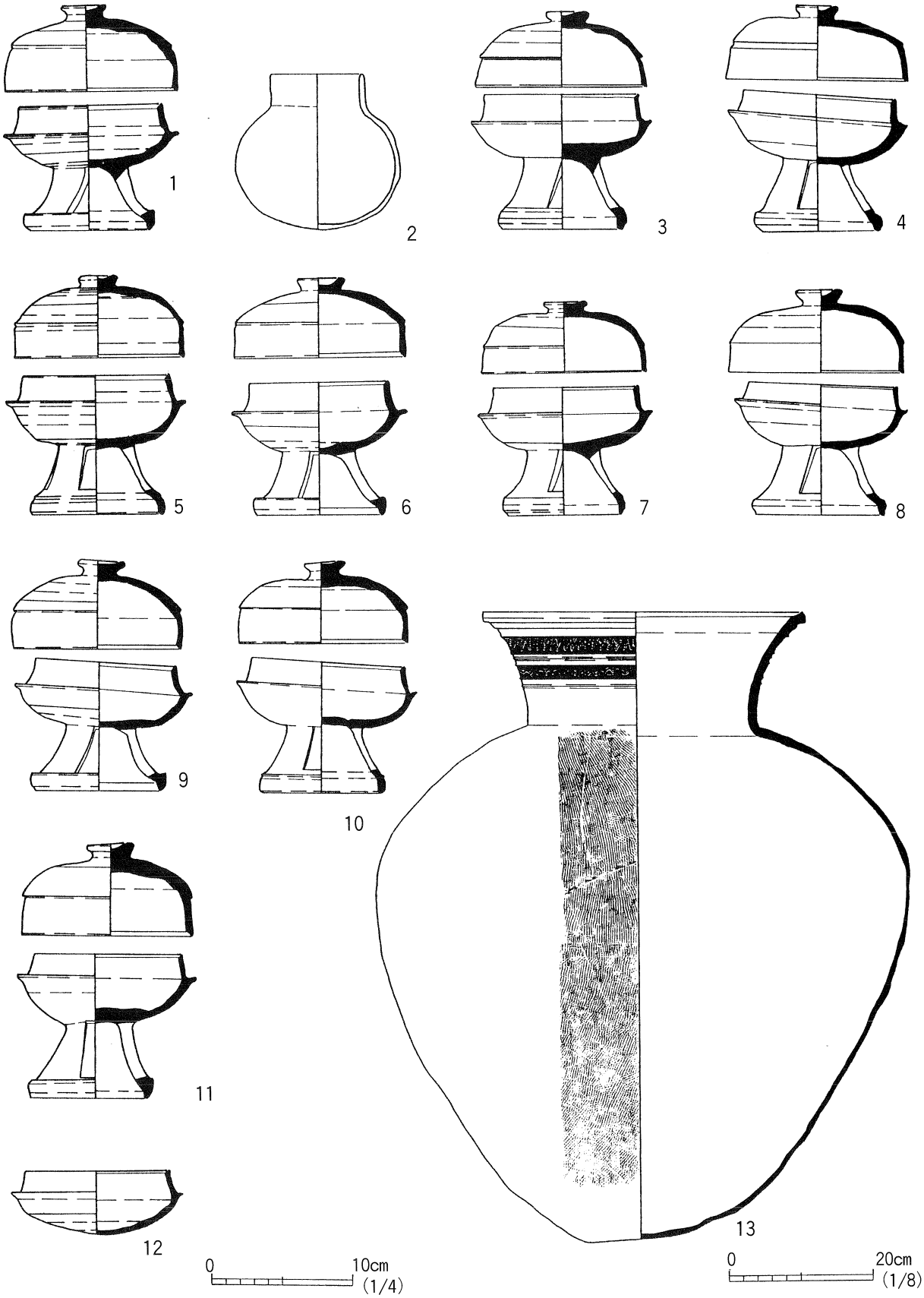
遺　構（第23図）　本遺構は調査区の北側Ａ２グリッドに位置し、長径1.7m、短径1.1mの楕円形の形状をした土坑である。検出面からの深さは0.3mを測る。遺構中からは須恵器の瓹の破片が出土している。これは、この土坑を検出作業時に上の面から同一個体の瓹の破片が出土している。台付甕は倒立した状態で第１層目から出土した。

遺　物（第23図・図版23）　２点とも須恵器である。１は瓹で、口縁部のみが欠落している。残存器高9.0cm、胴径10.0cmを測る。２は台付甕であるが、台の部分は失われていた。接合面に焼き歪みが強く認められることから、窯出しの段階で剥離した可能性もある。残存する器高は27.4cm、口径16.2cmを測る。

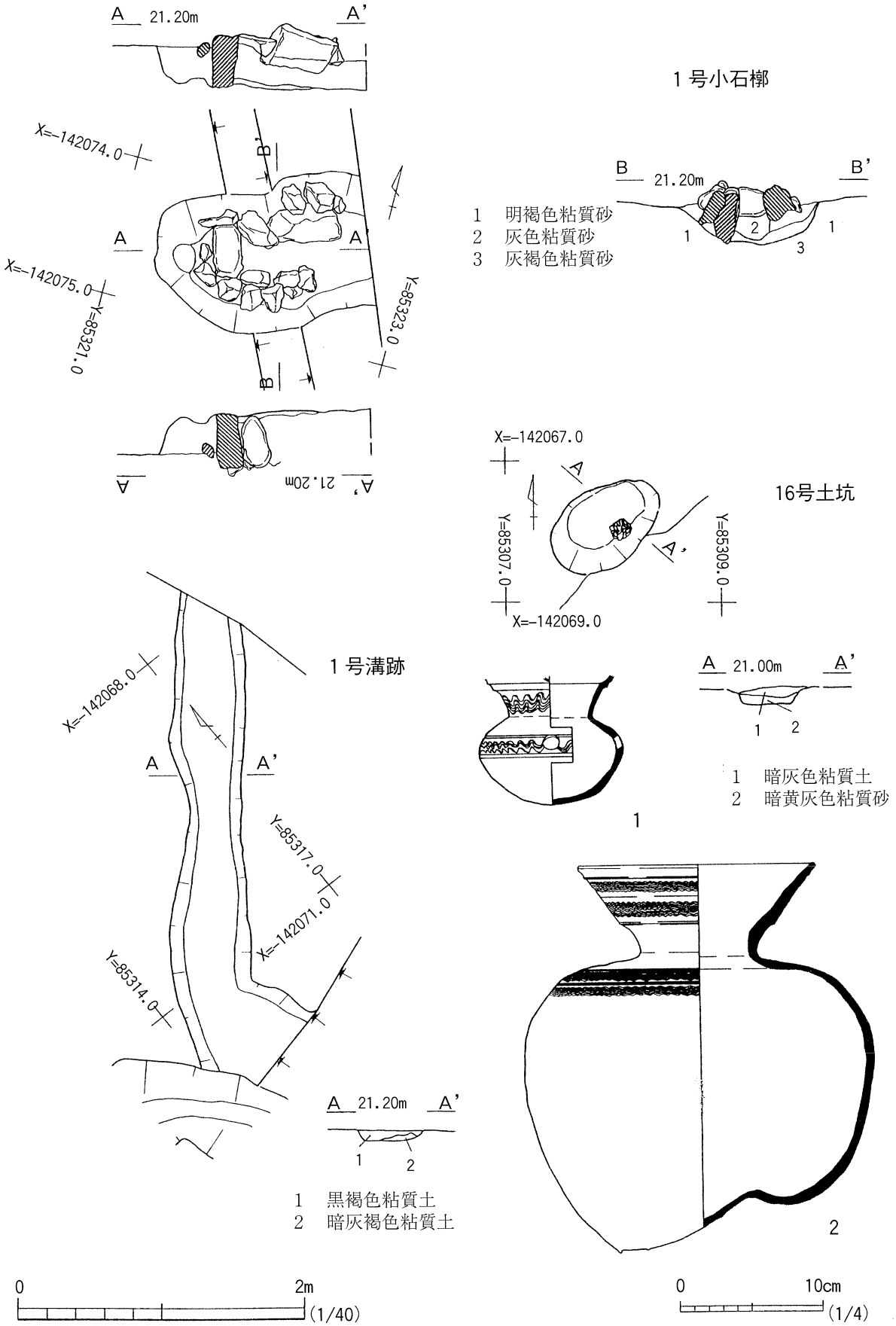
本遺構は遺物の特徴から５世紀後半のものと考えられる。



第21図　2号墳周溝内遺物出土状況



第22図　3号墳周溝内出土遺物



第23図　1号小石槨・1号溝跡・16号土坑

第５章　第４遺構面の遺構・遺物

概　要（第24図・図版14）　本遺構面は第３遺構面の比較的堅く締まった砂層を10～20cm剥いで遺構面を検出した。この面で検出された遺構は、溝跡１条・土坑１基である。また、弥生時代後期後半の土器集中地点が３ヶ所確認された。

第１節　溝　跡

２号溝跡

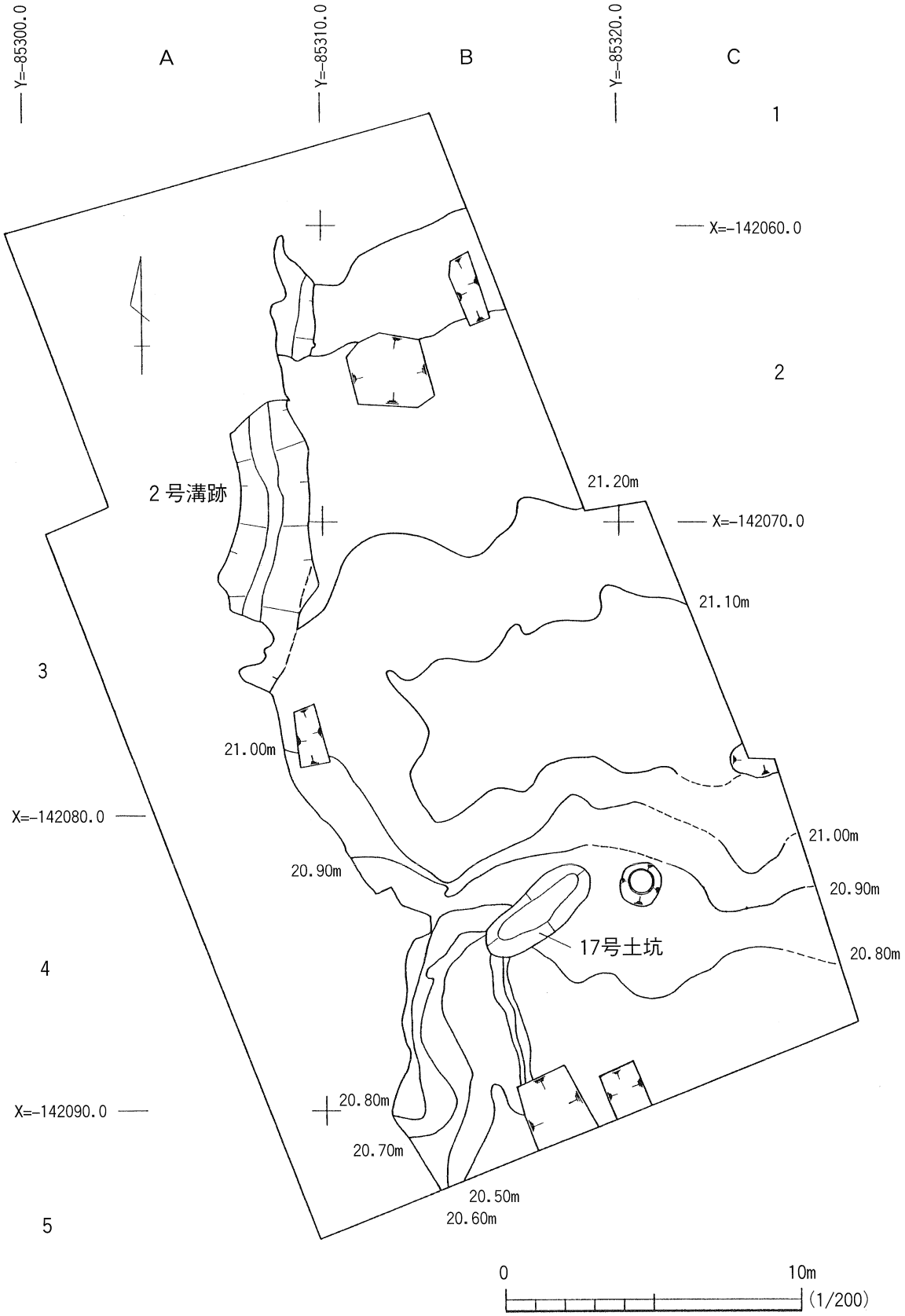
遺　構（第25・26図　図版15）　本遺構は調査区の北西部分より検出された溝跡である。遺構は攪乱により大半が失われており、全体像を伺い知ることはできなかった。遺構は北から南に向かい、途中から西に向かうような状況を呈しているが、それ以上は攪乱のために不明である。残存する長さは約15m、溝の幅は2.8m前後である。断面は緩やかなＵ字型を呈している。深さは60～80cmを測る。

本遺構からは多数の弥生土器の細片が出土している。遺構の斜面から床面にかけて張り付くように出土した。遺物の間からは拳大の川原石が見いだされた。遺物は、この遺構の床面付近が湧水層になっていることともあり、取り上げ時点でほとんどの遺物が崩れてしまった。時期的には後述する遺物集中地点を覆っている砂層を取り除いた跡に出土していることや、現地で観察した遺物から、この遺構の時期は弥生時代後期後半の範疇に入るものと考えられる。

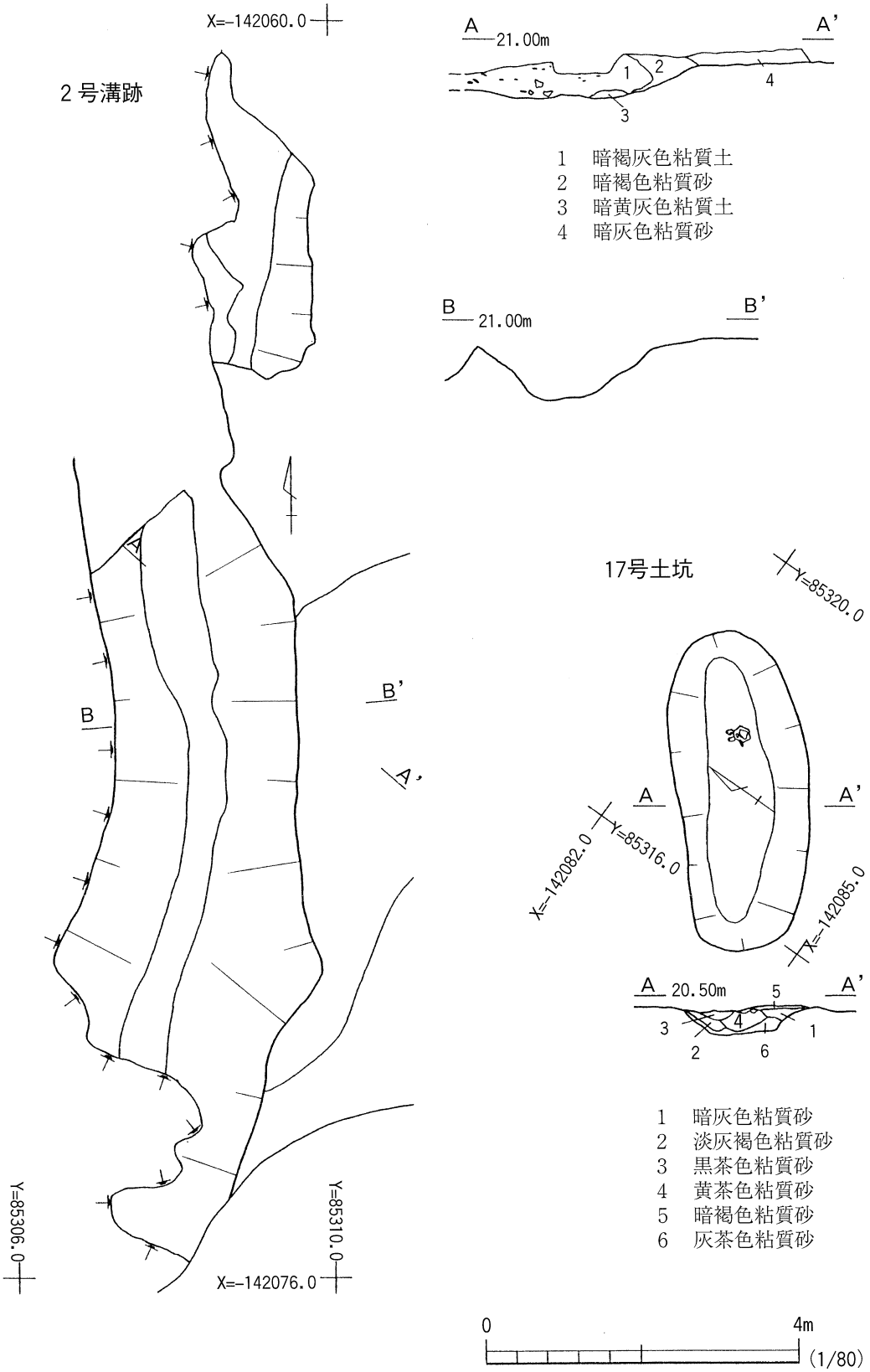
第２節　土　坑

17号土坑

遺　構（第25図）　本遺構は、調査区南側のＢ４グリッドに位置する。３号墳調査の過程で検出された。締まりのない砂上に構築されていたことと、３号墳構築の際周溝により削られているようである。長径4.1m、短径1.7mの長楕円形を呈し、深さ0.4mを測る。遺構中より弥生時代後期の壺型土器１点が出土していることから本遺構もその時期と考えられる。



第24図　第４遺構面遺構全図



第25図　2号溝跡・17号土坑

第26図　2号溝跡遺物出土状況

第３節　土器集中地点出土遺物

概　要　現地調査の時点ではＣ２とＣ３、Ｃ４グリッド出土の遺物を分けて捉えようと考えていたが、土器接合時に別の土器集中地点で出土したもの同士で接合する遺物がでてきたたことと、出土した状況がまったく良く似ているためにここでは一括して扱うこととする。遺物の量は、28リットルのコンテナで10箱以上に上る。

遺　構（第27・28図　図版16）

遺構の分布図では２カ所の土器集中地点しか掲載していないが、X=-142070.0，Y=85320.0付近のＣ２グリッドでも出土している。この地点は、出土した範囲が狭く、排水用の側溝を掘削している段階で採集されたものがほとんどで、工事範囲の変更のために、調査範囲が狭まり図化ができなかった部分であった。遺物の出土状況は、規則性はなく折り重なるように集中して出土し、覆土がサラサラの砂で、ほかの土壌の混入がないことから、洪水などにより押し流されてきた可能性が考えられる。

遺　物（第28～30図・図版24～26）

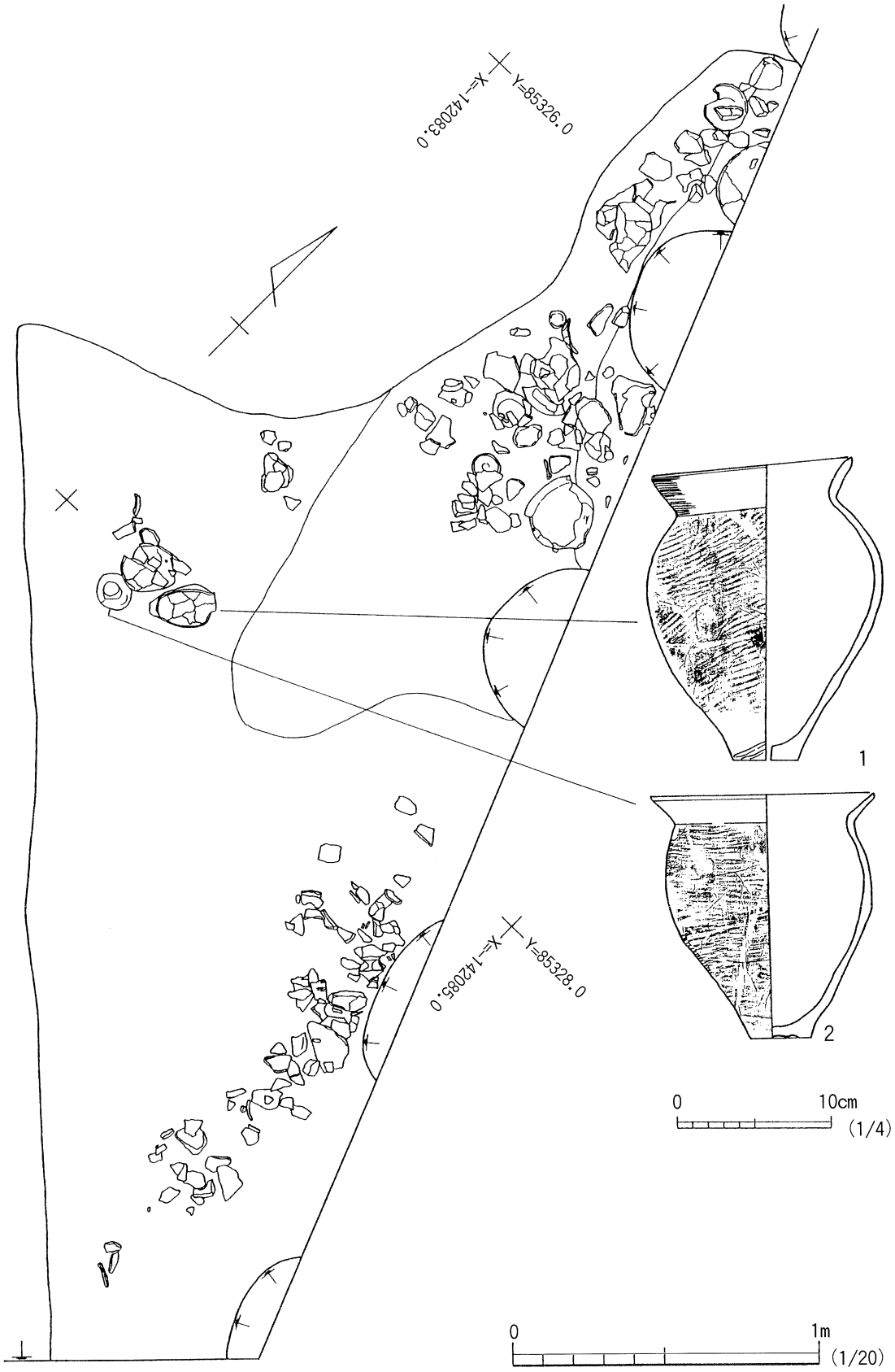
第28図の1・２は甕である。１は口径13cm、器高20cm、底径４cmを測り、底部が穿孔されている。外面は全面タタキ整形、口縁はヨコナデで調整している。内面は全面ナデ調整である。２は口径14.6cm、器高16cm、底径４cmを測る。外面は全面タタキ整形、口縁はヨコナデで調整するが、タタキの痕跡がみられる。内部の胴部はナデ調整が施される。

第29・30図はＣ３グリッド出土の遺物である。第29図１は器台の口縁部と考えられる。櫛描文と突帯文で加飾されている。復元される口経は約25cmである。突帯の下部はハケ調整後ナデを施している。内面はミガキを加えている。２は小型鉢である。内外面ともミガキ処理されている。口径15.8cm、器高6.7cm、底径4.8cmを測る。３は高坏の脚部である。残存高９cm、底径15.4cmを測る。内面はヨコナデ、外面はハケ、裾部はヨコナデが施されている。

４は小型壺の口縁部。口径13cmを測り、内外面ともハケの痕跡がみえる。５も小型壺の口縁から体部肩にかけての部分である。体部はハケ調整、口縁内～外部はハケ調整後丁寧なナデが施されている。口径13.4cmを測る。６は、外面はナデ、内面はミガキが加えられている。口径は16.8cmを測る。７は、口縁の内外面ともナデによる調整が施されている。口径は11cmを測る。体部は摩耗が著しく調整痕は確認できない。８は口縁はヨコナデ、体部はハケによって調整されているが、著しく荒れている。口径は14cmを測る。９は外面をハケによる調整後、ナデを施している。口縁外部は明確ではないが、ナデの痕跡がみえる。内部はナデが施されている。内面体部はハケによる処理。口径は14cmを測り、器高21.8cm、底径5.5cmである。10は体部をタタキによる整形後、ヘラ調整、ハケによる調整が施されている。内部は指ナデの痕跡がみられる。口径は11.8cm、残存高17.8cmを測る。11は外面をタタキによる整形後、ハケにより調整している。口縁はヨコナデが施されている。口径は19.7cmを測る。12は内外面ともミガキを加えている。口縁端部に粘土帯を貼付している。口縁は17.5cmを測る。13は外面は荒れており調整状況は不明。口径は9.2cmを測る。14は外面体部はハケによる調整が施されているが、器面は荒れている。口縁外部から内部にかけてはヨコナデ、体部の内部は指ナデが施されている。口径は17cmを測る。15は外面にミガキが施され、内部は口縁がヨコナデ、体部はヘラによる調整痕がみえる。口径は12cmを測る。

16～18は甕である。16は口縁をヨコナデ、体部上半を横方向のタタキ、下半を斜め方向のタタキにより整

第27図　第Ⅴ層遺物出土状況（1）



第28図　第Ⅴ層遺物出土状況（２）

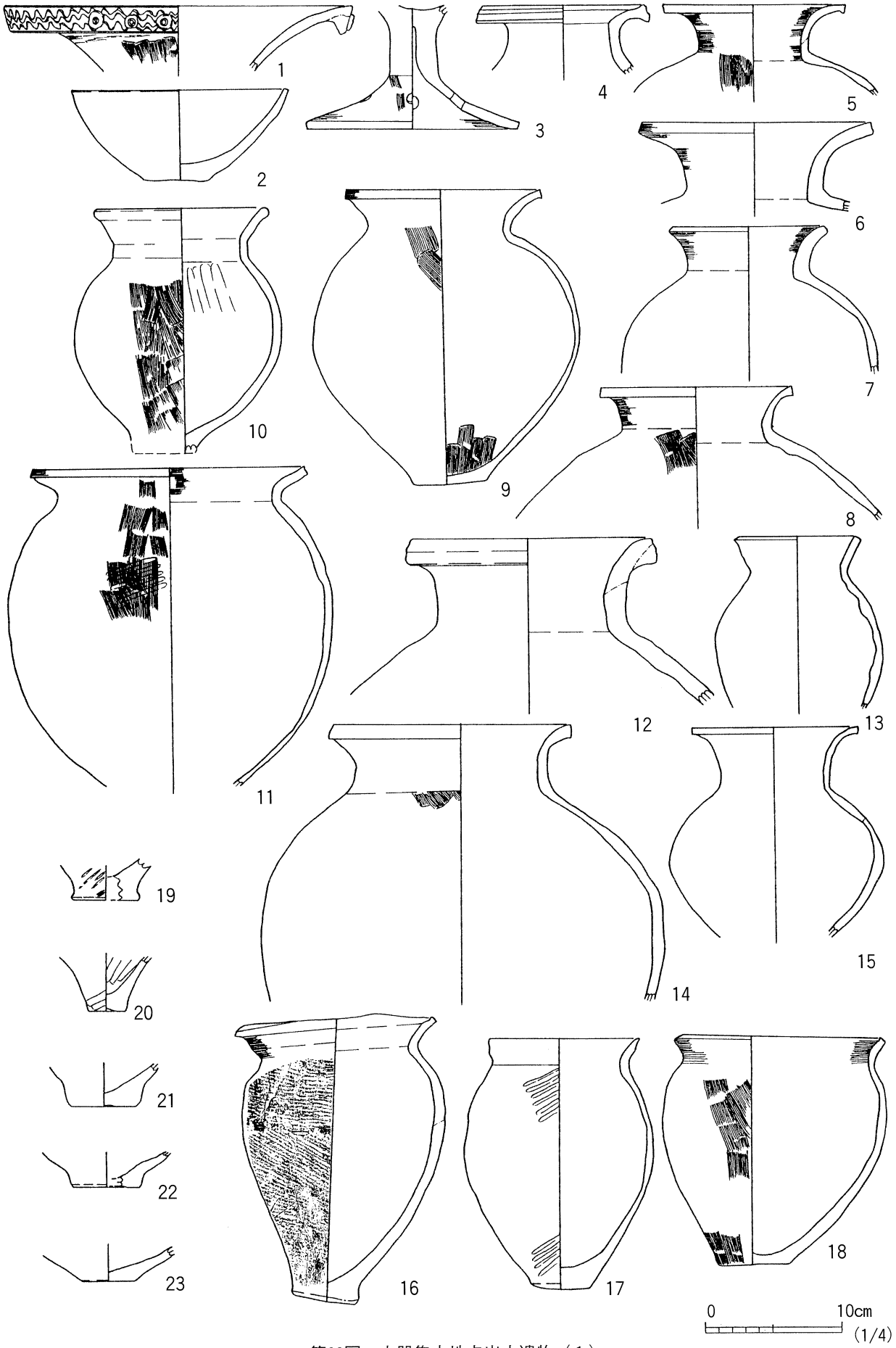
形し、口径は15cm、器高21.5cm、底径５cmを測る。17は外面をタタキ整形をしているが、器面が荒れている。口縁は内外面ともヨコナデを施す。口径11.0cm、底径4.5cmを測る。18は体部外面をタタキ整形後全面ハケにより調整している。口縁はヨコナデを施し、体部内面はヘラケズリを施す。口径は15.5cmを測り、器高17cm、底径は5.2cmである。

19～23は甕と壺の底部である。タタキを消さないもの。ヘラによる整形のもの。ナデによる調整を行っているものがある。

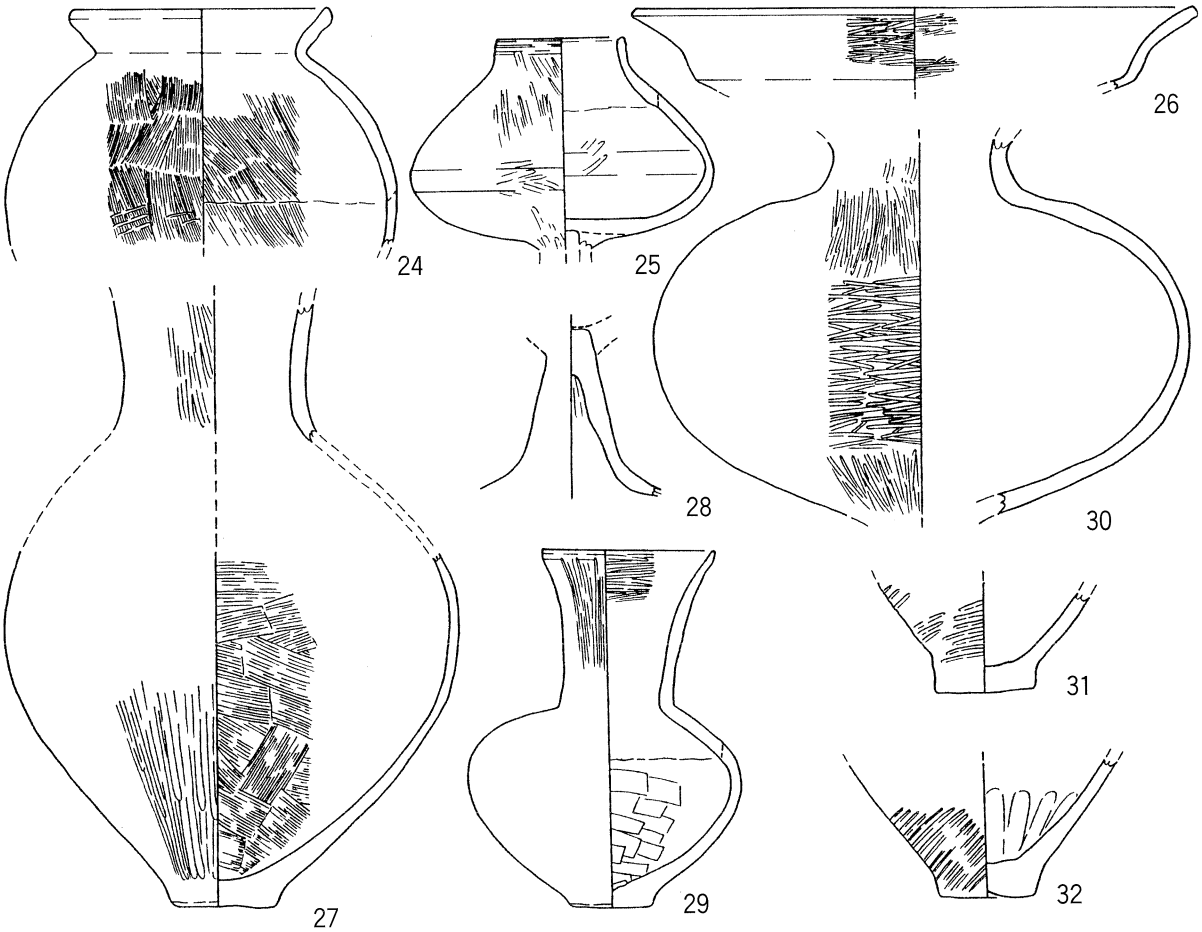
第30図24は広口壺、外面はタタキ整形後ハケによる調整、口縁は内外面ヨコナデを施している。内面はハケによる調整を施す。口径は13.2cmを測る。25は台付短頸壺である。外面はミガキ、口縁部はヨコナデ、内部下半はミガキの後ナデを施す。口径6.4cm、最大胴径16cmを測る。26は高坏の坏部である。内外面とも丁寧なミガキが加えられている。口径は29.4cmを測る。27・29は長頸壺である。27は胴部が球形を呈し、口縁はやや外反するものである。外面は丁寧なミガキ処理、内面はハケによる調整が施されている。29は口縁部が外反し体部は扁球形を呈する。外面はミガキが施されているが、体部では摩耗が著しい。口縁端部から内部にかけてはヨコナデ、体部内部上半からはナデ、下半はナデ調整である。口径9cm、器高19.2cm、底径4.4cmを測る。31・32は甕の底部で、外面のタタキ整形を消さないもので、内面は指ナデの痕跡がみられる。

第31図はＢ４～Ｃ４グリッド出土の遺物である。

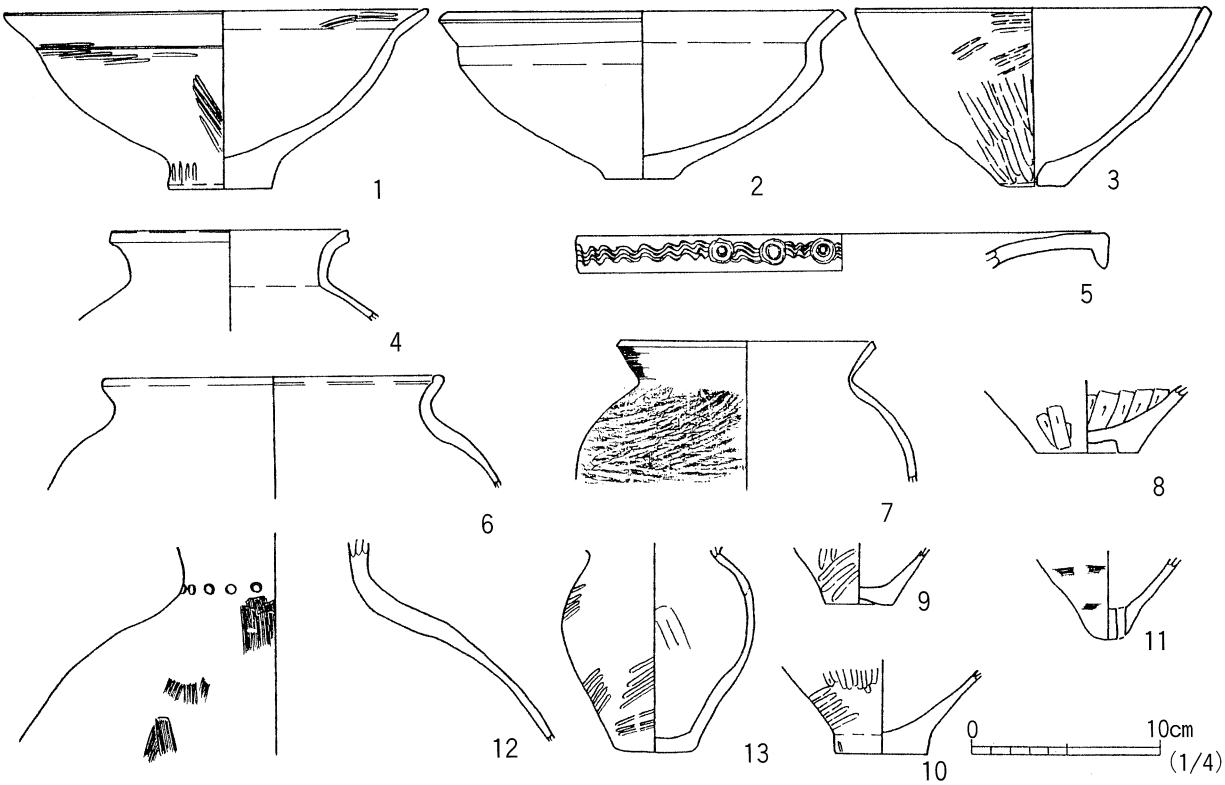
１～３は鉢。１は受口状口縁をもつ浅鉢で、内外面に丁寧なミガキを加えている。口径22.5cm、器高9.6cm、底径5.5cmを測る。２は１と比較して肩部の内湾度が大きく口縁の外反も大きい。内外面ともミガキが施される。口径21.4cm、器高9.1cm、底径3.8cmを測る。３は逆円錐台形を呈するもので、外面はハケ調整の後ミガキを加えている。内面はナデ調整である。底部に穿孔がみられる。口径18.2cm、器高9.7cm、底径３cmを測る。４は壺で、器面が荒れているため調整はみられない。５は器台である。櫛描文と突帯文で加飾されている。復元される口経は約28cmである。突帯の下部はハケ調整後ミガキを施している。内面はミガキを加えている。７は甕である。外面はタタキ整形、口縁は内外面ともヨコナデが施される。口径は14cmを測る。８～10は壺・甕の底部である。内外面ヘラケズリを施すもの、外面にタタキ痕を残すものがある。11は鉢の底部かと思われるが、２つの穿孔がある。内外面はナデによって調整されている。12は壺である。外面はハケ調整、頸部は竹管による刺突文がみられる。13は小型の甕で、外面はタタキ整形、内面はヘラ削りが施されている。



第29図　土器集中地点出土遺物（1）



第30図　土器集中地点出土遺物（２）



第31図　第Ⅴ層出土遺物

第6章　ま　と　め

今回の第19次調査にあたって、試掘調査および本調査で判明したことを簡単にまとめてみる。まず、遺跡の立地は、扇状地の先端部に位置し、国道２号線付近に地形の転換点が確認できる。遺跡を覆っている土層は細かい砂で、土壌化が進んでおり、褐色を呈していた。現地表面から弥生時代の遺構面まではわずか１ｍ程で、古代から洪水の影響を受けにくい場所であったことがわかる。

中世～近世の遺構と遺物については、１号建物跡、２号建物跡、柱穴列の方位から、３時期に分かれるであろう。その変遷については、土坑や井戸跡、石組み遺構からの出土遺物から15世紀後半から16世紀前半に一時期、18世紀後半から19世紀前半に一つの時期が求められる。出土した遺物はいずれも日用雑器であるが陶器の水差しが含まれており、どのような階層が所持し、ここに居住していたかが想像できるだろう。

平安時代～中世の遺構と遺物については、南北に伸びる柵とその西側に建てられた建物跡。建物跡の北側に分布する土坑が一つのまとまりを持っていると考えられる。土坑は、墓穴と考えられる特徴をもっており、屋敷墓としての性格も考えられるであろう。土坑の時期は９～10世紀の遺物が出土しているので、屋敷全体としてもその時期になるであろう。しかし、かなりの数の柱穴が存在しており、複数の時期に渡っている状況を示している。

古墳時代の遺構と遺物については、古墳は３基、小石槨１基、溝跡１条、土坑１基が確認されている。３号墳が最も古く、２・１号墳と続いている。いずれも方墳である。17次調査でのまとめで述べられているように、10ｍクラスの貼石などの特徴を２号墳は示している。２号墳では、埋葬施設の最下部が近世の面で確認された。鉄刀と鉄鏃が東西方向に長軸をもち、古墳の西側に寄っていることから西側小口がすぐそばにあるものと推定される。３号墳は、周溝から埴輪が出土していたが、直接遺構に伴うものとは考えにくい状態での出土状況であった。周溝の北側からは、供献土器の出土がみられた。箱に入れられて供えられたと思われる有蓋高坏、壊された須恵器甕・土師器甕など葬送儀礼を表すものが良好な状態で出土した。古墳の規模は、一部分しか調査していない状況なので不明であるが、周溝の幅を考えると18ｍクラスのものではないかと思われる。溝跡も屈曲している部分があり周溝の可能性も考えられるが、軸方向が異なっており、古墳かどうかは、今後の調査での検討課題になるであろう。

弥生時代の遺構と遺物については、出土遺物から後期後半の時期にあたる。遺物集中地点の出土状況は、サラサラした砂からの出土であったために、洪水による漂着ということが考えられた。遺物の状況も破損状況が少ないものもあると同時に、破損して寄せ集められたように固まって出土していたものもあった。土器の器種構成は甕・壺がほとんどで、高坏・器台などが加わり、後期後半の器種構成の特徴に沿ったものであった。

住吉宮町遺跡は、古墳時代の群集墳によって特徴づけられる遺跡であるが、過去の調査においては、弥生時代から近世まで連綿と集落などが営まれていることが明らかになりつつある。今次の調査でも、古墳のみならず、弥生時代の遺構・遺物が出土しており遺跡の全容解明の一助となることであろう。

第２編　住吉宮町遺跡第20次調査

第２編　住吉宮町遺跡第20次調査

第１章　調査に至る経緯と経過

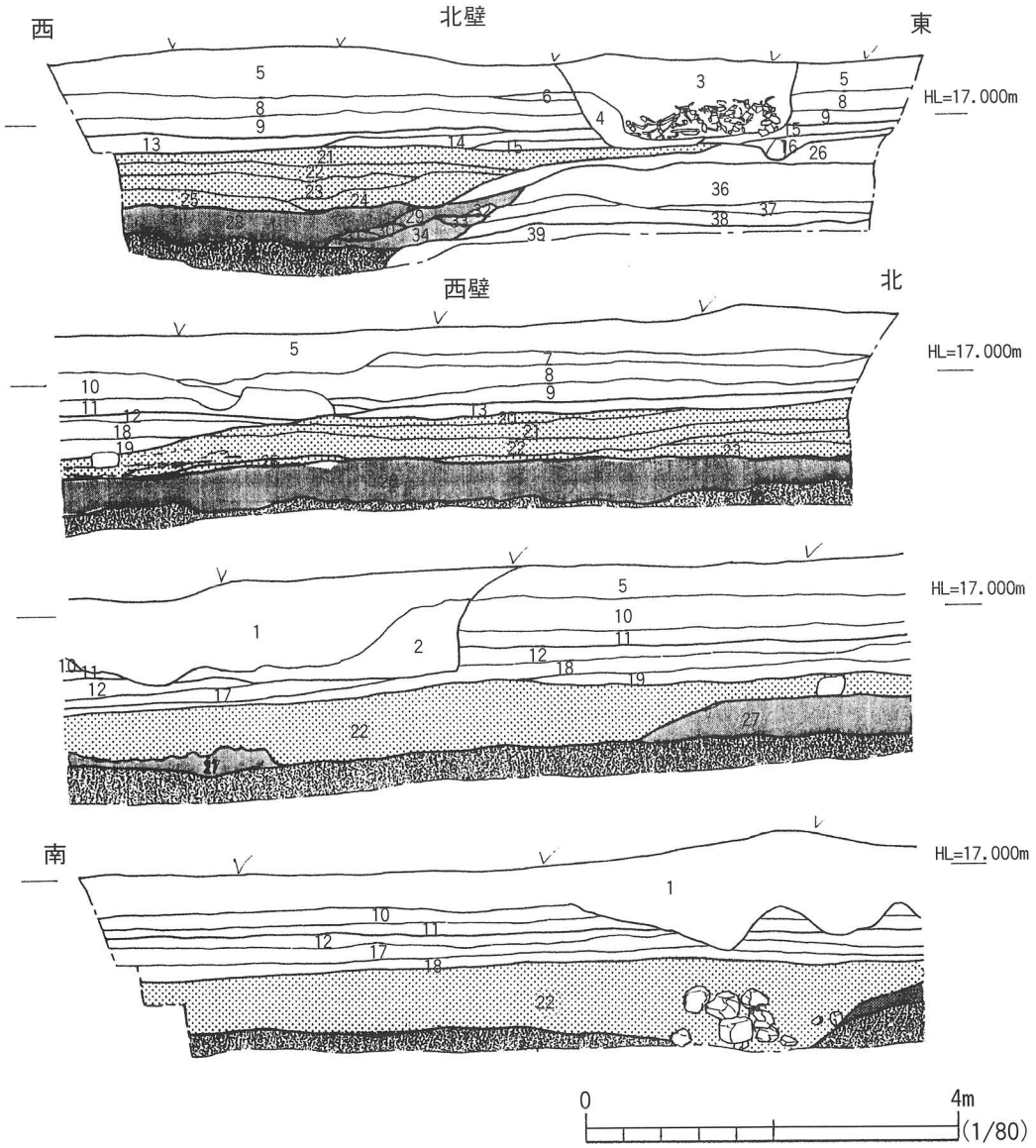
第１節　調査の経緯

今回の調査は兵庫県阪神・淡路大震災の復興に伴う開発により、住吉宮町遺跡の範囲内において共同住宅(マンション)の建設が計画されたため、おこなわれたものである。平成８年４月12日に実施した試掘調査の結果、古墳時代等の遺構・遺物が確認されたため、共同住宅の建築予定範囲内で発掘調査をおこなった。

第２節　調査地の層序と調査の経過

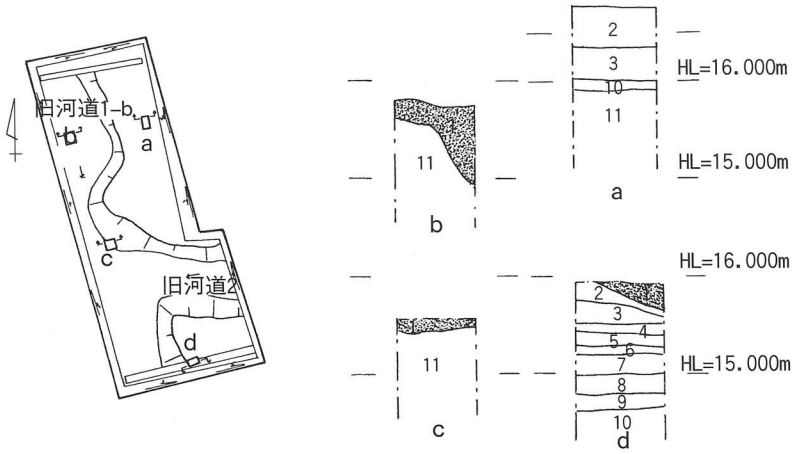
（１）　基本層序

調査地の層序はその層相および土層の差異により、多くの層にわかれるが、以下の11層を基本層序として認識し、調査をすすめた。第１層(第32図１・２・５)は、近世の耕作土層および近代以降の盛り土層・表土層からなる。この地区は明治に入り、水田から宅地に変遷しており、調査区内のところどころにおいて、宅地化に伴う盛り土や煉瓦作りの浄化槽さらに瓦や陶磁器等を廃棄した土坑等がみられた。第２層(第32図６～11)は、黄灰色～暗灰色の砂質土層からなる中世～近世の堆積土である。一部に畦畔状の高まりがみとめられたが、明瞭に耕作土と判断できる層は、認められなかった。第３層(第32図12～16)は、淡褐色～茶褐色の砂質土層である。鉄分およびマンガンの集積が目立つ中世～近世の耕作土層である。第４層(第32図17～19)は、暗茶褐色～茶褐色の砂質土層である。マンガンが目立つ。奈良時代～平安時代の包含層である。第５層(第32図20～25)は、黄灰色系の砂質土(粗砂)と青灰色系の砂質土(細砂～シルト)の互層の堆積状況を示す。旧河道１の上層に相当する飛鳥時代～奈良時代の堆積層である。第６層(第32図26)は、調査区のほぼ全面を覆う粗粒砂を主体とする黄灰色系の砂質土層である。遺構の切り合いの状況から６世紀末～７世紀初を下限とする。第７層(第32図27～28)は、黒灰色粘質土(シルト)層である。旧河道１の中層に相当し、植物遺体等の有機質が多く含まれるところから、流れの遅い湿地状の堆積をしていたものと考えられる。またこの層の上面にて、何らかの生痕とおもわれる不定形な窪みが多く見られた。また、この層の下部において、５世紀～６世紀の土器や木製品が多数出土した。第８層(第32図35)は、灰褐色砂質土(粗砂)、黒灰色粘質土、礫層の互層状態である。５世紀～６世紀の土器が多数出土した。旧河道１の下層に相当する。第９層(第32図36)は、黒色の砂質土層である。古墳時代前期の土器が出土している。第10層(第32図37・38)は、暗灰色～黒灰色の砂質土層である。無遺物層である。第11層(第32図39・第33図土層柱状図10～11)は、淡緑灰色の砂質土層である。この調査区全体の基盤となっている無遺物層である。この層は、中砂～細砂を主体とし、間に鉄分の集積層や微砂を主体とする砂質土層を挟み、層厚は１ｍ以上を測る。



第32図　土層断面図（トーンは、旧河道１の上・中・下層に対応）

第１層　淡茶灰色砂質土　第２層　黄灰色砂質土　第３層　青灰色砂質土（黄色粘質土のブロックや多量の瓦を含む）　第４層　暗茶灰色砂質土　第５層　灰色砂質土（粗砂が多く混じる）　第６層　淡褐色砂質土（細砂～極細砂）　第７層　灰色砂質土　第８層　灰褐色砂質土（極細砂～細砂）　第９層　黄灰褐色砂質土（中砂）　第10層　黄褐色砂質土　第11層　淡灰色砂質土　第12層　灰褐色砂質土　第13層　茶褐色砂質土　第14層　淡灰色砂質土＋黄褐色砂質土　第15層　黄灰色砂質土　第16層　黄灰褐色砂質土＋灰色砂質土　第17層　褐色砂質土　第18層　淡茶褐色砂質土＋灰褐色砂質土　第19層　淡茶灰色砂質土＋茶褐色砂質土　第20層　暗灰色砂質土　第21層　黄褐色砂質土＋茶褐色砂質土　第22層　暗青灰色砂質土　第23層　暗灰色砂質土＋暗黒灰色砂質土（極細砂）　第24層　黄灰色砂質土（粗砂）　第25層　灰色砂質土（粗砂主体、ラミナが発達）第26層　暗黄灰色砂質土（中砂）＋黄灰色砂質土（粗砂）　第27層　黒灰色粘質土（シルト・灰色粗砂のブロックが多く含まれる）　第28層　黒灰色粘質土（シルト）　第29層　黒灰色粘質土（シルト・細砂混じり）　第30層　黒褐色砂質土　第31層　灰色砂質土（粗砂）　第32層　灰色砂質土（中砂～細砂）　第33層　黒灰色粘質土＋淡灰色砂質土（極細砂）　第34層　黒灰色粘質土（シルト）＋暗灰色砂質土（極細砂）　第35層　淡灰色砂質土（黒灰色シルト・礫層がブロック状に入る）　第36層　黒色砂質土（シルト～細砂）　第37層　灰色粘質土（細砂～極細砂）　第38層　暗灰色砂質土（極細砂）　第39層　淡緑灰色粘性砂質土（中砂～細砂）



第１層　淡灰色砂質土（黒灰色シルト・礫層がブロック状に入る）　第２層　黒色砂質土（シルト～細砂）　第３層　灰色粘質土（細砂～極細砂）　第４層　暗褐色砂質土　第５層　赤褐色粘質土（３mm大の砂粒を多く含む）　第６層　淡青灰色粘質土　第７層　灰褐色砂質土　第８層　青灰色砂質土　第９層　暗青灰色砂質土　第10層　淡緑灰色砂質土（中砂～細砂）　第11層　褐色砂質土（中砂～粗砂、鉄分の集積層あり）

第33図　第３遺構面下土層柱状図

（２）　調査の経過

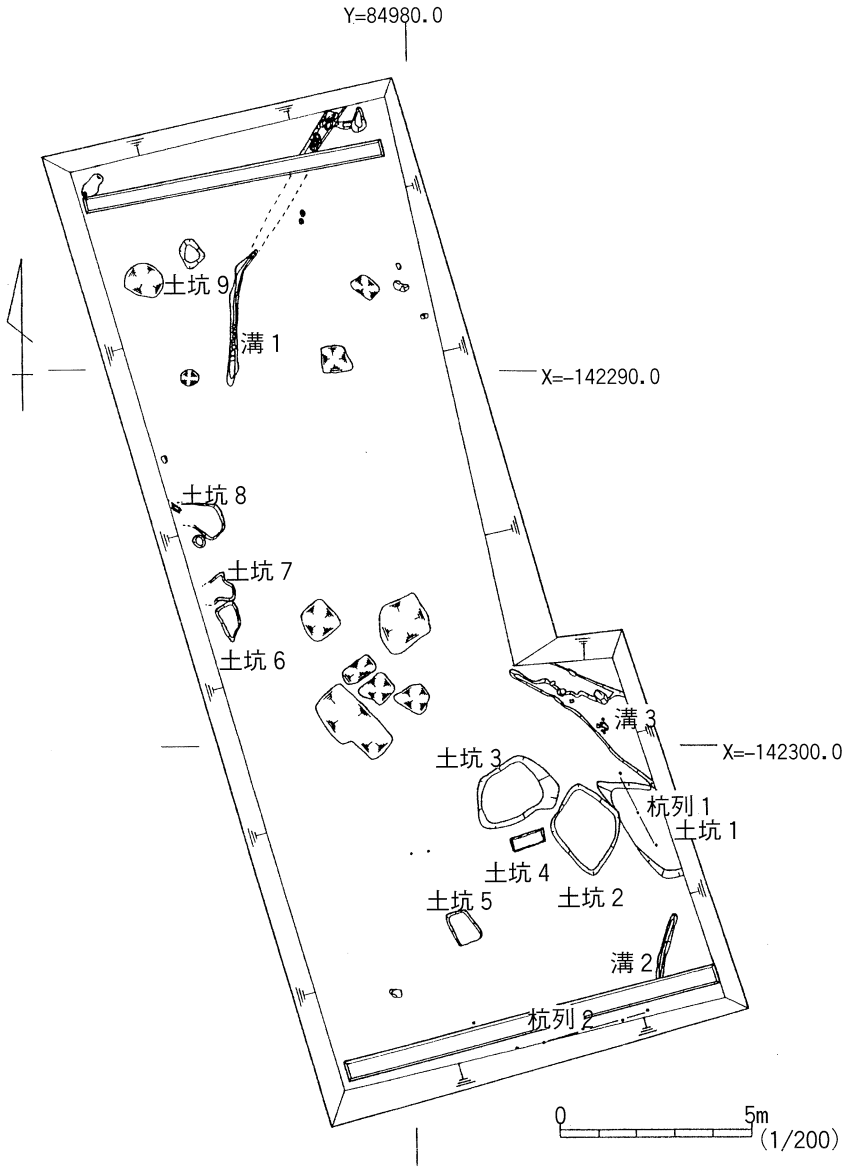
調査はまず重機により基本層序の第１層～第３層までを除去した。厚さは北側がやや浅く、南側は1.5m近く下がった。第４層の上面で精査をおこなったのち、奈良～平安時代の包含層である第４層を人力で掘削した。第１遺構面は、第５層の上面から切込む遺構を対象としたが、ほとんどが第４層の上面以浅からきりこまれていたものである。溝や土坑、杭列などを検出した。第１遺構面の調査終了後、旧河道１の上層にあたる第５層を人力掘削した。上層掘削途中から多くの木片がみられたが、河道中央部にみられる木器集中部では、２箇所の埋没木を中心に建築部材や木製品を検出した。河道肩部では薄く広がる第５層を除去したのち、第６層上面を第２遺構面と把握した。この地点からは多数の土坑や集石遺構を検出した。加えて、河道の南半部で石組遺構を検出している。第３遺構面は、第６層を人力で掘削したのち、第９層を切込む遺構を対象とした。新たに旧河道２と杭列３が検出され、旧河道１は中層以下が対象となった。旧河道１－ｂと旧河道２の合流部では、土器や木器が多く検出されている。第３遺構面の調査終了後、４箇所のグリッドを設定して下層状況を把握した。この河道のベース層となっている砂層を確認した後、植物遺体を多く含む可能性のある旧河道の上層・中層の土層サンプルを採取したのち、調査を終了した。

第２章　検出遺構

概　要　古墳時代中期から近世におよぶ遺構群を計３面にわたり検出した。

第１節　中世～近世(第１遺構面　第34図・図版27)

第４層以浅を重機および人力掘削により除去したのち、第５層上面で溝１～３、杭列１・２、土坑１～９を検出した。中世以降の水田耕作に伴う杭列や暗渠排水に関わる溝などを検出している。



第34図　第１面遺構平面図

溝１

北東～南西方向へ伸びる溝である。検出長７ｍ、幅0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mを測る。断面はｕ～ｖ字形、底面はともに凹凸に富む。北から南へ流れていたと思われる。埋土は、淡灰色砂質土(粗砂)層である。北端部には0.1～0.2m大の角礫が充填されていた。その上面には、鉄分やマンガンが目立つ耕作土に相当する層が覆うところから、暗渠排水的な機能が考えられる。

溝２

北東～南西方向へ伸びる溝である。検出長1.5m、深さ0.1m、幅0.2mを測り、底面は凹凸に富む。溝１と形状が類似しているところから、暗渠排水的な機能が考えられる。

溝３

北西から南東方向に直線的ののびる溝である。最大幅1.2m、検出長5.0m、深さ0.3～0.4mを測り、底面

は南西側がやや深くなる逆台形状を呈する。埋土中からは人頭大の角礫が数点出土している。

杭列１・２

南端部と東端部において、東西方向と南北方向の杭列を検出した。杭列１は、検出長1.6m、杭列２は検出長4.8mである。ともに0.1～0.2m大の丸杭や半裁した丸杭を使用している。

土坑１～３・６～９

不整形なものがほとんどである。埋土はブロックを多く含む粘質土を主体とするものや灰色の砂質土からなるものまでさまざまである。ほとんど遺物が出土しないところから、詳細な時期は不明であるが、その埋土の状況から近世以降であろう。

土坑４

平面は方形で暗灰色の埋土を呈する。0.3m×0.9m×0.2m(深さ)を測り、出土遺物はない。

土坑５

平面は方形で暗灰色の埋土を呈する。0.7m×0.9m×0.2m(深さ)を測る長方形の掘形をもつ。その内から方形の木枠痕跡を検出した。木枠は内法で東西0.4m，南北0.9mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

第２節　飛鳥～奈良時代（第２遺構面　第35図・図版27）

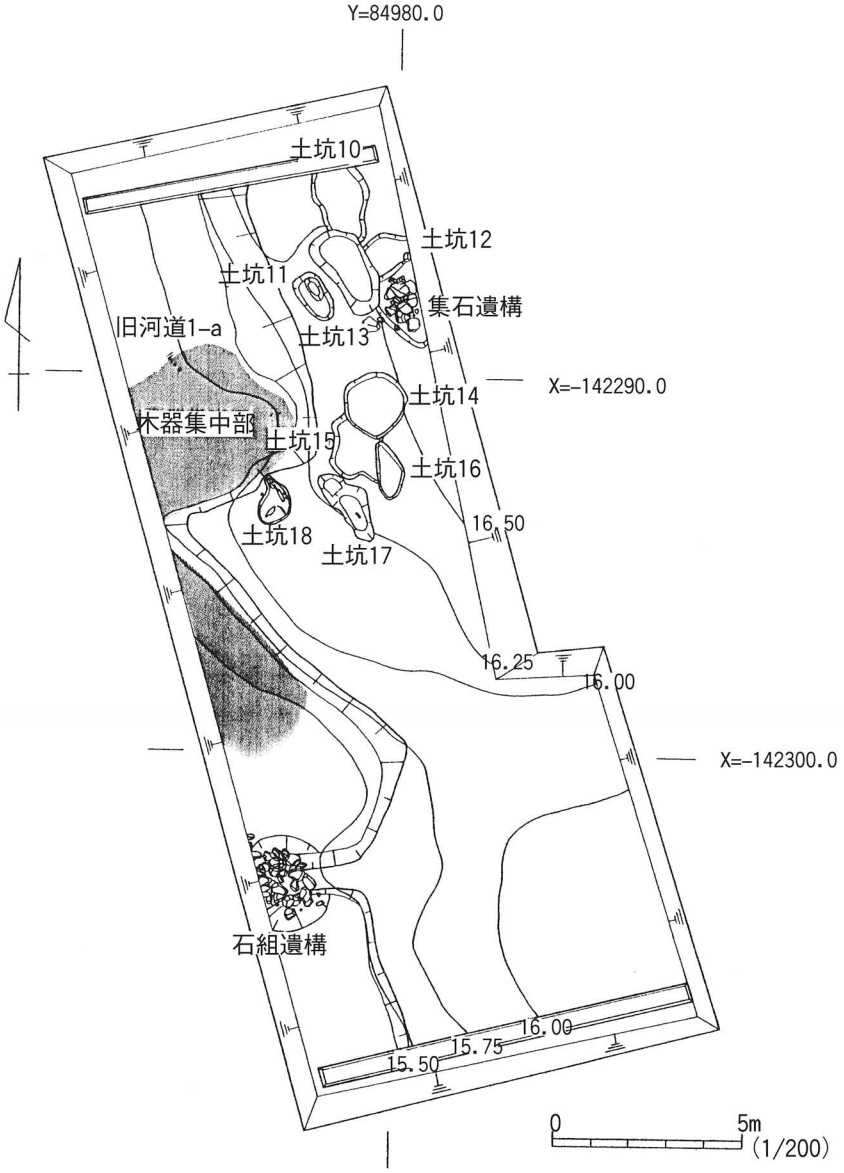
第４層を人力掘削により除去したのち、旧河道、石組遺構、土坑等を第６層上面にて検出した。

旧河道１－ａ（旧河道１の上層）

旧河道１は、調査区の西半分を南北方向に流れ、検出長23m、最大幅4.6mを測る自然河道である。埋土は大きく３層にわかれ、上層は飛鳥～奈良時代に中・下層は、古墳時代の中期～後期に相当する。河道の中央部にて、木器集中部を検出した。そこでは、２箇所の埋没木を中心に河道肩部にかけて、多くの木片とともに建築部材および木製品(槽)が出土した。いずれも完形なものはなくかつ状態も悪いため、二次的に堆積したものと思われる。これら木器群を覆っていた土層が粗砂を主体とする砂質土層からなる点も、洪水による二次堆積の可能性を示唆する。他に転用硯等が出土している。

石組遺構（第38図・図版30・31）

旧河道１－ａ南半部で検出した。この石組遺構を覆っていたのは、旧河道１の上層である第５層であり、この層を除去した段階で石組遺構の全景を把握した。石組遺構は河道肩部から陸橋状にのびる砂堆を切込み、北西から南東方向を主軸として、小石室状に構築されている。石組内には、砂質を主体とする土層が堆積しており、検出面から0.4mほど掘下げた段階で、須恵器と花崗岩礫を検出した。須恵器は杯身、杯蓋が側壁に平行に置かれており、その北西側には0.1～0.2m大の角礫３個が配置されていた。浅い掘形をもち、長軸2.5mで、深さ0.5mを測る。石組の内法は0.8m(長軸)×0.4m(短軸)、高さ0.7mを測り、側壁は0.5～0.6m

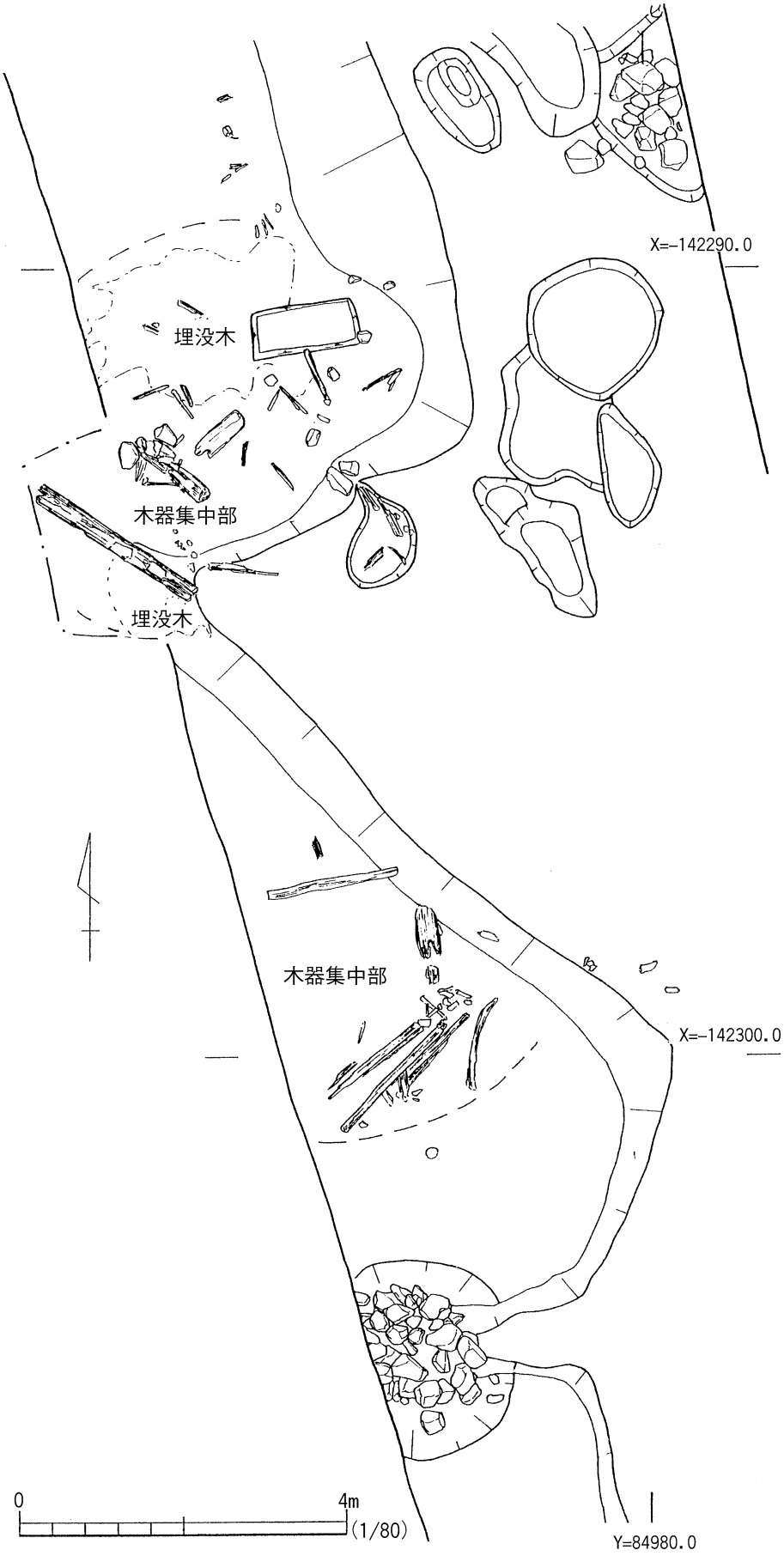


第35図　第２面遺構平面図

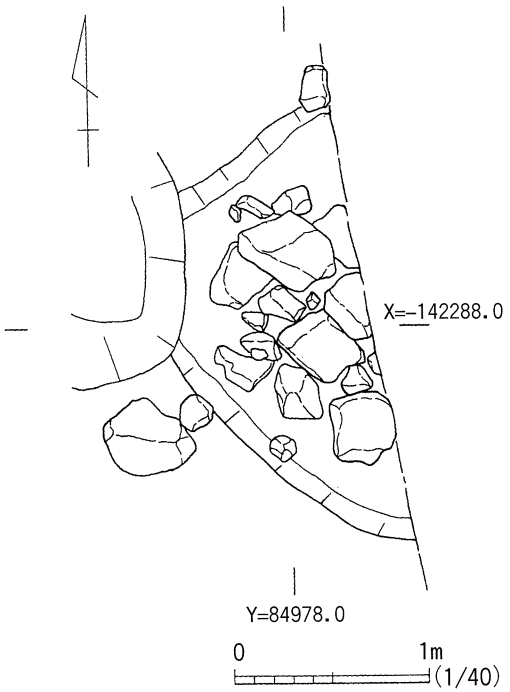
大の花崗岩礫でもって、最高３段に積上げられている。須恵器の出土レベルに床面を想定できる。

集石遺構（第37図・図版31）

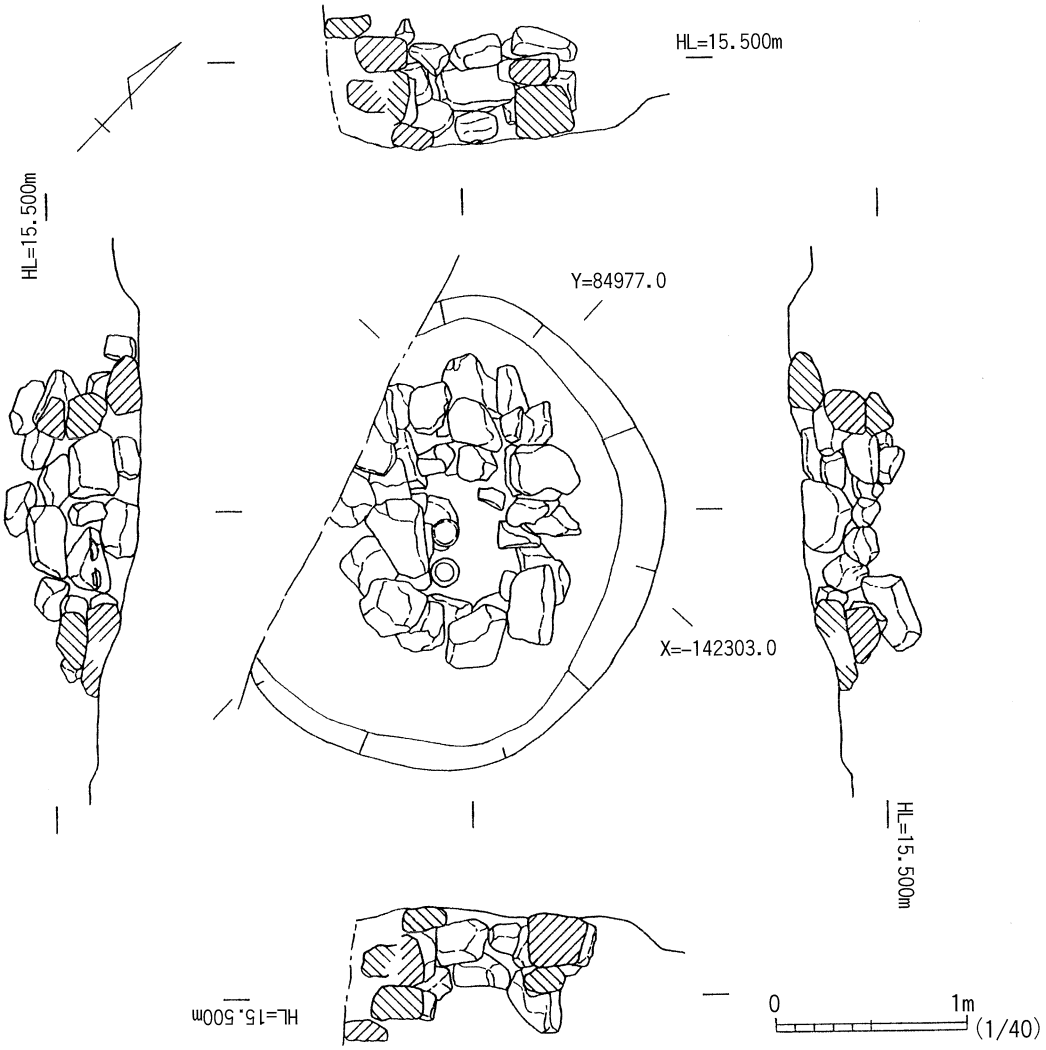
調査区の北半部にて検出した。0.5～0.6m大の花崗岩礫が不規則に積まれていた。浅い掘方をもつ。出土遺物はない。



第36図　旧河道１木製品出土状況



第37図　集石遺構平面図



第38図　石組遺構平面・立面図

土坑10～16

調査区の北半部にて７基検出した。埋土は砂質土層を主体とし、わずかに粘砂質土を含むものがある。どれも形状は不整形であり、断面は浅い皿状を呈するものや２段に落込むものなどがある。土坑からは、土器細片などがわずかに出土するのみである。

土坑17・18

ともに形状が不整形である。板材が出土している点を除けば、他の土坑との相違点は見られない。

第３節　古墳時代中期～後期（第３遺構面　第39図・図版32）

調査区全体を覆う洪水堆積層（第６層）を人力にて除去した段階で旧河道１－ｂ・旧河道２と杭列３を検出した。

旧河道１－ｂ（旧河道１の中層）

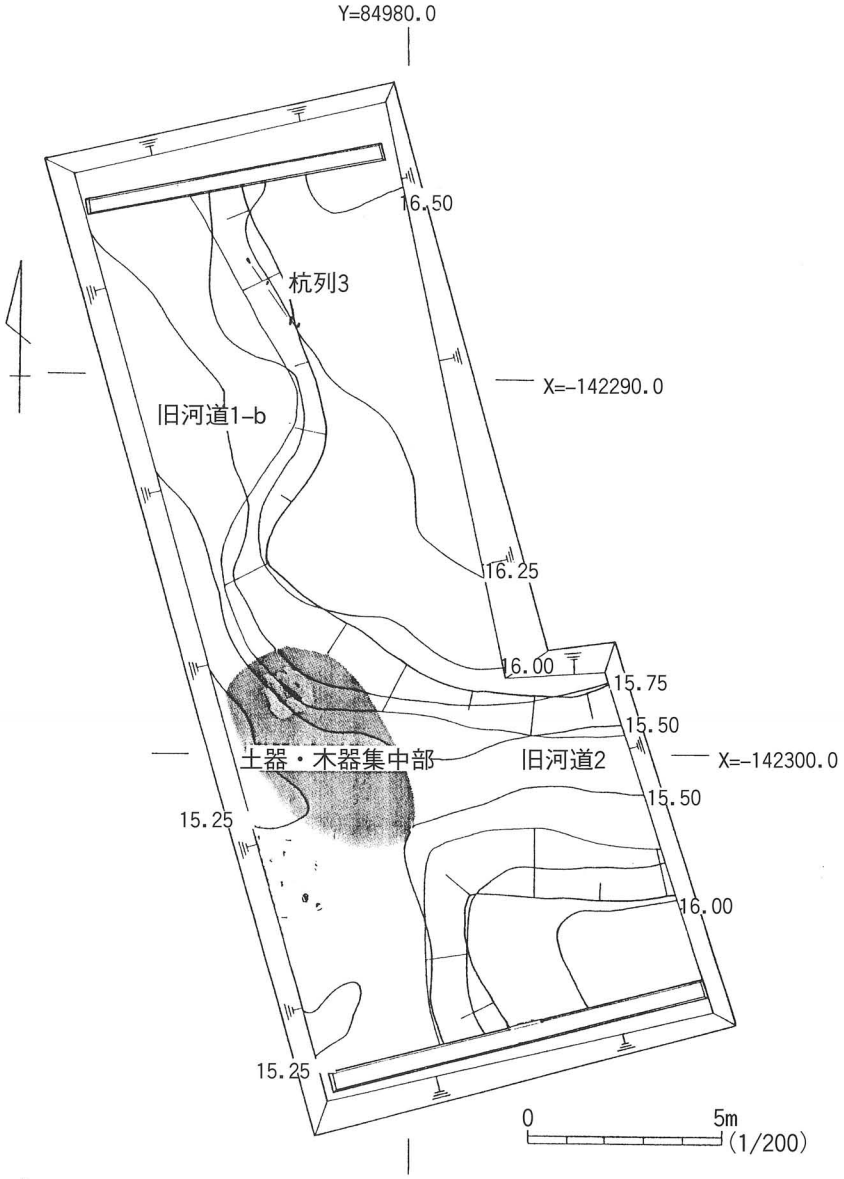
検出幅が上層よりやや広がる。堆積土は上層とはことなり、黒灰色粘質土を主体とする。シルトが主体となるところから大型植物化石や花粉化石等が多数含まれており、ほとんど流れのない状況が伺える。旧河道２との合流点にて、土器・木器集中部が認められた。土器や木製品はこの土器・木器集中部を中心に多数検出した。土器は須恵器の蓋杯が多数を占め、他に有蓋高坏、瓹、短頸壺、脚付高杯、提瓶、横瓶、土師器の椀などが少量出土している。木製品には農工具の柄と思われるものや刀形木製品および杭材などが出土している。これらは堆積土の中層下部～下層のほぼ上面に集中し、かつ土器は比較的完形に近いものが多い。また、堆積土に粘質土が多く混じるところから、二次的な移動は考えにくく、周辺部から投棄された可能性が高い。また、河道北半部にて木製品の鍬の身の完形品が出土している。

旧河道２

東西方向に流れる旧河道である。幅5.8m、検出長5.6mを測る。須恵器片などが土器・木器集中部付近にて出土している。

杭列３

旧河道１－ｂの北半部肩部にて検出した。45°～30°の角度でもって河道肩部にむけて打込まれており、河道１の護岸に関係するものであろう。



第39図　第３面遺構平面図

第３章　出土遺物

概　要　コンテナで22箱の遺物が出土した。そのうち土器は14箱、木製品７箱、その他(埴輪・石器・鉄器等)１箱である。古墳時代中期～近世のものが出土しているが、中でも古墳時代中期～後期の土器や木製品が多く、飛鳥～平安時代の土器・木製品がそれに次ぐ。土器類の中では、古墳時代中期～後期の須恵器が圧倒的に多く、杯身・杯蓋・提瓶・横瓶・瓿・甕・壺などの器種がある。埴輪は数点出土しており、須恵質のものと土師質のものがある。他に紡錘車や敲石、土錘なども出土している。木製品は、古墳時代～平安時代のものであり、鍬先・槽・刀形木製品・建築部材・杭等がある。

第１節　土　器

（１）旧河道出土土器

・奈良時代（第40図、１～３）　上層から出土している。１は須恵器杯Ｂ蓋、２は須恵器杯Ｂ、３は土師器杯Ａ。細片が多く調整も摩滅しており不明。量的にも少ない。また、墨痕のある土器もみられた。

・古墳時代（第41～44図・図版34～41、１～82）　上・中層からは多量の須恵器と若干の土師器が出土している。完形に復元されるものも多く1/3以上遺存するものについて図化、検討をおこなった。また、旧河道１と２、河道１の上層と中層の相互で接合関係がみられたため一括して記述をおこなう。

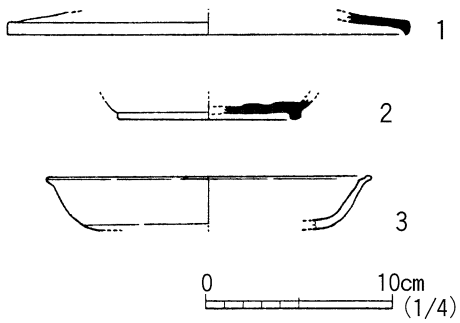
《須恵器》

杯蓋は37点ある。調整は基本的に全て同じで、天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面と口縁部外面は回転ナデ調整である。形態の特徴から天井部と口縁部をわける稜線が明瞭で直下に凹線のみられるもの（１～３、Ⅰ類)、稜線が不明瞭で凹線状のもの（４～24、Ⅱ類)、天井部と口縁部の境がわずかな稜線となるもの（25～30、Ⅲ類)、天井部から口縁部にかけて丸くなだらかなもの（31～37、Ⅳ類）に分けられる。Ⅰ、Ⅱ型式は口縁端部内面に内傾する面を全てがもつが、Ⅲ、Ⅳ類はもつもの（25～27、Ⅲ－ａ類、31～33、Ⅳ－ａ類）と丸くおさめるもの（28～30、Ⅲ－ｂ類、34～37、Ⅳ－ｂ類）に細分される。特徴として全体的に歪むものや、色調が淡黄色で焼成の悪いものもみられる。

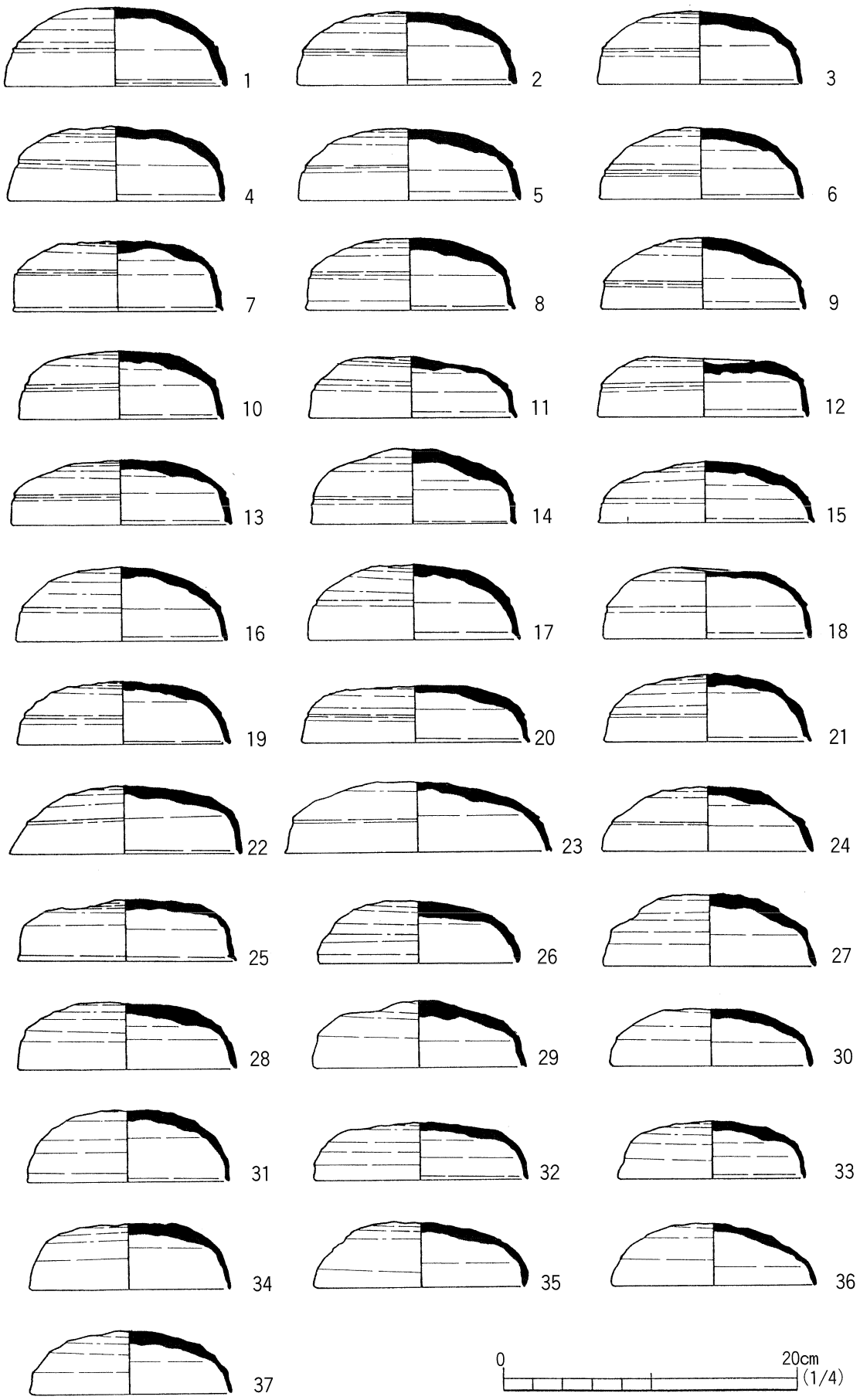
杯身は25点ある。調整は基本的に全て同じで口縁部外面、内面は回転ナデ調整、底部外面は回転ヘラ削り調整である。形態の特徴から器高が高いもの（38～49、52、Ⅰ類)、低いもの（50、51、53～61、Ⅱ類)、口径が縮小したもの（62、Ⅲ類）に分けられる。Ⅰ類は口縁端部が内傾する面をもつもの（38～42、Ⅰ－ａ類）ともたないもの（43～49、52、Ⅰ－ｂ類）に細別される。Ⅱ型式は立ち上がりが上方に向くもの（50、51、53～55、Ⅱ－ａ類）と内側に傾斜するもの（56～61、Ⅱ－ｂ類）に細別される。

63は杯で底部外面はヘラ切りの後未調整である。

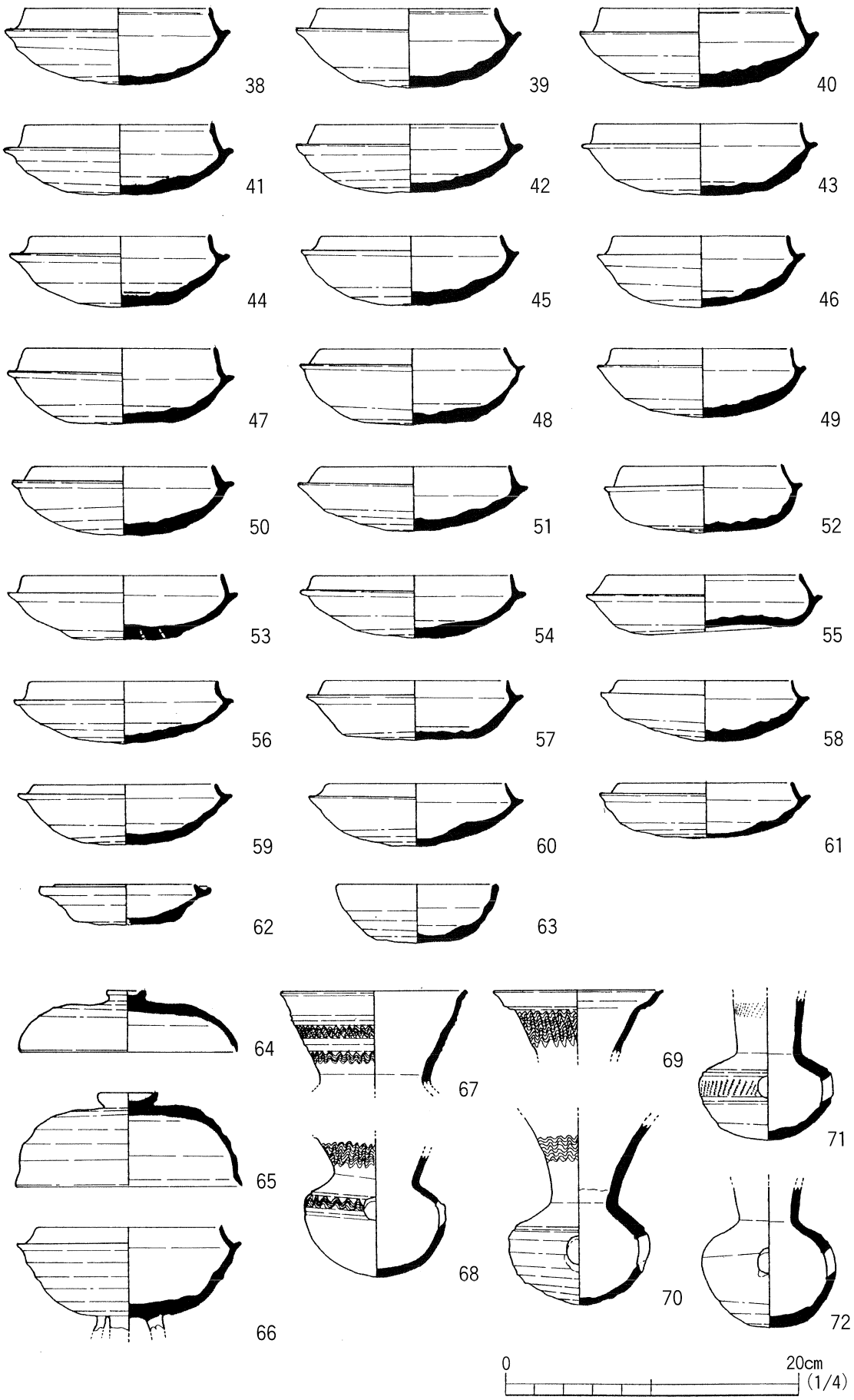
64、65は高杯蓋で64は口縁端部内面に段状の面をもっている。65も口縁端部内面に面をもつ。66は高杯で３方向に方形のスカシ孔をもつ。体部を強くナデ、器高が高い形態から65、66はセット関係をなすものかもしれない。



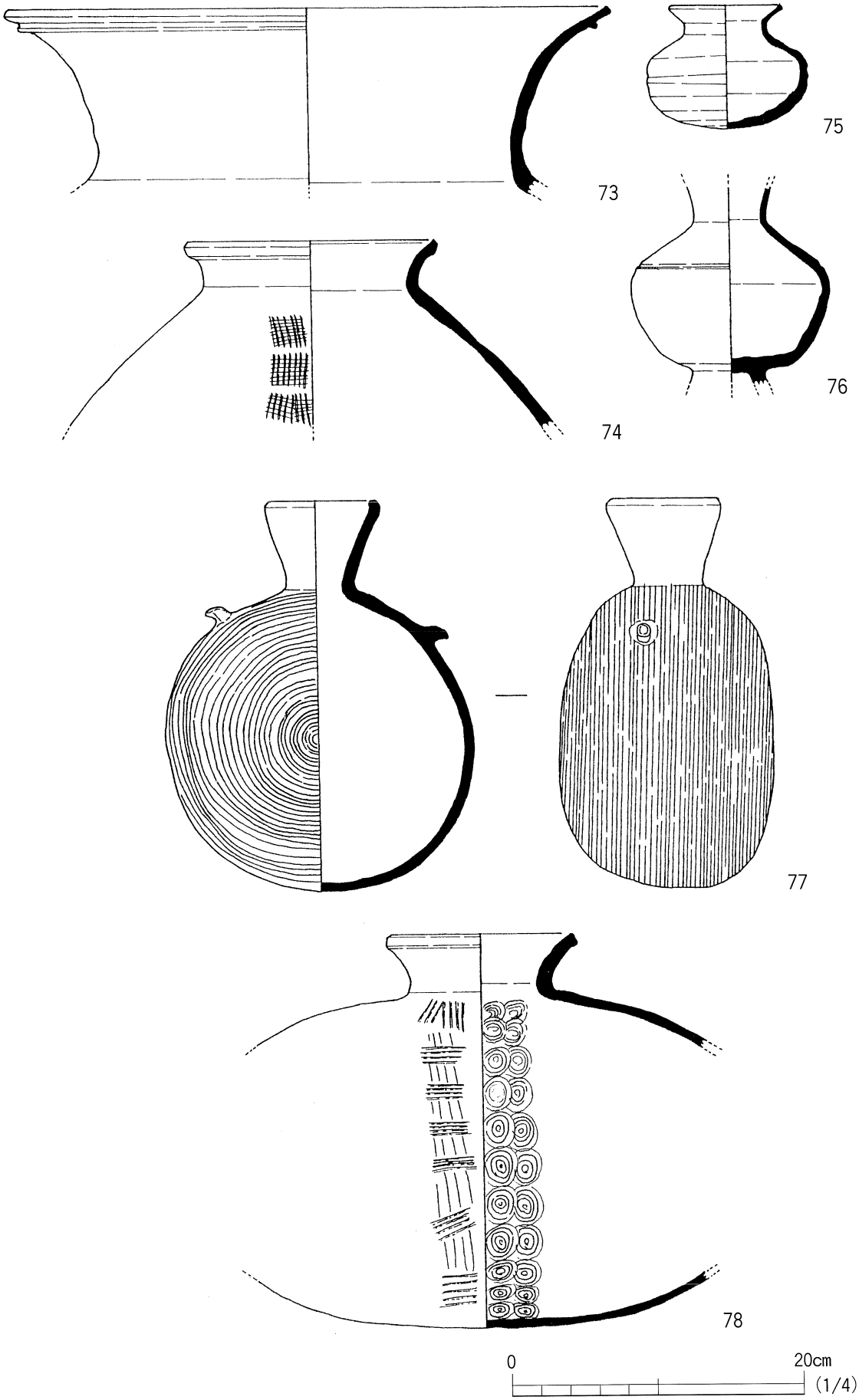
第40図　旧河道出土土器（１）



第41図　旧河道出土土器（２）



第42図　旧河道出土土器（3）



第43図　旧河道出土土器（４）

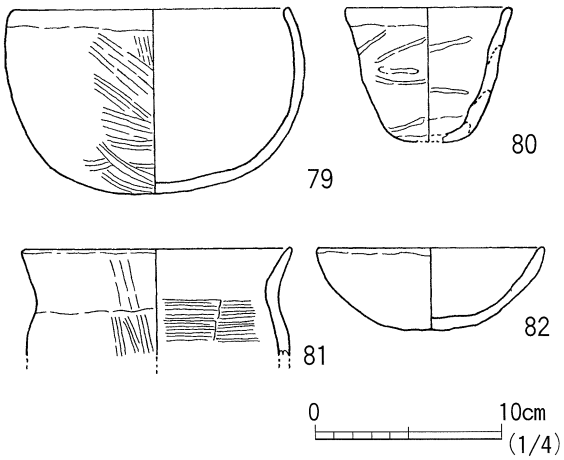
67は長頸壷あるいは瓹。口縁部に２条の稜線を施しその間と体部の間に波状文を施す。

68～72は瓹。５点出土している。68は口縁部が短かくあまり開かないものと考えられる。72は肩部の段もなくなり、波状文などの装飾をもたない。

73、74は甕でこれ以外に口縁部や体部の破片が多数みられた。73は口縁端部下に方形の突帯を張り付ける。内外面ナデ調整。

75は小型の壷、76は台付長頸壷で肩部に凹線を施す。脚部のスカシ孔の有無は不明。

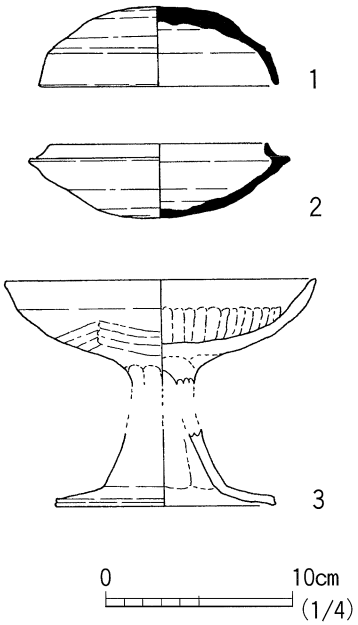
77は提瓶でほぼ完形に復元された。他にもう１個体みられた。78は横瓶。全形は不明。



第44図　旧河道出土土器（５）

《土師器》

79は鉢。外面ハケ、内面ナデ調整。80は椀で内外面部分的に棒状の工具で強くナデている。粗製のもので製塩土器の可能性もあるが明確ではない。81は甕。外面タテハケ、体部内面ヨコハケ。82は椀。ナデただけの粗製のものである。土師器は他に甑や甕などの把手が数点出土しているが、須恵器に比べ量は非常に少ない。



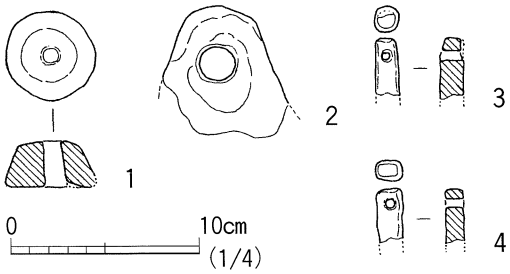
第45図　石組遺構出土土器

（２）石組遺構出土土器（第45図・図版40、１～３）

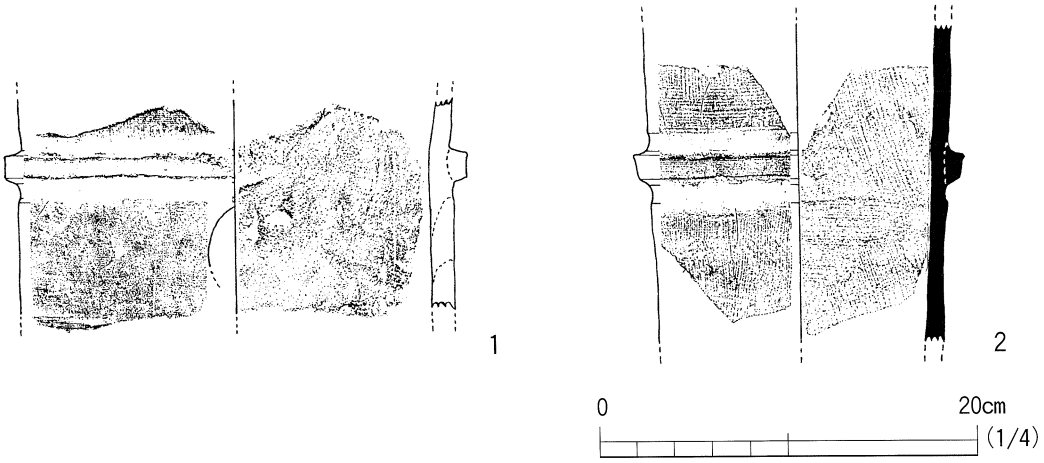
１は須恵器杯蓋。旧河道出土杯蓋のⅣ－ｂ類にあたる。２は須恵器杯身。旧河道出土杯身のⅡ－ｂ類にあたる。ともに淡黄色で焼成が甘い。３は土師器高杯。杯部内外面は幅の広いミガキ調整。脚部は縦方向のナデ。脚部と杯部は別個に作り接合している。

（３）包含層出土土器

包含層からは中世の土釜、近世陶磁器、下層の黒色土からは弥生土器の甕の破片が少量出土している。弥生土器は第Ⅴ様式のものである。



第46図　旧河道出土土製品



第47図　旧河道出土埴輪

（4）小結

以上の土器の編年的位置づけを検討してみたい。周辺地域において独自の須恵器編年は確立されておらず、在地窯の製品が存在する可能性も高いが、地理的な面で大阪陶邑窯の製品が多くもたらされたと考えられることから田辺氏による編年との対応を考えたい。杯蓋Ⅰ－a類、杯身Ⅰ類は口縁端部に内傾する面をもち、口径も大きいことからＭＴ15型式といえよう。杯蓋Ⅱ類は天井部と口縁部の境の凹線が明瞭にみられることからＴＫ10、Ⅲ類は凹線もほとんど消失していることからＴＫ43といえよう。杯身Ⅰ－b類は口縁端部に面をもたず、器高も高いことからＴＫ10、Ⅱ－a類は器高が低くなり、口径も小さくなることからＴＫ43といえよう。瑳の69～72、甕74、壷75、76、提瓶77、横瓶78もこのＴＫ10～43の時期のものである。杯蓋Ⅳ類、杯身Ⅱ－b類、石組遺構出土土器はその特徴からＴＫ209といえよう。

壷67、瑳68、甕73は破面が暗紫色を呈し、調整も丁寧である。68はＴＫ23、47に属するものであるが、67、73は初期須恵器に属するものと考えられる。

第２節　土製品・埴輪（第46・47図）

第46図１は土製紡錘車。直径4.8cm、高さ2.5cm。中心の孔は直径0.9cmで上から穿孔している。下部の欠損はこの時のものかもしれない。２はタコ壷の吊り手部分。３、４は土錘。直径1.3cmで端部に横方向に穿孔するものである。

第47図１の埴輪は土師質であるが、よく焼けしまっている。外面は部分的に縦ハケ（７本／１cm）がみられるがほとんどは摩滅している。内面調整は不明。円形のスカシ孔がみられる。1/8ほどの破片であるが復元径は23cm。２は須恵質である。外面はＣ種横ハケののち縦ハケ（７本／１cm）。内面は突帯の内側のみ横ハケで他は縦ハケあるいは斜めハケ。

第３節　木製品（第48～50図・図版42・43）

木製品(人為的な加工の痕跡が観察できる木片)は約60点あるが、状態は良好なものは少ない。ある程度の用途が確認できたものは約30点であり、半数は板状木製品・板材・角材・割材等の用途不明木製品である。用途の判明したものには、農具、農工具、容器、祭祀具、家具、建築材、土木材などがあるが、建築材と土木材等が2/3を占める。器種の判明したものには、鍬・編錘・槽・案・扉・刀形木製品・柱材・丸杭・角杭などがある。

このような中で、図化掲載したものは20点であり、これらを主として、記述を進めてゆく。なお、詳細は附編第１表　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種同定一覧を参照して頂きたい。

１は鍬の身である。先端に「U」字形の鉄刃を装着したものと思われる。装着部の幅は12.5cmで、着柄角度は60°～70°である。基部端に製作痕を残す。２は網錘は方形の有孔をもつものである。心材を分割しただけのもので表皮を残す。３は容器の槽である。底面と長側面の片面しか残存していないが、両端辺につながる屈曲部分がわずかに残存しているため、その長辺長は推測できる。

４は刀形木製品である。基部を欠損するためその全形を知ることはできないが、先端部は比較的シャープに仕上げている。５は長楕円形の曲物の底板と考えられる。１箇所に樹皮を確認できるので、底板と側板の接合方法が推測できる。おそらく、平坦な底板の上に側板を載せて樹皮で綴じ合わせたと思われる。６は案の脚部である。平面形は台形に突起がつき、底面には角部を中心に擦り減りが見られる。広い側面には２箇所に穿孔途中の穴がみられる。

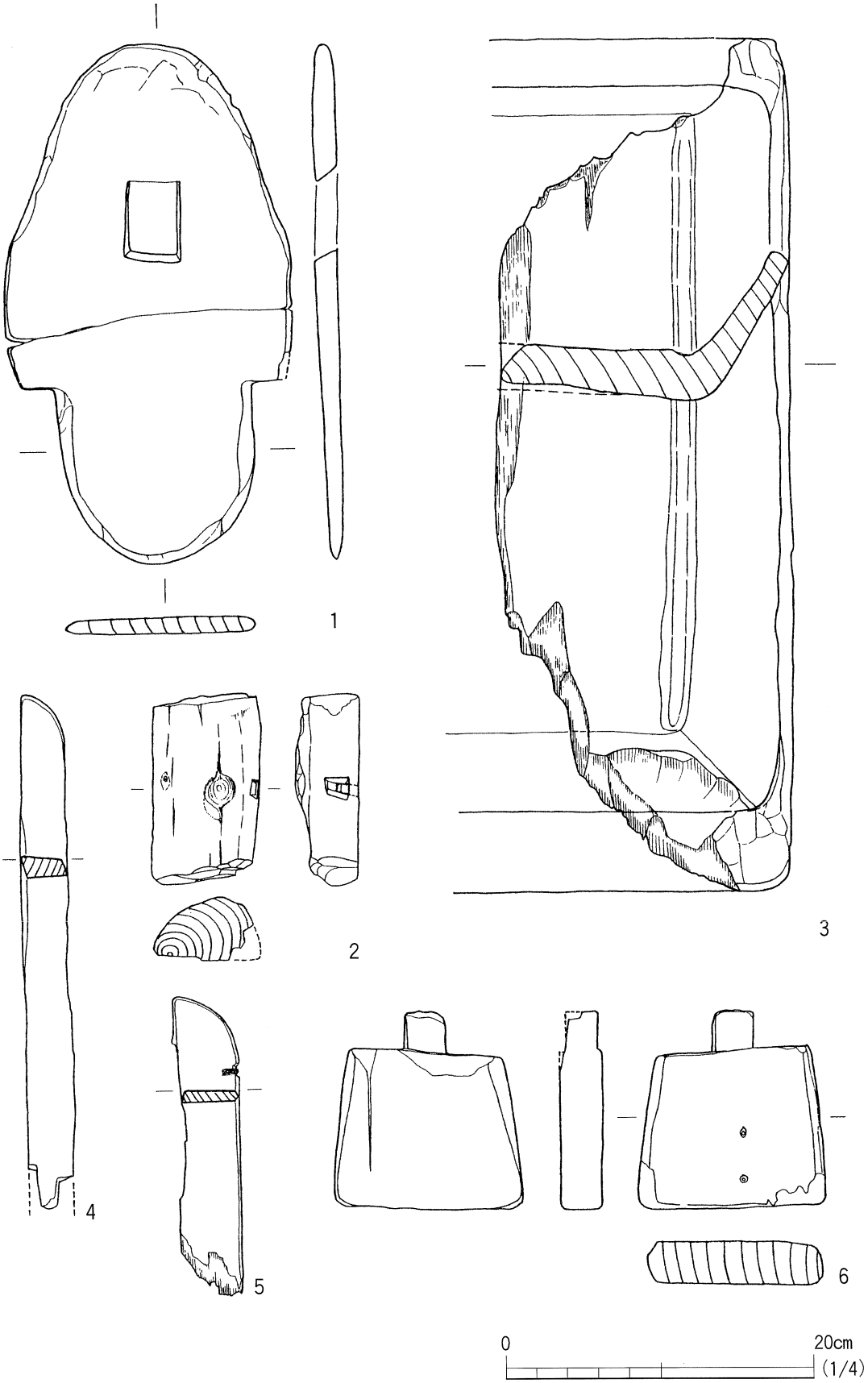
７・８は建築部材である。７は扉の一部で、軸部分が残存している。軸径は約4cmで、長さは7.5cmを測る。８は２箇所に抉りをもつ角材である。両端が欠損しているためその全容は不明である。９～11は土木材の杭である。９は角材の先端を２方向から加工したものである。10・11は自然木を枝打ちしたものに３方向から加工を加えたものである。12・13は柱材である。どちらも柱を切断した残りの部分であろう。14は自然木を枝打ちしたのち、方形の穿孔と抉りを加えたものである。状態が悪いためその全容は分らないが、建築部材の一部と考えられる。

15・16は板状木製品である。両者とも一端が欠損しており、全容は不明である。15は板目材、16は柾目材である。17・18は用途不明木製品である。両者とも柾目材である。19・20は農工具の柄である。19は基部がやや突出している。20は基部を穿孔しているが、穿孔方法は粗雑であり、仕上げはおこなわれていない。

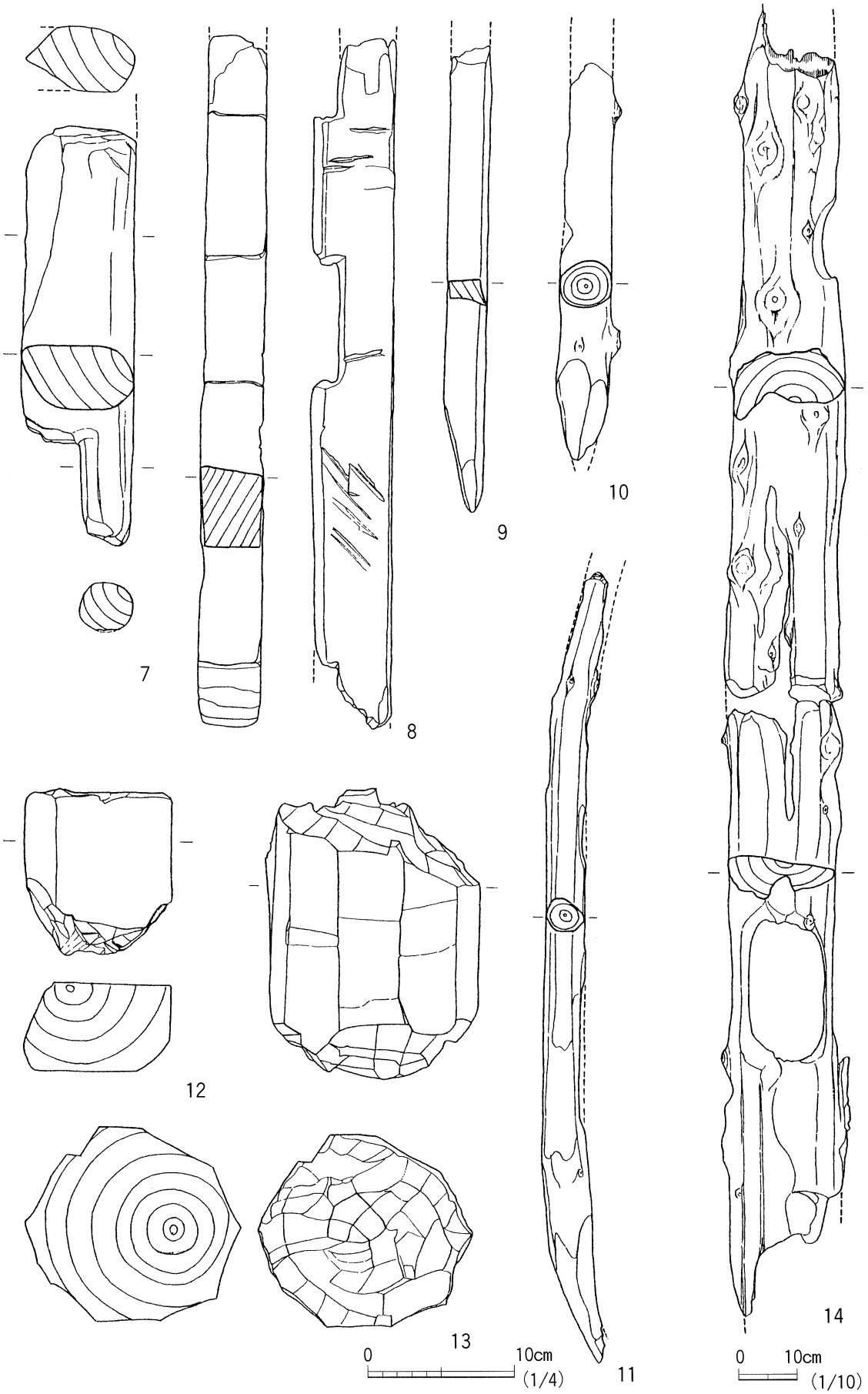
第４節　石　器（第51図）

石器は、旧河道１の上層から石皿もしくは台石（３・４）が、旧河道１中層の土器・木器集中部から敲石（１・２）が出土している。

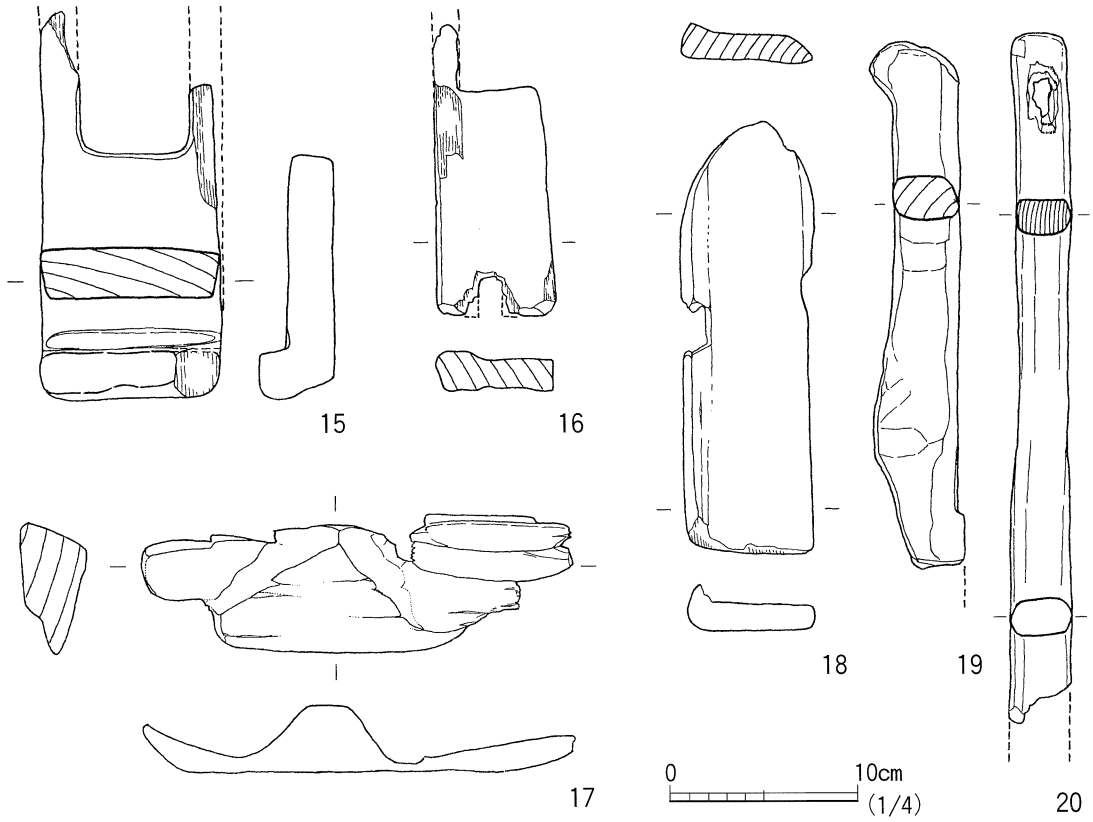
１は閃緑岩質の、２は凝灰岩質の敲石である。ともにわずかな擦痕と敲痕を残す。３・４はともに溶結凝灰岩質の石皿もしくは台石である。４は凹面を有する。



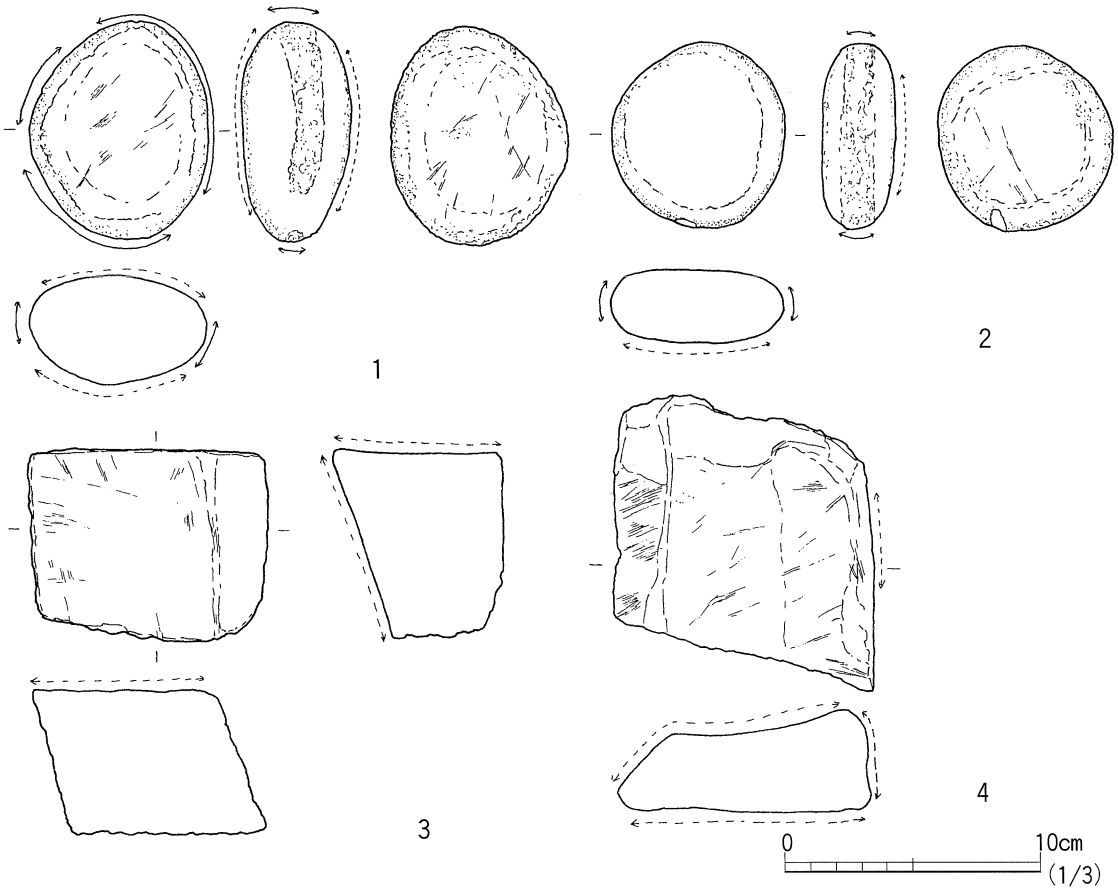
第48図　旧河道出土木製品（1）



第49図　旧河道出土木製品（２）



第50図　旧河道出土木製品（3）



第51図　旧河道1出土石器

第4章　ま　と　め

今回の調査成果の主なものは、古墳時代中期～平安時代の河道と飛鳥時代の石組状遺構を検出した点にある。中でも旧河道１－ｂの木器・土器集中部からは、比較的完形に近い須恵器等が多数出土しており、河道周辺から投棄された可能性が高い。調査地の周辺では、第14次調査地や第11次調査地において、同時期の竪穴式住居跡が検出されており、この付近の居住域の様相を考える上で重要な資料となろう。住吉宮町遺跡の古墳時代後期の遺構は、これまで方墳20基以上、竪穴式住居跡20基以上が検出されており、それ以外にも溝・旧河道・水田等が検出されている。また、郡家遺跡からも多数の竪穴式住居跡が検出されており、両遺跡を一つの集落の広がりと考え、西摂地域における古墳時代後期の大集落と捉えることもできる。ただ、その広がりに比べて、古墳時代後期の微地形や遺構のデータはあまりに点的であり、居住域や墓域の広がりや変遷を追うことは難しい。そのような状況のなかで、これまでとは、やや異質のデータを提示できたことは、集落の実態にせまる上で一つの成果とみることができよう。また、河道内に石組状遺構があることもあり、旧河道自体を古墳の周溝とすることも考えられるが、遺跡内の古墳の分布域から離れており、また古墳群の位置する平坦面より地形が南に極端に下る斜面地に調査地が位置すること、遺物の出土状況から古墳である可能性は低いと考えられる。

飛鳥時代の石組状遺構は河道がある程度埋没した段階で作られ、その形状から埋葬施設の可能性も考えられるが、それに伴う盛土が認められなかったこと、検出位置が河道内にあたること、さらに周辺域の調査において墓域が検出されていないことなど現状では判断できる材料は十分でない。さらに、祭祀の面からの可能性も考える必要があろう。類例等の増加を待って今後の検討課題としたい。

奈良時代～平安時代の遺物には、須恵器転用硯・紡錘車・建築部材等がある。今回調査地の北方に位置する第14次調査地においても、奈良時代の掘立柱建物や井戸等が検出されており、住吉宮町遺跡における律令期以降の状況を把握する上で、参考資料となろう。

以上の様な調査成果から今回の調査地は遺跡内においてもかなり南西の縁辺部に近いことが推測される。住吉宮町遺跡の範囲を考える上での重要な資料を提供したといえよう。

第４表　第20次調査出土土器観察表

◎第40図

No.	器　種	法　量		調 整 技 法	色調	胎土	焼成	ロクロ方向	出土層位	遺存状況	備考
		口径	器高								
1	須恵器　杯Ｂ蓋	21.0		内外面回転ナデ	灰白色	密	硬質		旧河道1上	1/6	
2	須恵器　杯Ｂ	（底径）　9.6		内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	軟質		旧河道1上	1/4	
3	土師器　杯Ａ	16.8		口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ナデ	灰褐色	やや粗	軟質		旧河道1上	1/8	

◎第41～44図

1	須恵器　杯蓋	15.0	5.4	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	淡灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中、2	1/2	底部内面に同心円当具痕あり
2	須恵器　杯蓋	14.8	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	軟質	右	旧河道1中	1/2	
3	須恵器　杯蓋	14.0	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	暗灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1上	4/5	
4	須恵器　杯蓋	14.7	5.2	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	黒灰色	やや粗	軟質	右	旧河道１中	4/5	
5	須恵器　杯蓋	15.2	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中	4/5	
6	須恵器　杯蓋	14.0	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1上	4/5	ややひずむ
7	須恵器　杯蓋	14.2	4.8	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	淡灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1上	4/5	
8	須恵器　杯蓋	14.2	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中、2	2/3	
9	須恵器　杯蓋	14.1	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	淡灰色	密	硬質	不明	旧河道1中、2	3/4	
10	須恵器　杯蓋	14.0	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上	2/3	
11	須恵器　杯蓋	14.2	4.2	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上	4/5	底部内面に同心円当具痕あり
12	須恵器　杯蓋	14.5	4.1	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1上	4/5	天井部頂未調整
13	須恵器　杯蓋	15.0	4.6	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上	3/4	天井部頂未調整
14	須恵器　杯蓋	14.0	5.2	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	不明	旧河道1中	1/3	
15	須恵器　杯蓋	14.8	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	軟質	右	旧河道1中、2	5/6	
16	須恵器　杯蓋	14.3	5.1	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上、2	2/3	
17	須恵器　杯蓋	14.4	5.2	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1中、2	3/4	全体ひずむ
18	須恵器　杯蓋	14.2	4.9	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	2/3	
19	須恵器　杯蓋	14.5	4.4	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1上	4/5	
20	須恵器　杯蓋	15.5	4.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	暗灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	4/5	
21	須恵器　杯蓋	14.2	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1上	4/5	
22	須恵器　杯蓋	15.7	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1上、2	4/5	全体ひずむ
23	須恵器　杯蓋	17.6～18.3	4.9	口縁部外面、内面回転ナデ天井部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	軟質	左	旧河道1上	3/5	全体楕円形
24	須恵器　杯蓋	14.4	4.4	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	5/6	
25	須恵器　杯蓋	14.8	4.2	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上、2	1/3	
26	須恵器　杯蓋	13.6	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	左	旧河道1上	3/4	頂部内面ユビナデ
27	須恵器　杯蓋	14.5	4.9	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	左	旧河道1上	2/3	天井部頂未調整
28	須恵器　杯蓋	14.9	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	5/6	
29	須恵器　杯蓋	14.4	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	明灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	1/2	

No.	器　種	法　量		調 整 技 法	色調	胎土	焼成	ロクロ方向	出土層位	遺存状況	備考
		口径	器高								
30	須恵器　杯蓋	13.6	3.9	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1中	2/3	
31	須恵器　杯蓋	13.6	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	暗灰色	やや粗	軟質	右	旧河道1中	2/3	天井部頂未調整
32	須恵器　杯蓋	14.6	4.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	軟質	右	旧河道1中、2	3/5	外面自然釉
33	須恵器　杯蓋	12.8	4.0	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	2/3	
34	須恵器　杯蓋	13.5	4.5	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上、2	2/3	
35	須恵器　杯蓋	14.4	4.5	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	明灰色	密	硬質	左	旧河道1上、2	2/3	
36	須恵器　杯蓋	14.0	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	左	旧河道1中、2	4/5	土器片融着
37	須恵器　杯蓋	13.6	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部回転ヘラ削り	淡灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中	2/3	
38	須恵器　杯身	12.9	5.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中、2	完形	
39	須恵器　杯身	12.1	5.5	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1上	2/3	
40	須恵器　杯身	13.4	5.5	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1中、2	1/2	
41	須恵器　杯身	12.9	4.9	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	明灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上、2	4/5	
42	須恵器　杯身	12.7	4.8	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	淡褐色	やや粗	軟質	左	旧河道1中	4/5	底部内面同心円当具痕
43	須恵器　杯身	14.1	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	淡灰色	密	硬質	左	旧河道1中	3/4	
44	須恵器　杯身	12.3	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	明灰色	密	硬質	不明	旧河道1上	5/6	受部に重ね焼き痕あり
45	須恵器　杯身	12.4	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1中、2	3/4	
46	須恵器　杯身	12.0	5.0	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	右	旧河道1上	5/6	底部外面自然釉付着
47	須恵器　杯身	13.1	5.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	左	旧河道1中	2/3	
48	須恵器　杯身	12.6	5.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1中、2	2/3	底部外面一直線のヘラ記号
49	須恵器　杯身	12.3	4.8	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中	2/3	底部内面強いナデ
50	須恵器　杯身	12.5	4.8	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰褐色	やや粗	軟質	左	旧河道1中	4/5	
51	須恵器　杯身	13.1	4.6	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰褐色	やや粗	軟質	右	旧河道1上、2	5/6	底部内面ユビナデ
52	須恵器　杯身	10.9	4.7	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質	右	旧河道1中、2	3/4	
53	須恵器　杯身	13.8	4.5	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質	不明	旧河道1中、2	1/3	粘土紐巻き上げ痕良く残す
54	須恵器　杯身	12.0～13.7	4.4	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	4/5	底部内面ユビナデ
55	須恵器　杯身	13.2	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	右	旧河道1中	5/6	
56	須恵器　杯身	13.0	4.4	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	淡褐色	やや粗	軟質	右	旧河道1中	4/5	
57	須恵器　杯身	12.7	4.2	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	明灰色	やや粗	硬質	左	旧河道1上	1/2	底部外面付着物あり
58	須恵器　杯身	12.0	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1上	5/6	
59	須恵器　杯身	12.6	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	左	旧河道1中、2	5/6	受部重ね焼き痕
60	須恵器　杯身	12.4	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	左	旧河道1中	2/3	
61	須恵器　杯身	11.9	3.9	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	青灰色	密	硬質	右	旧河道1中	5/6	
62	須恵器　杯身	9.8	2.8	口縁部外面、内面回転ナデ、底部回転ヘラ削り	茶灰色	やや粗	軟質	不明	旧河道1上	1/4	

No	器種	法量 口径	法量 器高	調整技法	色調	胎土	焼成	ロクロ方向	出土層位	遺存状況	備考
63	須恵器　杯	10.9	4.1	口縁部外面、内面回転ナデ、底部ヘラ切り未調整	青灰色	密	硬質	不明	旧河道1上	1/2	
64	須恵器　高杯蓋	15.0	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部外面回転ヘラ削り、一部回転ナデ	灰白色	やや粗	軟質	不明	旧河道2	5/6	頂部内面ユビナデ
65	須恵器　高杯蓋	15.6	6.6	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部外面回転ヘラ削り	灰白色	密	軟質	右	旧河道1中、2	5/6	
66	須恵器　高杯	12.6	6.1	口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	密	軟質	不明	旧河道1	1/2	
67	須恵器　長頸壺	12.6		内外面回転ナデ	青灰色	密	硬質		旧河道1中	口縁1/6	内面自然釉
68	須恵器　瓶			体部上半外面、内面回転ナデ、体部下半外面ナデ	青灰色	密	硬質		旧河道１中	体部のみ	
69	須恵器　瓶	11.6		内外面回転ナデ	青灰色	密	硬質		旧河道1中	口縁1/4	内外面自然釉
70	須恵器　瓶			口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	青灰色	やや粗	硬質		旧河道1中	頚、体部完形	
71	須恵器　瓶			口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質		旧河道1中	頚、体部完形	
72	須恵器　瓶			口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質		旧河道1上	頚、体部完形	
73	須恵器　甕	41.2		内外面回転ナデ	青灰色	密	硬質		旧河道1中	口縁1/8	
74	須恵器　甕	17.0		口縁部内外面回転ナデ、体部外面格子タタキを部分的に消す、内面同心円当て具痕	灰白色	やや粗	硬質		旧河道1上	口縁1/3	
75	須恵器　壺	7.7	8.6	口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	硬質	右	旧河道2	5/6	
76	須恵器　台付長頸壺			体部上半外面、内面回転ナデ、体部下半外面回転ヘラ削り	灰白色	密	硬質		旧河道1中	体部1/3	
77	須恵器　提瓶	7.4	27.0	口縁部外面、内面回転ナデ、体部外面カキ目（5～6本／1cm）	青灰色	密	硬質		旧河道2	5/6	
78	須恵器　横瓶	12.5		口縁部内外面回転ナデ、体部外面平行タタキを部分的に消し、内面同心円当て具痕	青灰色	密	硬質		旧河道1中	1/3	
79	土師器　鉢	14.5	9.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ、体部内面ナデ	灰褐色	密	軟質		旧河道1上	3/5	
80	土師器　椀	8.7	7.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ナデ	明灰色	粗	軟質		旧河道1中	1/3	
81	土師器　甕	14.2		口縁部内外面ヨコナデ、外面タテハケ内面ヨコハケ（6本／1cm）	茶褐色	密	軟質		旧河道1上	口縁1/3	
82	土師器　椀	12.0	4.3	内外面ナデ	赤褐色	粗	軟質		旧河道1中	5/6	

◎第45図

1	須恵器　杯蓋	12.6	4.3	口縁部外面、内面回転ナデ、天井部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	軟質	右	石組遺構	完形	頂部内面ユビナデ
2	須恵器　杯身	11.5	4.0	口縁部外面、内面回転ナデ、底部外面回転ヘラ削り	灰白色	やや粗	軟質	右	石組遺構	完形	
3	土師器　高杯	（口径）16.4 （底径）11.6		内外面ヨコナデ、杯部外面ミガキ、脚部内面ユビナデ	灰褐色	密	軟質		石組遺構	口縁1/3 脚1/4	

参考文献・資料・報告書

『兵庫県史　考古資料編』　兵庫県　1992

『新修　神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古』　神戸市教育委員会　1989

『昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1988

『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会

『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会

『平成２年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1993

『平成４年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1995

『平成５年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1996

『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1997

『県埋蔵文化財調査年報　昭和60年度』　兵庫県教育委員会　1988

『平成７年度　年報』　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1996

『地下に眠る神戸の歴史展Ⅳ－発掘調査速報展』神戸市教育委員会　1986

『地下に眠る神戸の歴史展Ⅵ』神戸市教育委員会　1988

『地下に眠る神戸の歴史展Ⅶ－発掘調査速報展』神戸市教育委員会　1989

『新交通システムに伴う　住吉宮町遺跡立会調査概要』兵庫県教育委員会　1988

『住吉宮町遺跡　第11次調査』神戸市教育委員会　1990

『兵庫県文化財調査報告第63冊　住吉宮町遺跡群Ⅰ（坊ヶ塚遺跡）』兵庫県教育委員会　1989

『兵庫県文化財調査報告第81冊　坊ヶ塚遺跡（住吉宮町遺跡群Ⅱ）』兵庫県教育委員会　1990

『兵庫県文化財調査報告第83冊　住吉宮町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1991

『灘住吉郵便局新築工事に伴う　住吉宮町遺跡発掘調査実績報告書』兵庫県教育委員会　1987

『昭和62年度　住吉宮町遺跡第５次（北野邸）埋蔵文化財発掘調査概要』神戸市教育委員会　1987

『平成元年度　住吉宮町遺跡（第９次）整理事業実績報告』神戸市教育委員会　1990

『住吉宮町遺跡　立会調査実績報告書』兵庫県教育委員会　1989

『都市計画道路住吉南線基礎工事に伴う　住吉宮町遺跡発掘調査概要』兵庫県教育委員会　1989

『平成元年度　東灘区民センター建設に伴う発掘調査概要　－住吉宮町遺跡第13次発掘調査－』
神戸市教育委員会　（財）神戸市スポーツ教育公社　1990

『住吉宮町遺跡14次調査　発掘調査実績報告書』神戸市教育委員会　1991

『住吉宮の前住宅建替事業に伴う　住吉宮町遺跡発掘調査　実績報告書』兵庫県教育委員会　1993

『住吉宮町遺跡15次調査　発掘調査実績報告書』神戸市教育委員会　1993

『住吉宮町遺跡16次調査　発掘調査実績報告書』神戸市教育委員会　1994

『平成７年度　住吉宮町遺跡第17次調査実績報告書』神戸市教育委員会　1996

『平成７年度　住吉宮町遺跡第18次調査実績報告書』神戸市教育委員会　1996

『兵庫県文化財調査報告　第36冊　北青木遺跡』兵庫県教育委員会　1986

『神戸市東灘区　岡本北遺跡』六甲山麓遺跡調査会　1992

『神戸市東灘区　郡家遺跡　－篠坪地区第10次調査－』六甲山麓遺跡調査会　1995

『兵庫県埋蔵文化財情報　ひょうごの遺跡18号』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1995
『平成８年度　住吉宮町遺跡第19次調査実績報告書』神戸市教育委員会　1997
『平成８年度　住吉宮町遺跡第20次調査実績報告書』神戸市教育委員会　1997
『住吉宮町遺跡　（第17次・第18次調査）』　神戸市教育委員会　1998
『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1998
『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1998
『神戸都市地図』柏書房（株）　1995
『神戸市埋蔵文化財分布図』神戸市教育委員会　1995
「復興と保護のはざまで揺れる　神戸の“埋蔵文化財”」　釘田寿一　『実業の日本』VOL98　1995
『続　住吉村史』（財）住吉学園　1982
『陶邑古窯址群』Ⅰ　田辺昭三　平安学園考古学クラブ　1966
『須恵器大成』　田辺昭三　角川書店　1981
『平城宮発掘調査報告』Ⅶ　奈良国立文化財研究所　1976
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ　奈良国立文化財研究所　1978
『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）静清バイパス（瀬名地区）埋蔵文化財調査報告書３　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第47集』中山正典・中鉢賢二　静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994

附　　編

住吉宮町遺跡（第20次調査）自然科学分析

第１章　出土木製品の樹種同定

第２章　出土した大型植物化石の分析

第３章　花粉化石群集の検討

第１章　出土木製品の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

第１節　はじめに

当遺跡は兵庫県神戸市東灘区住吉宮町に所在し、住吉川と石屋川に挟まれた扇状地の末端（標高14～15ｍ）に位置し、弥生時代～近世の複合集落遺跡であることが知られている。ここでは、旧河道１から出土した木器の樹種同定を報告する。木器は７～８世紀（飛鳥～奈良時代）と５～６世紀（古墳時代中期～後期）の層位から出土した建築や土木関係のものがほとんどである。これらの木器は土器と共に集中して産出していること、土器（須恵器）は完形に近いものが多いことから河道周辺から投棄された可能性が高いと考えられている。このようなことから背後の集落地で当時にどのような材を利用して生活していたのか、７～８世紀と５～６世紀では樹種の利用に変化が見られるのかどうかを知ることを目的に樹種同定を行った。

第２節　同定の方法

材の組織標本は、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の３方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入しプレパラートを作成し、光学顕微鏡を用いて組織を観察し同定を行った。標本プレパラートは、(財)神戸市埋蔵文化財センターに保管してある。

第３節　結果

樹種同定結果の一覧を第１・２表に示し、同定された材組織の記載を以下に記す。

モミ属 Abies マツ科　図版１ 1a.-1c.（W-5032）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞をもたない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやか。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において細胞壁に数珠状肥厚がみられ上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型、スキ型とヒノキ型が混在し１～４個ある。接線断面において放射組織は比較的背が高い。

モミ属は常緑高木で暖帯から温帯下部の丘陵地からブナ帯上部に普通に見られるモミ、温帯上部の亜高山帯に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの５種がある。材は加工はしやすいが腐りやすい。材組織は類似しており種を区別することはできていない。

アカマツ Pinus densiflora Sieb. et Zucc. マツ科　図版１　2a.-2c.（W-5084）

垂直・水平樹脂があり早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸状の肥厚が顕著である。

アカマツとクロマツは暖帯から温帯下部に生育し、アカマツは人間との関係が深く二次林の主要樹であり過去には現在ほど広く分布していなかった。アカマツは内陸部に、クロマツは海岸部に多く分布すし、いずれも他の樹種が育ちにくい場所でも生育する。両種からは樹脂が取れ、材は粘りがあり耐水性にもすぐれ、燃料材としても熱量が高く。

クロマツ Pinus thunbergii Parl. 図版１　3a.-3c.（W-5086）

上記のアカマツとほぼ同じ材組織であるが、放射仮道管の内壁の肥厚はアカマツほど先が鋭くなくなだらかである点で区別した。

針葉樹

仮道管・樹脂細胞を持つ針葉樹材。細胞壁が不朽しており分野壁孔の観察が充分にできず分類群を絞ることができなかったものである。一部分で観察できた分野壁孔は小型で２～４個であった。

コウヤマキ　Sciadopitys verticillata Sieb. et Zucc. コウヤマキ科　図版２　4a.-4c.（W-5062）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はスギ型を大きくしたような窓状。放射組織は10細胞高以下の低いものが多い。

コウヤマキは日本特産の１属１種の常緑高木である。暖帯下部から温帯の山地に生育する陰樹で、福島県以南から四国・九州の宮崎県まで分布し、特に長野県の木曽、和歌山県の高野山に多い。材は耐朽性・耐水性・耐蟻性に優れ、棺材として有名であるほかに風呂桶など水に関わる用具によく使われる。樹皮もマキハダとして水漏れ防止の詰め材として使われる。

スギ Cryptomeria japonica D.Don スギ科　図版２　5a.-5c.（W-5065）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管の壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で１分野に普通２個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。現在では植林の重要樹種である。

アスナロ　Thujopsis dolabrata sieb. et Zucc. ヒノキ科　図版２　6a.-6c.（W-5059）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量は概して少く、樹脂細胞は晩材部に散在する。　分野壁孔は小さく、孔口は細いレンズ状でその長軸は垂直からやや斜めに傾いたヒノキ型で、一分野に２～４個ある。

アスナロは日本特産で１属１種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

クロベ？ Thuja standishii Carr. ヒノキ科　図版３　7.（W-5031）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。横断面は作成できず、晩材の量や、早材から晩材の移行状態は不明である。全般に細胞壁が不朽して観察しにくいが、分野壁孔の孔口はやや大きいヒノキ型やスギ型があり、一分野に２～４個ある。以上の観察結果からクロベに近いと判断した。

クロベは本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

ヒノキ Chamaecyparis obtusa Endl. ヒノキ科　図版３　10a.-10c.（W-5056）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少なく、樹脂細胞は年輪の後半に分布する。分野壁孔は大きく、孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で１分野に２～４個、おもに２個が水平に整然と配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州の暖帯から温帯の山中の山腹や尾根筋のやや乾燥した所に生育する。材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ用途の多い有用材である。現在では重要な植林樹である。

コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis ブナ科　図版３　11a.-11c.（W-5049）

中型～小型の管孔が単独で放射方向や斜状に配列し、年輪界は不明瞭、広放射組織をもち、木部柔組織の接線状配列が顕著な放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一。放射組織はほぼ同性、単列のものと集合状・複合状の広放射組織があり、道管との壁孔は柵状・交互状で孔口は大きい。

アカガシ亜属は常緑でドングリをつけるカシ類の仲間で、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性があり、遺跡からは農具の用材としてよく出土する代表樹種である。

コナラ属クヌギ節 Quercus. subgen. Quercus sect. Cerris ブナ科　図版４　12a.-12b.（W-5054）

年輪の始めに大型の管孔が１～３層配列し、その後放射方向に小型・厚壁の管孔が配列し、管孔は単独、接線状・網状の木部柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースがある。放射組織は同性、単列のものと集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間の中でクヌギとアベマキが属する。２種は暖帯の山林や二次林に普通の高木で、関東ではクヌギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。

ヤナギ属 Salix ヤナギ科　図版４　13a.-13c.（埋没木）

小型の管孔が単独または２～４個が複合し散在する散孔材。管孔は年輪界でやや小さくなる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一。放射組織は異性単列、この試料は根株部分であり２細胞幅のものも混り、放射柔細胞の接線方向の幅も幹・枝材に比べ大きい。放射組織と道管との壁孔は交互状に密在する。

ヤナギ属は暖帯から寒帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい立地に生育する落葉高木または低木で多くの種類がある。材組織から樹種を特定することはできない。材質は軽軟で切削は容易、耐朽性は低い。

第４節　まとめ

当遺跡では５～６世紀（古墳時代中期～後期）と７～８世紀（飛鳥～平安時代）の木器の用途はどちらも建築・土木に関連したものが大多数を占め、その樹種も共通しているものがほとんどでモミ属・コウヤマキ・ヒノキ科・ヒノキ属・クロベ？・アスナロ・スギの針葉樹ばかりである。使用樹種に時代の変化は見られなかった。二つの時代を通じてコウヤマキが普通に出土するのは、生育分布域と符合し地域性が現れている。またコウヤマキと共にヒノキ科に属する樹種（ヒノキ属・クロベ？・アスナロ）が多いのも特徴で、近畿地域の今までの資料の傾向と符合する結果であった。ただし、５～６世紀（古墳時代中期～後期）からは１点も検出されなかったアカマツ・マツ属が、７～８世紀（飛鳥～平安時代）の割材と丸杭にそれぞれ使われており自然木としても出土している点が異なる。

５～６世紀の木器には鍬・刀形木製品と柄と思われるものが出土している。これらにはアカガシ亜属が使われていた。柄はこの他にスギ・ヒノキ属も使われており、柄には針葉樹も多用する傾向がみられる。

登録番号W-5085･5086･5087･5088の杭は時代が不確定であるがアカマツとクロマツであった。杭はどの遺跡でも針葉樹・広葉樹を含め近在に当時生育した雑木を使用する傾向があることから、杭材が使用された時期にはマツ属が当遺跡の周辺に普通に生育していたと思われる。

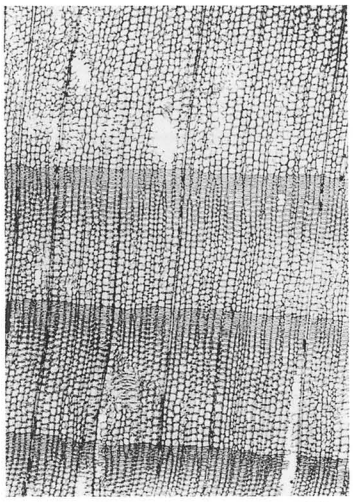
杭と同様に上からの入り込みが考えられ時期は特定できない埋没木の樹種は、ヤナギ属であった。

第１表　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品等の一覧表

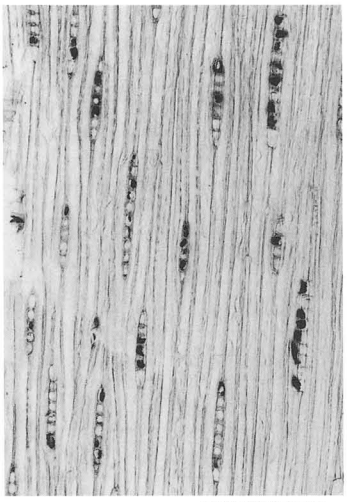
登録番号(w)	大分類	分類	出土遺構	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	樹種	挿図番号
5030	用途不明木製品	板材	旧河道１上層	18.1	4.5	1.8	ヒノキ科	
5031	用途不明木製品	板状木片	旧河道１上層	15.0	5.0	1.0	ネズコ？	
5032	土木材	丸杭	旧河道１	65.6	5.4	4.2	モミ属	
5033	用途不明木製品	角材	旧河道１上層	44.0	4.0	2.5	モミ属	
5034	用途不明木製品	板状木片	旧河道１上層	28.0	7.0	0.5	スギ	
5035	用途不明木製品	板材	旧河道１上層	66.0	23.0	4.5	ヒノキ科	
5036	容器	槽	旧河道１上層	66.8	9.1	19.5	スギ	3
5037	建築材	柱材	旧河道１上層	62.5	15.5	13.0	コウヤマキ	
5038	用途不明木製品	板材	旧河道１上層	117.	5.6	1.6	針葉樹	
5039	用途不明木製品	板材	旧河道１	157.	13.8	1.6	コウヤマキ	
5040	用途不明木製品	割材	旧河道１	33.0	9.0	4.0	スギ	
5041	用途不明木製品	板材	旧河道１上層	13.3	7.4	2.5	ヒノキ属	
5042	用途不明木製品	割材	旧河道１上層	38.0	8.0	3.0	コウヤマキ	
5043	用途不明木製品	割材	旧河道１上層	21.0	5.0	2.0	アカマツ	
5044	建築材	柱材？	旧河道１上層	13.8	7.8	7.2	コウヤマキ	
5045	自然木	—	旧河道１上層	—	—	—	アカマツ	
5046	建築材	板状木製品	旧河道１中層	34.1	10.4	2.2	スギ	
5047	土木材	角杭	旧河道１中層	34.5	2.8	3.4	ヒノキ科	
5049	用途不明木製品	板材木片	旧河道１中層	12.0	7.0	1.4	コナラ属アカガシ亜属	
5050	土木材	丸杭	旧河道１中層	19.0	5.4	4.1	コウヤマキ	
5051	建築材	柱材	旧河道１	11.6	10.6	6.3	コウヤマキ	12
5052	用途不明木製品	用途不明木製品	旧河道１上層	23.0	7.5	3.5	ヒノキ属	17
5053	土木材	丸杭	旧河道１上層	54.7	3.2	2.4	マツ属	11
5054	土木材	丸杭	旧河道１中層	24.7	4.6	4.0	コナラ属クヌギ節	
5055	用途不明木製品	板材	旧河道１	14.2	13.0	4.1	ヒノキ科	
5056	用途不明木製品	板状木製品	旧河道１中層	15.6	6.4	2.1	ヒノキ	16
5057	用途不明木製品	板材	旧河道１中層	14.8	10.7	2.0	ヒノキ属	
5058	用途不明木製品	板材？	旧河道１中層	10.5	9.8	3.6	ヒノキ属	
5059	土木材	角杭	旧河道１中層	30.2	2.8	1.7	アスナロ	9
5060	建築材	柱材	旧河道１中層	20.0	14.8	13.5	コウヤマキ	13

5061	用途不明木製品	板状木製品	旧河道１中層	20.5	90.6	4.0	ヒノキ科	15
5062	用途不明木製品	角材	旧河道１中層	12.5	7.4	4.0	コウヤマキ	
5063	用途不明木製品	加工円柱状品	旧河道１中層	9.0	4.5	4.5	モミ属	
5064	農具	鍬	旧河道１中層	34.0	19.0	1.5	コナラ属アカガシ亜属	1
5065	農工具	柄？	旧河道１中層	53.2	2.8	1.0	スギ	
5066	建築材	扉材	旧河道１中層	29.0	7.8	4.5	針葉樹	7
5067	農工具	柄	旧河道１中層	36.4	3.3	2.0	ヒノキ属	20
5068	農工具	柄	旧河道１中層	28.0	4.5	2.4	コナラ属アカガシ亜属	19
5069	用途不明木製品	用途不明木製品	旧河道１中層	32.9	7.2	2.1	コウヤマキ	18
5070	家具	案脚部	旧河道１中層	13.3	12.4	2.8	針葉樹	6
5071	祭祀具	刀形木製品	旧河道１中層	31.9	3.2	1.4	コナラ属アカガシ亜属	4
5072	農工具	柄？	旧河道１中層	60.0	3.2	2.8	ヒノキ属	
5073	建築材	加工大形板材	旧河道１中層	30.0	11.5	3.6	針葉樹	
5074	祭祀具	刀形木製品？	旧河道１中層	70.0	6.5	2.5	スギ	
5075	用途不明木製品	丸材（自然木を枝打ち）	旧河道１上層	122.	20.0	13.0	コウヤマキ	
5076	建築材	有孔丸材（自然木を枝打ち）	旧河道１上層	93.2	22.0	7.4	コウヤマキ	14
5077	用途不明木製品	丸材（自然木を枝打ち）	旧河道１上層	178.	10.8	8.8	針葉樹	
5078	建築材	抉り入角材	旧河道１中層	47.9	4.4	5.7	コウヤマキ	8
5079	容器	曲物底板	旧河道１中層	19.0	4.0	0.7	ヒノキ属	5
5080	農具	網錘	旧河道１中層	12.5	7.1	4.2	ヒノキ属	2
5081	炭化材		旧河道１中層	17.3	6.8	4.0	針葉樹	
5082	用途不明木製品	角材	旧河道１中層	9.8	12.0	4.2	ヒノキ属	
5083	用途不明木製品	角材	旧河道１中層	20.0	4.5	3.4	ヒノキ属	
5084	土木材	丸杭	旧河道１肩部	12.5	2.5	2.5	アカマツ	
5085	土木材	丸杭	旧河道１肩部	26.5	6.4	5.0	アカマツ	
5086	土木材	角杭	旧河道１肩部	23.4	3.7	2.8	クロマツ	
5087	土木材	丸杭	旧河道１肩部	27.5	4.0	3.0	アカマツ	10
5088	土木材	丸杭	旧河道１肩部	10.5	2.0	2.0	マツ属	
5089	用途不明木製品	板材	旧河道１中層	36.0	12.4	0.4	針葉樹	
5090	用途不明木製品	板状木片	旧河道１中層	—	—	—	針葉樹	
5091	埋没林	—	旧河道１上層	—	—	—	ヤナギ属	

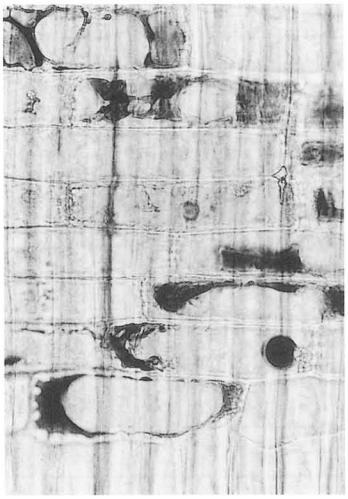
図版１　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（１）



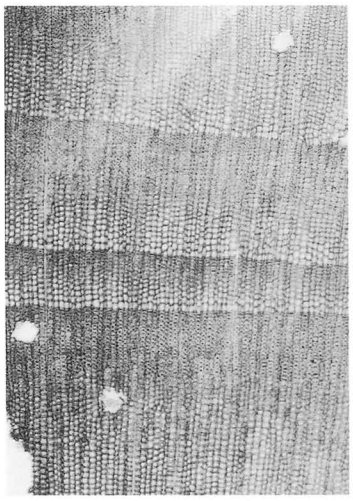
1a. モミ属（横断面）
W-5032　bar:0.5mm



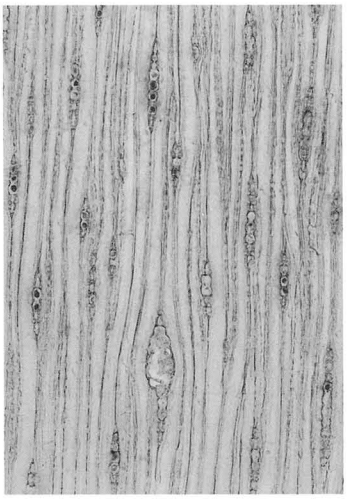
1b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm



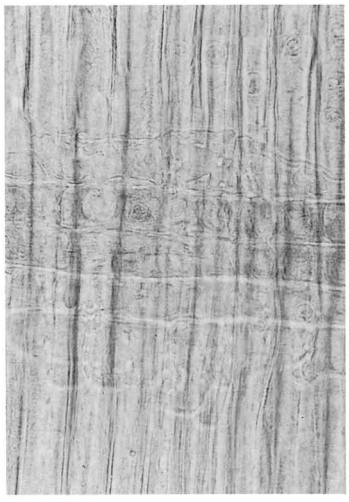
1c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm



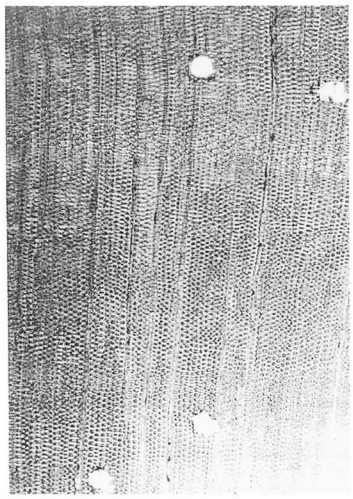
2a. アカマツ（横断面）
W-5032　bar:0.5mm



2b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm

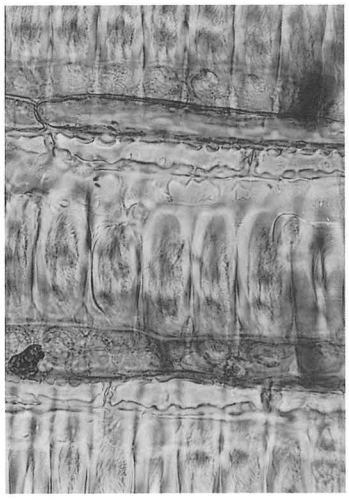


2c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm



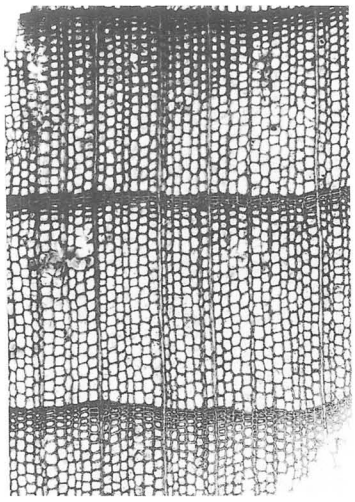
3a. クロマツ（横断面）
W-5032　bar:0.5mm

3b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm

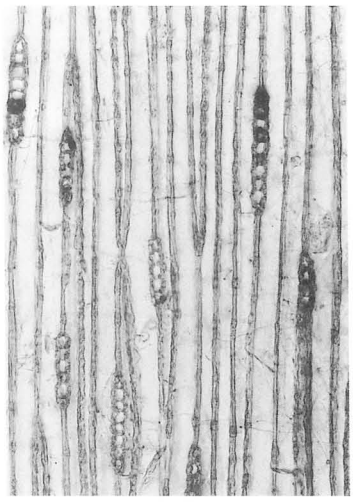


3c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm

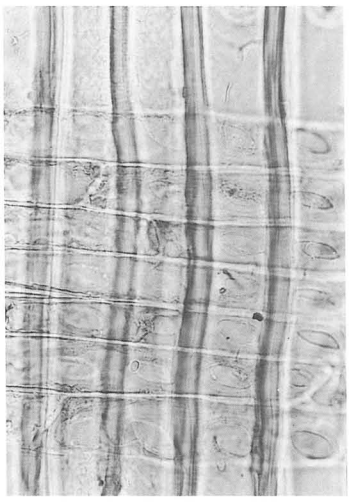
図版２　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（２）



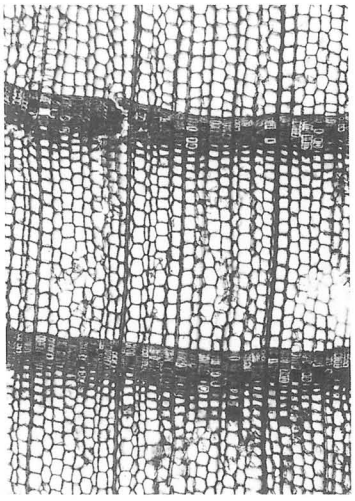
4a. コウヤマキ（横断面）
W-5062　bar:0.5mm



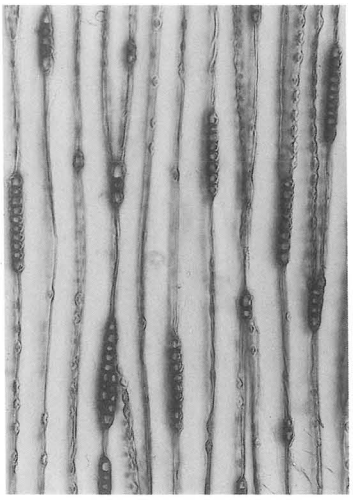
4b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm



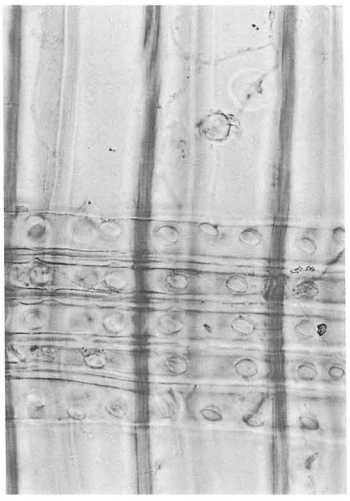
4c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm



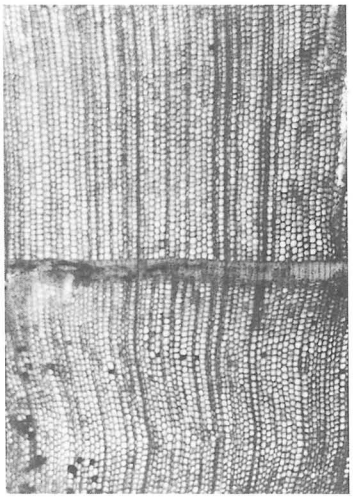
5a. スギ（横断面）
W-5065　bar:0.5mm



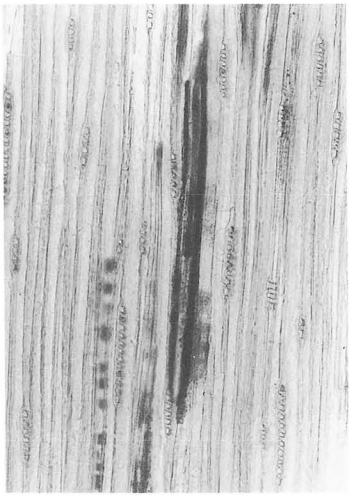
5b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm



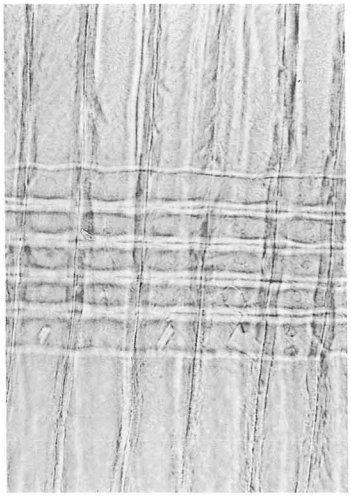
5c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm



6a. アスナロ（横断面）
W-5059　bar:0.5mm

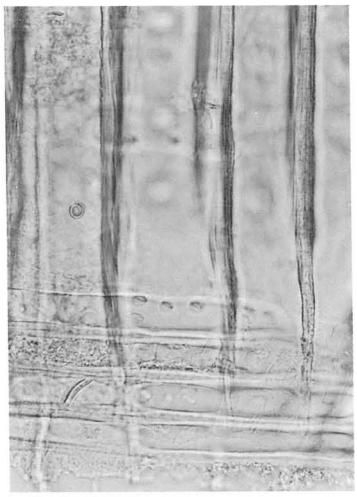


6b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm

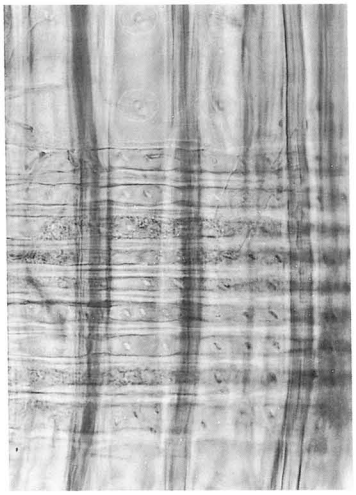


6c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm

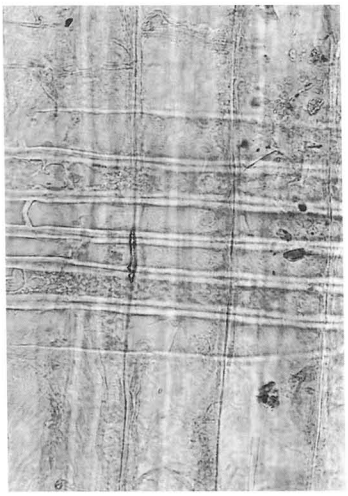
図版３　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（３）



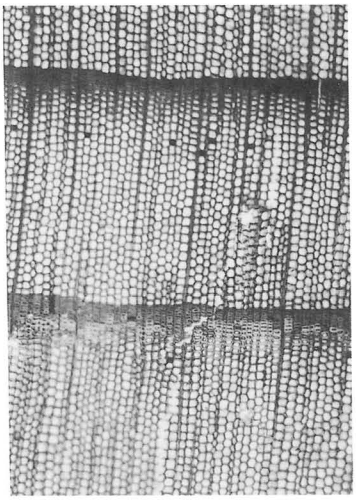
7. クロベ？（放射断面）
W-5031　bar:0.05mm



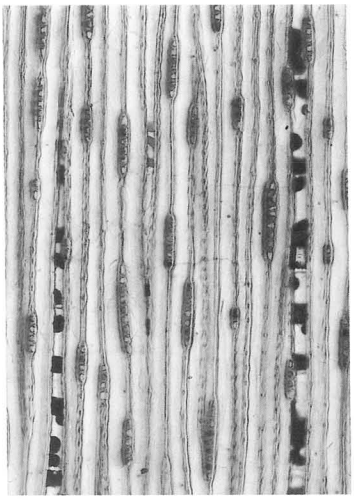
8. ヒノキ属（放射断面）
W-5057　bar:0.05mm



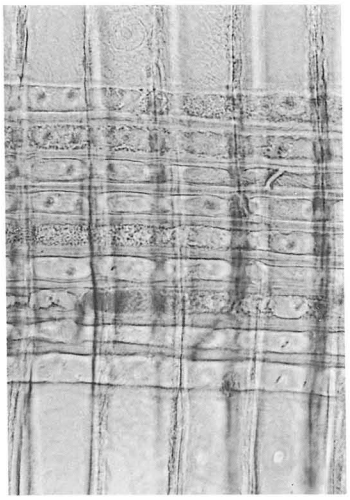
9. ヒノキ属（放射断面）
W-5056　bar:0.5mm



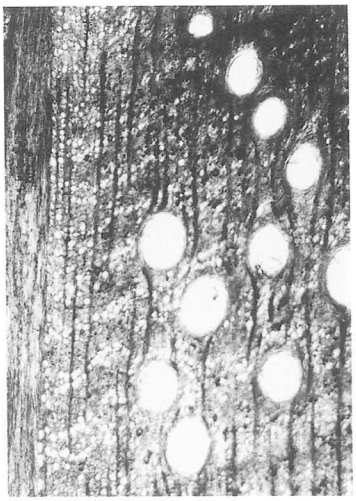
10a. ヒノキ（横断面）
W-5056　bar:0.5mm



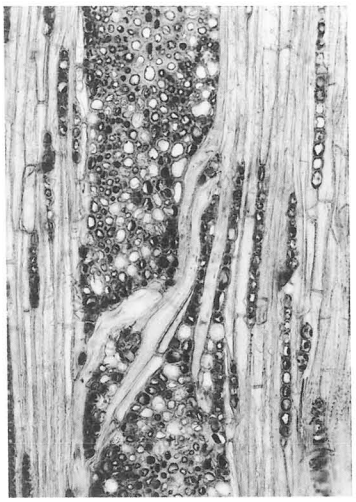
10b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm



10c. 同左（放射断面）　bar:0.05mm



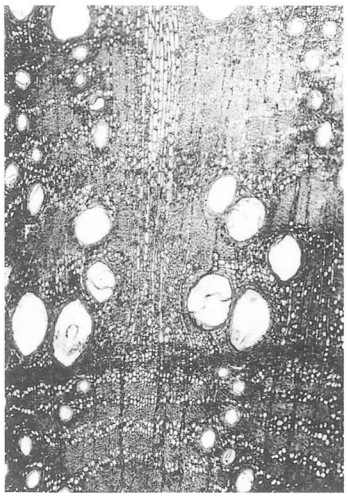
11a. コナラ属アカガシ亜属（横断面）
W-5049　bar:0.5mm



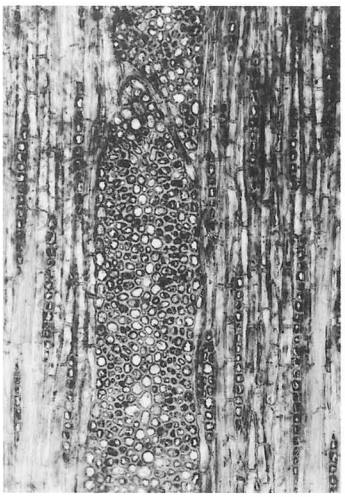
11b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm

11c. 同左（放射断面）　bar:0.1mm

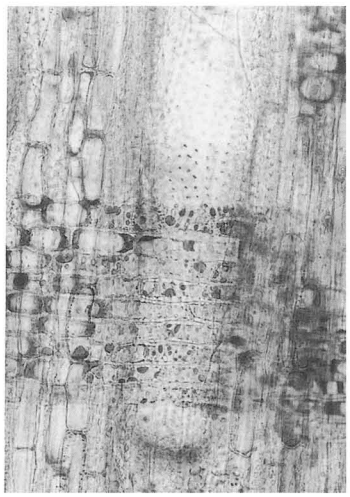
図版４　住吉宮町遺跡第20次調査出土木製品樹種の顕微鏡写真（４）



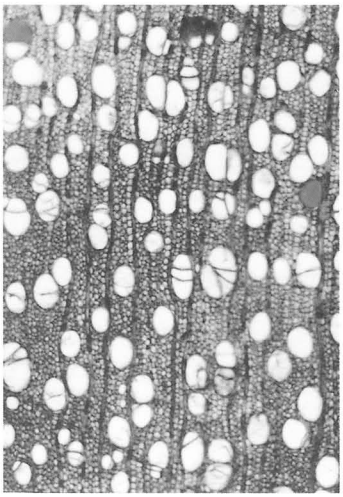
12a. コナラ属クヌギ節（横断面）
W-5054　bar:0.5mm



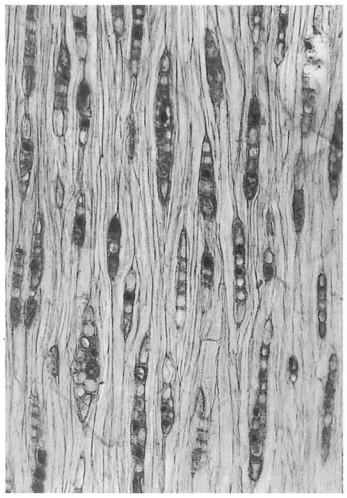
12b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm



1c. 同左（放射断面）　bar:0.1mm



13a. ヤナギ属（横断面）
埋没木　bar:0.5mm



13b. 同左（接線断面）　bar:0.2mm

13c. 同左（放射断面）　bar:0.1mm

第２章　出土した大型植物化石の分析

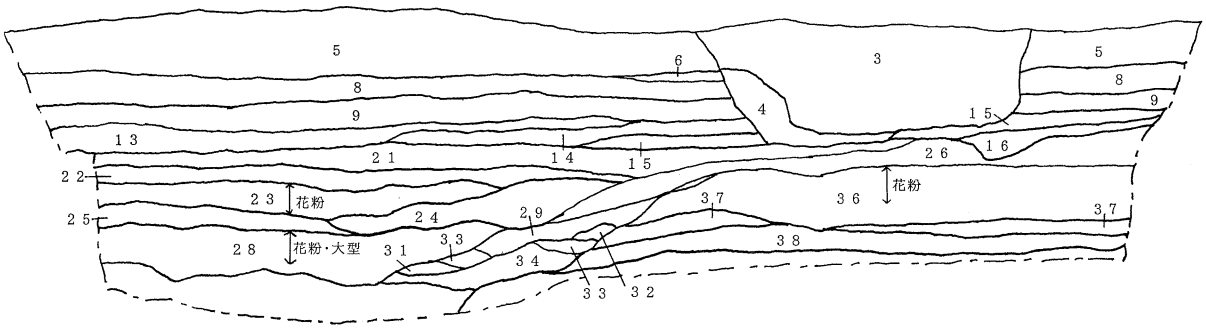
新山雅広（パレオ・ラボ）

第１節　はじめに

住吉宮町遺跡は神戸市東灘区住吉宮町に所在し、住吉川と石屋川により形成された標高20m前後の扇状地に立地する。本遺跡は、これまでの発掘調査により、弥生時代～近世の複合集落遺跡であることが判明している。今回は、本遺跡周辺の古植生および栽培作物を検討する目的で大型植物化石の分析を行った。なお、一部の同定にあたっては流通科学大学の南木睦彦助教授にご指導して頂いた。ここに感謝致します。

第２節　試料と方法

大型植物化石の検討は、古墳時代中期～後期と考えられる堆積物試料（28層：黒灰色粘質土（シルト））約1000cm³を0.25mm目の篩を用いて水洗篩分けをすることにより行った。なお、この堆積物試料については、花粉化石群集の検討も行われた。



第１図　資料採取地点（北壁）の土層断面図

第３節　出土した大型植物化石

出土した大型植物化石の一覧を第２表に示す。同定された分類群数は木本２、草本30である。その中で、カヤツリグサ属、スゲ属、ナデシコ科、ヘビイチゴ属，オランダイチゴ属，またはキジムシロ属、ヘラオモダカ、タネツケバナ属、シロザ近似種、オドリコソウ属近似種、イボクサなどが多産ないし目立った産出をする。

第４節　考察

出土した大型植物化石の中で、明らかな栽培植物と考えられるものはないが、水田で普通にみられるヘラオモダカ、ミズアオイ属、タガラシなどが出土しており、近辺で水田稲作が行われていた可能性が考えられる。この水田あるいは水田に類似した湿地には、ハリイ属近似種、イボクサ、ミズ属、ミゾソバ、サデクサ、ボントクタデ、ヤナギタデなども生育していた。また、幾分乾き気味の所には、シロザ近似種、カタバミ属、ノブドウ、メナモミなどが生育していた。木本のブドウ属は花粉化石でも産出しているが、近辺の樹木に絡みついていたものと思われる。

第２表　住吉宮町遺跡第20次調査（28層）から出土した大型植物化石

分類群	部位	個数
木本		
ブドウ属　Vitis	種子	3
不明　unknown	芽	15
草本		
ヘラオモダカ　Alisma canaliculatum A.Br. et Bouche	果実	21
オモダカ科　Alismataceae	果実	1
スゲ属　Carex	果実	58
カヤツリグサ属　Cyperus	果実	63
ハリイ属近似種　Eleocharis (cf.)	果実	1
イボクサ　Aneilema Keisak Hassk.	種子	10
ミズアオイ属　Monochoria	種子	1
ミズ属　Pilea	種子	2
ギシギシ属　Rumex	果実	1
ミゾソバ　Polygonum thunbergii Sieb. et Zucc.	果実	1
サデクサ　Polygonum maackianum Regel	果実	1
イシミカワ　Polygonum perfoliatum Linn.	果実	1
ボントクタデ　Polygonum pubescens Blume	果実	1
ヤナギタデ　Polygonum hydropiper Linn.	果実	4
イヌタデ近似種　Polygonum longisetum (cf.) De. Bruyn	果実	1
タデ属Ａ　Polygonum A	果実	2
タデ属　Polygonum	果実	3
タデ科　Polygonaceae	果実	2
シロザ近似種　Chenopodium album (cf.) Linn.	種子	15
ナデシコ科　Caryophyllaceae	種子	32
タガラシ　Ranunculus sceleratus Linn.	果実	1
タネツケバナ属　Cardamine	種子	19
ヘビイチゴ属，オランダ　Duchesnea,Fragaria,and/or Potentilla	核	22
イチゴ属，またはキジムシロ属		
カタバミ属　Oxalis	種子	1
ノブドウ　Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv	種子	1
チドメグサ属　Hydrocotyle	果実	1
オドリコソウ属近似種　Lamium (cf.)	果実	15
ナス属　Solanum	種子	3
ナス科　Solanaceae	種子	1
メナモミ　Siegesbeckia pubescens (Makino) Makino	果実	4

第５節　大型植物化石の記載

ブドウ属　Vitis　種子

側面観は卵形、上面観は楕円形、背面にはさじ状のへそがあり、腹面には穴が２つある。

ヘラオモダカ　Alisma canaliculatum A.Br. et Bouche　果実

側面観は歪んだ倒卵形、上面観は狭い扇形。背軸側には溝が１本ある。

スゲ属　Carex　果実

倒卵形で、偏平（２面）。

カヤツリグサ属　Cyperus　果実

側面観は倒卵形、上面観は偏平（２面）。

ハリイ属近似種　Eleocharis (cf.)　果実

広倒卵形、断面は両凸レンズ形。

イボクサ　Aneilema Keisak Hassk.　種子

側面観は楕円形、上面観は三日月形。向軸面に一文字状のへそがある。

ミズアオイ属　Monochoria　種子

側面観は楕円形、上面観は円形。表面には縦に隆起があり、この隆起間には密な横方向の隆起がある。

ミズ属　Pilea　種子

側面観は倒卵形、上面観は偏平。

ギシギシ属　Rumex　果実

３稜の倒卵形で先端は尖る。

ミゾソバ　Polygonum thunbergii Sieb. et Zucc.　果実

３稜形、柔らかく、つぶれやすい。

ボントクタデ　Polygonum pubescens Blume　果実

３稜形、側面観は両端が尖る卵形。

ヤナギタデ　Polygonum perfoliatum Linn.　果実

側面観は卵形、断面はレンズ形、表面には点状の隆起がある。

タデ属Ａ　Polygonum A　果実

やや偏平な２面の卵形。

シロザ近似種　Chenopodium album (cf.) Linn.　種子

偏平な円形、鈍い光沢があり、１本の不明瞭な筋が中央まで入る。

ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

偏平な円形、全体に粗い突起がある。

タガラシ　Ranunculus sceleratus Linn.　果実

レンズ形で中央部は褐色、周縁部は白色でスポンジ状。

タネツケバナ属　Cardamine　種子

楕円形で偏平、下端に唇形のへそがある。表面には長方形の網目が規則的に配列する。

ヘビイチゴ属，オランダイチゴ属，またはキジムシロ属　Duchesnea,Fragaria, and / or Potentilla　核

側面観は腎形、上面観は狭楕円形。

カタバミ属　Oxalis　種子

側面観は卵形、上面観は偏平。表面は両側面に横長の網目が３列に並ぶ。

ノブドウ　Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv種子

側面観はほぼ円形、上面観は楕円形、背面のへそは棍棒状。腹面には穴が２つある。

オドリコソウ属近似種　Lamium (cf.)　果実

側面観は長倒卵形、上面観は三角状広卵形。頭部は切形で平坦。

ナス属　Solanum　種子

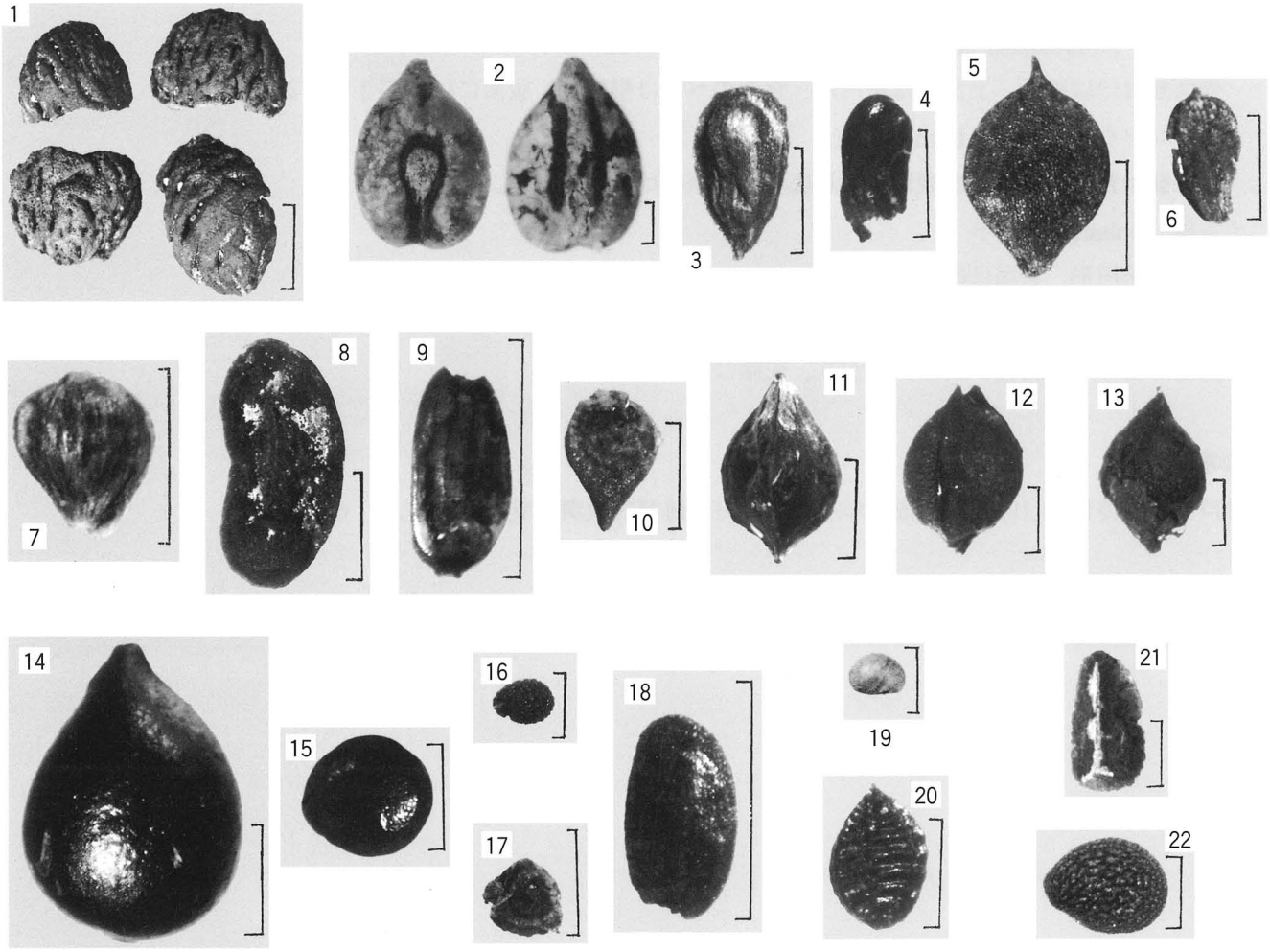
偏平な楕円形、表面は網目模様。

メナモミ　Siegesbeckia pubescens (Makino) Makino　果実

基部が菱形の四角柱が斜めに曲がり、先端は細い。

参考文献

神戸市教育委員会(1997)　平成８年度住吉宮町遺跡第20次調査実績報告書.　６ｐ.



図版５　出土した大型植物化石（スケール；１は１cm，２～22は1mm）

１.モモ、核　２.ブドウ属、種子　３.ヘラオモダカ、果実　４.オモダカ科、果実
５.スゲ属、果実　６.カヤツリグサ属、果実　７.ハリイ属近似種、果実　８.イボクサ、種子
９.ミズアオイ属、種子　10.ミズ属、種子　11.ギシギシ属、果実　12.ボントクタデ、果実
13.ヤナギタデ、果実　14.タデ属A、果実　15.シロザ近似種、種子　16.ナデシコ科、種子
17.タガラシ、果実　18.タネツケバナ属、種子　19.ヘビイチゴ属、オランダイチゴ属、またはキジムシロ属、核
20.カタバミ属、種子　21.オドリコソウ属近似種、果実　22.ナス属、種子

第３章　花粉化石群集の検討

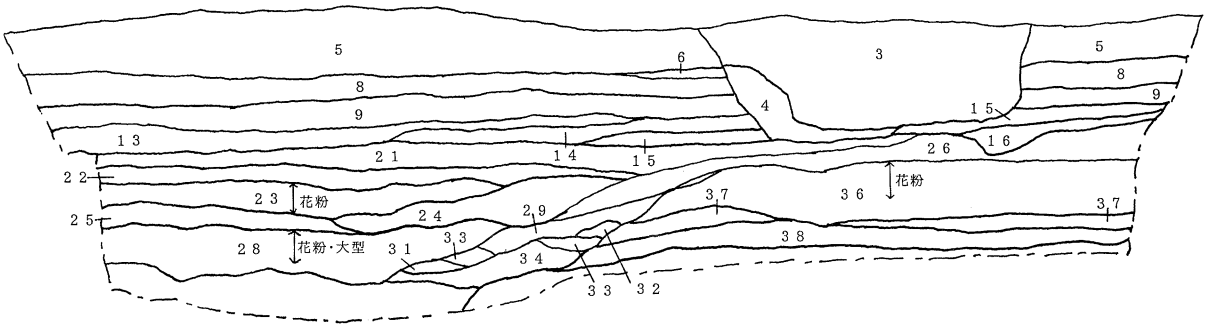
新山雅広（パレオ・ラボ）

第１節　はじめに

住吉宮町遺跡は神戸市東灘区住吉宮町に所在し、住吉川と石屋川により形成された標高20m前後の扇状地に立地する。本遺跡は、これまでの発掘調査により、弥生時代～近世の複合集落遺跡であることが判明している。今回は、本遺跡周辺の古植生を復元する目的で花粉化石群集の検討を行った。

第２節　試料と方法

花粉化石群集の検討を行った試料は、試料１（23層）、試料２（28層）、試料３（36層）の計３試料である。各試料は、試料１が暗灰色砂質土～暗黒灰色砂質土（極細砂）、試料２が黒灰色粘質土（シルト）、試料３が黒色砂質土（シルト～細砂）である。試料の時代は、試料１が飛鳥～奈良時代、試料２が古墳時代中期～後期、試料３が古墳時代前期以前と考えられている。なお、試料２については大型植物化石の検討も行われた。



第２図　資料採取地点（北壁）の土層断面図

花粉化石の抽出は、試料３ｇ程度を10％水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸１に対して無水酢酸９の混液で湯煎約５分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に撹拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、花粉化石の保存状態や産出個数が良好な試料については、樹木花粉総数が200個以上になるまで同定・計数した（試料２についてはプレパラート３枚分を同定・計数した）。その計数結果をもとにして樹木花粉総数が100個以上の試料については、各分類群の出現率を樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・シダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した。ただし、クワ科、バラ科、マメ科は樹木と草本のいずれをも含む分類群であるが、区別が困難なため、ここでは便宜的に草本花粉に含めた。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

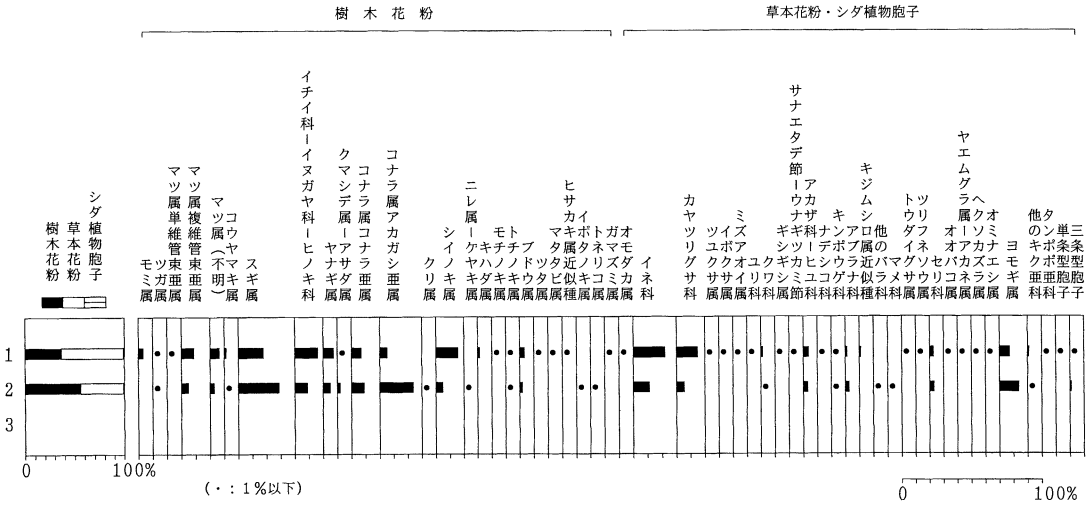
第3節　結果

同定された分類群数は、樹木花粉24、草本花粉27、形態分類で示したシダ植物胞子2である。住吉宮町遺跡の花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より3つの花粉化石群集帯を設定することができる。

Ⅰ帯（試料3）：花粉化石は殆ど産出しない。マツ属（不明）、イネ科、アカザ科－ヒユ科、セリ科、ヨモギ属を僅かに産出した。

Ⅱ帯（試料2）：樹木花粉の占める割合は約56％である。その中でスギ属（29％）、コナラ属アカガシ亜属（24％）が比較的高率で出現する。他に、マツ属複維管束亜属（5％）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（9％）、ヤナギ属（5％）、クマシデ属－アサダ属（2％）、コナラ属コナラ亜属（9％）、シイノキ属（5％）、ブドウ属（2％）などが目立った出現をする。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ科、ヨモギ属などが目立った出現をする。

Ⅲ帯（試料1）：樹木花粉の占める割合は約37％とやや低率である。その中でスギ属（約18％）、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科（約16％）、シイノキ属（約16％）が比較的高率を占める。その他、モミ属（約3％）、マツ属複維管束亜属（約9％）、ヤナギ属（約7％）、コナラ属コナラ亜属（約7％）、コナラ属アカガシ亜属（約5％）、ブドウ属（約3％）なども目立った出現をする。コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属はⅡ帯に比べ、出現率を下げる。草本花粉では、イネ科（約22％）、カヤツリグサ科（約15％）が比較的高率を占め、アカザ科－ヒユ科（約4％）、セリ科（約3％）、ヨモギ属（約7％）なども目立った出現をする。また、オモダカ属、ミズアオイ属などのいわゆる水田雑草も低率で出現する。



（樹木花粉は樹木花粉総数，草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した）

第3図　花粉化石分布図

第４節　考察

［古墳時代前期以前の古植生］

Ⅰ帯（試料３）は古墳時代前期以前と考えられる。花粉化石は殆ど産出せず、植生復元は困難である。樹木ではマツ属（不明）、草本では、イネ科、アカザ科－ヒユ科、セリ科、ヨモギ属が生育していた。

［古墳時代中期～後期の古植生］

Ⅱ帯（試料２）は古墳時代中期～後期の植生を示したものと考えられる。遺跡周辺には、針葉樹のスギ属、常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属を主とした森林が形成されており、マツ属複維管束亜属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹や落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属、常緑広葉樹のシイノキ属なども混じっていた。遺跡近辺には、幾分湿った所にイネ科、カヤツリグサ科、セリ科などが、幾分乾き気味の所にヨモギ属などが生育していた。なお、大型植物化石では、ヘラオモダカ、ミズアオイ属、タガラシなどのいわゆる水田雑草が産出しており、この時期に既に水田稲作が行われていた可能性がある。

［飛鳥～奈良時代の古植生］

Ⅲ帯（試料１）は飛鳥～奈良時代の植生を示したものと考えられる。遺跡周辺には、針葉樹のスギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科や常緑広葉樹のシイノキ属を主とした森林が形成されており、モミ属、マツ属複維管束亜属、ヤナギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属なども混じっていた。それら森林にはブドウ属、ツタ属、マタタビ属などのつる植物が絡みついていた。一方、遺跡近辺では、イネ科が比較的高率を占め、オモダカ属、ミズアオイ属などのいわゆる水田雑草も随伴することから、水田稲作が行われていたものと思われる。他に、幾分湿った所にイボクサ属、ツリフネソウ属などが、幾分乾き気味の所にヨモギ属などが生育していた。

第５節　おわりに

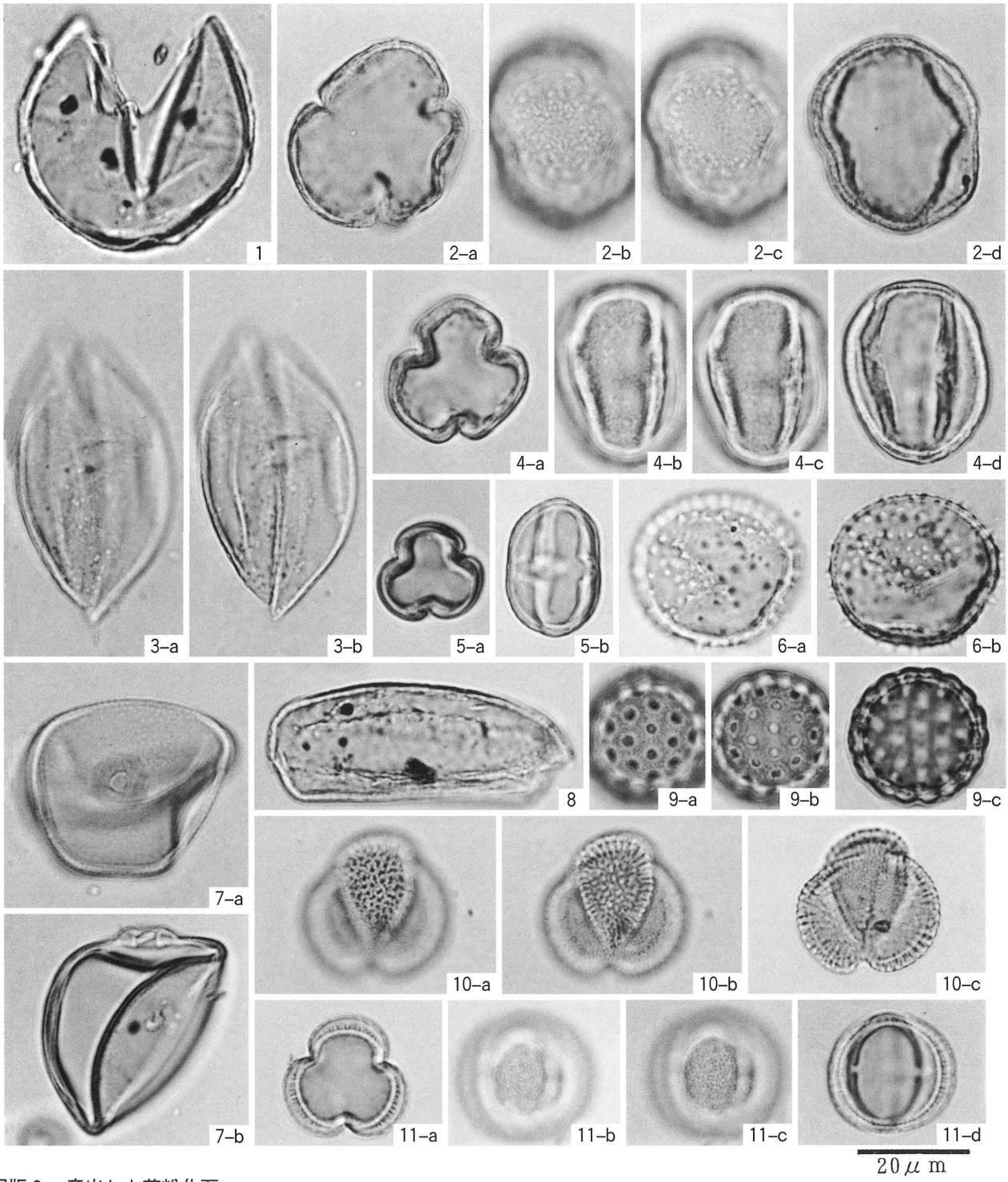
住吉宮町遺跡周辺の植生は、古墳時代中期～後期には針葉樹のスギ属と常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属を主とした森林が形成されており、飛鳥～奈良時代には針葉樹のスギ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、常緑広葉樹のシイノキ属を主とした森林が形成されていたものと思われる。また、遺跡近辺では古墳時代中期～後期には既に水田稲作が行われていた可能性がある。

参考文献

神戸市教育委員会(1997)　平成８年度住吉宮町遺跡第20次調査実績報告書．　6ｐ．

第３表　産出した花粉化石一覧表

和　　名	学　　名	1	2	3
樹木				
モミ属	Abies	7	-	-
ツガ属	Tsuga	2	1	-
マツ属単維管束亜属	Pinus subgen. Haploxylon.	1	-	-
マツ属複維管束亜属	Pinus subgen. Diploxylon.	18	5	-
マツ属（不明）	Pinus (Unknowm)	13	3	1
コウヤマキ属	Sciadopitys	3	1	-
スギ属	Cryptomeria	36	29	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T. - C.	33	9	-
ヤナギ属	Salix	15	5	-
クマシデ属－アサダ属	Carpinus - Ostrya.	1	2	-
コナラ属コナラ亜属	Quercus Subgen. Lepidobalanus	14	9	-
コナラ属アカガシ亜属	Quercus Subgen. Cyclobalanopsis	11	24	-
クリ属	Castanea	-	1	-
シイノキ属	Castanopsis	32	5	-
ニレ属－ケヤキ属	Ulmus - Zelkova	-	1	-
キハダ属	Phellodendron	3	-	-
モチノキ属	Ilex.	1	-	-
トチノキ属	Aesculus	2	1	-
ブドウ属	Vitis	7	2	-
ツタ属	Parthenocissus	1	-	-
マタタビ属	Actinidia	1	-	-
ヒサカキ属近似種	cf. Eurya.	1	-	-
イボタノキ属	Ligustrum	-	1	-
トネリコ属	Fraxinus	-	1	-
ガマズミ属	Viburnum	1	-	-
草本				
オモダカ属	Sagittaria	1	-	-
イネ科	Gramineae	122	20	3
カヤツリグサ科	Cyperaceae	82	10	-
ツユクサ属	Commelina	1	-	-
イボクサ属	Aneilma	3	-	-
ミズアオイ属	Monochoria	4	-	-
ユリ科	Liliaceae	1	-	-
クワ科	Moraceae	8	1	-
ギシギシ属	Rumex	2	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	Polygonum sect. Persicaria-Echinocaulon	3	-	-
アカサ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	22	6	1
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-
キンポウゲ科	Ranunculaceae	1	1	-
アブラナ科	Cruciferae	8	5	-
キジムシロ属近似種	cf. Potentilla	7	-	-
他のバラ科	other Rosaceae	-	1	-
マメ科	Leguminosae	-	1	-
トウダイグサ属	Euphorbia	1	-	-
ツリフネソウ属	Impatiens	2	-	-
セリ科	Umbelliferae	16	6	1
オオバコ属	Plantago	3	-	-
ヤエムグラ属－アカネ属	Galium - Rubia	1	-	-
ヘクソカズラ属	Paederia	2	-	-
オミナエシ属	Patrinia	1	-	-
ヨモギ属	Artemisia	41	25	5
他のキク亜科	other Tubuliflorae	6	1	-
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	-	-
シダ植物				
単条型胞子	Monolete spore	2	-	-
三条型胞子	Trilete spore	3	2	-
樹木花粉	Arborteal pollen	203	100	1
草本花粉	Nonarboreal pollen	345	77	10
シダ植物胞子	Spores	5	2	0
花粉・胞子総数	Total pollen & Spores	553	179	11
不明花粉	Unknown pollen	15	11	2



図版６　産出した花粉化石

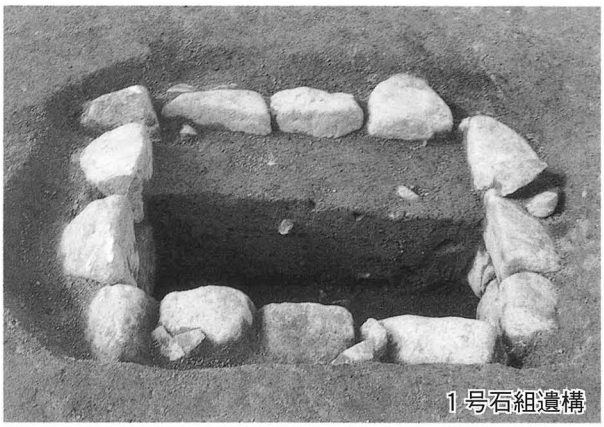
１：スギ属、試料１、PAL.　MN　888
２：コナラ属コナラ亜属、試料１、PAL.　MN　885
３：イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、試料１、PAL.　MN　878
４：コナラ属アカガシ亜属、試料１、PAL.　MN　879
５：シイノキ属、試料１、PAL.　MN　886
６：オモダカ属、試料１、PAL.　MN　880
７：イネ科、試料１、PAL.　MN　884
８：ミズアオイ属、試料１、PAL.　MN　882
９：アカザ科－ヒユ科、試料１、PAL.　MN　883
10：アブラナ科、試料１、PAL.　MN　881
11：ヨモギ属、試料１、PAL.　MN　887

写　真　図　版

図版１　住吉宮町遺跡　第19次調査地点

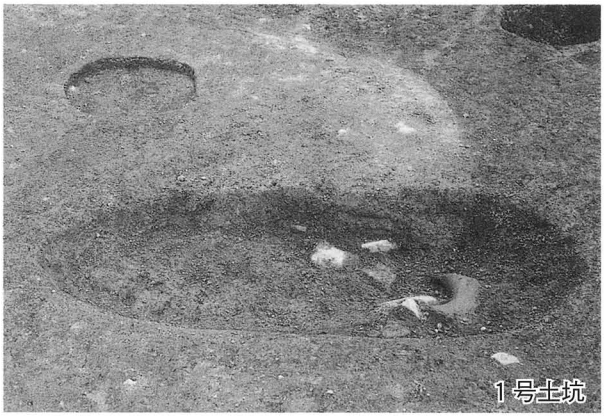
第１遺構面全景（北から）

１号井戸跡土層断面



１号石組遺構

１号井戸跡全景



１号土坑

図版２　第１遺構面

2号土坑土層断面

2号土坑全景（北から）

3号土坑（西から）

4号土坑

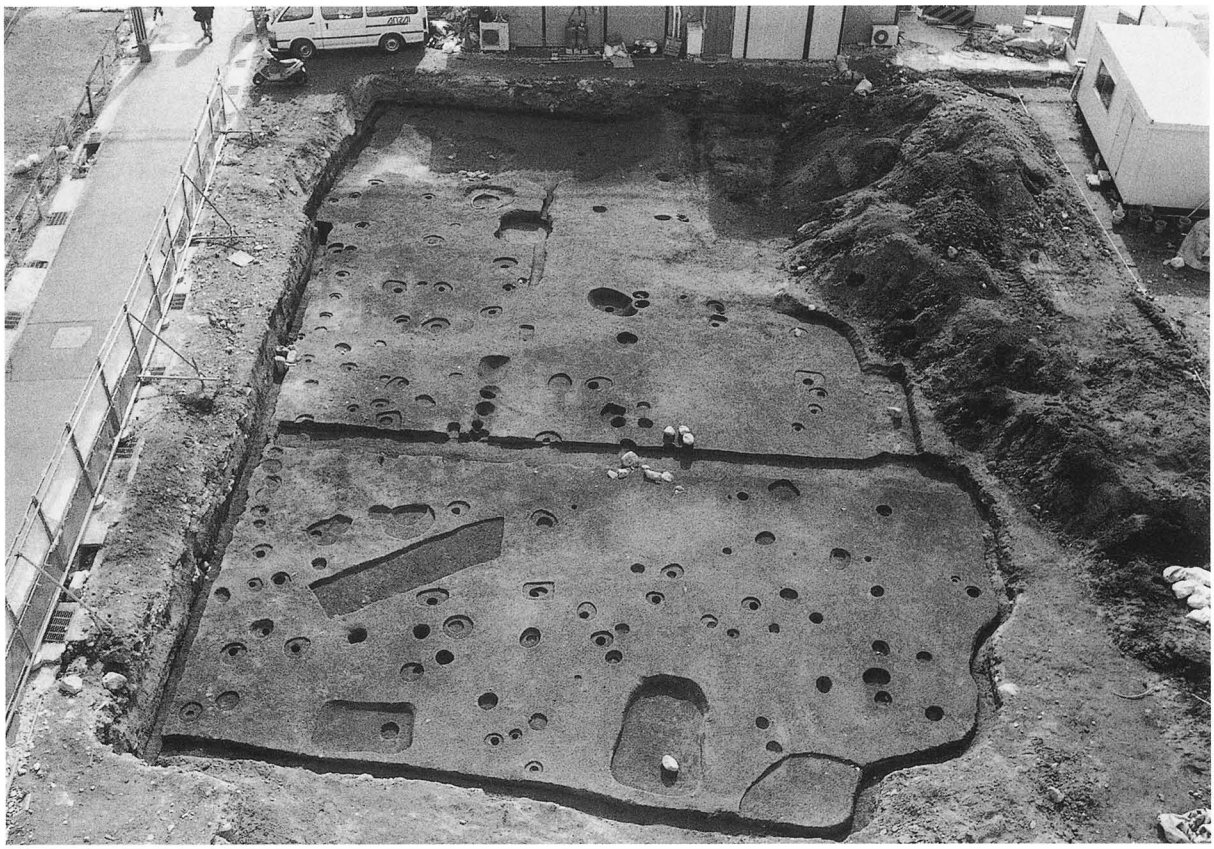
5号土坑（北から）

6号土坑土層断面

7号土坑（東から）

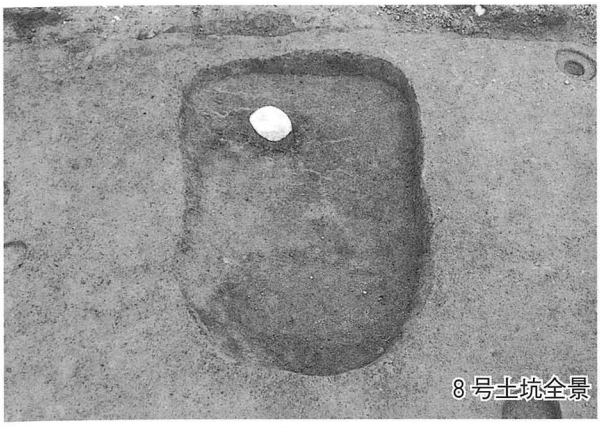
6号土坑全景（南から）

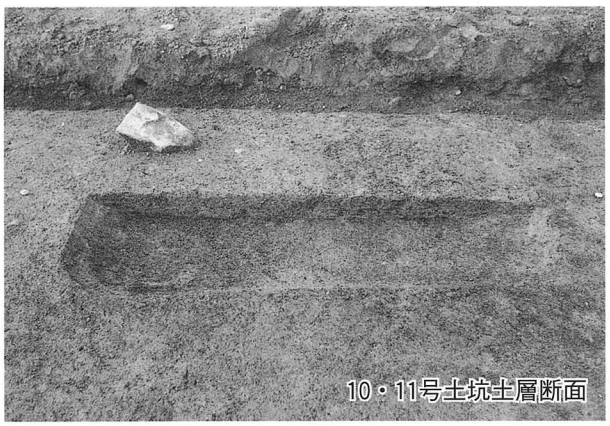
図版3　第1遺構面　検出遺構

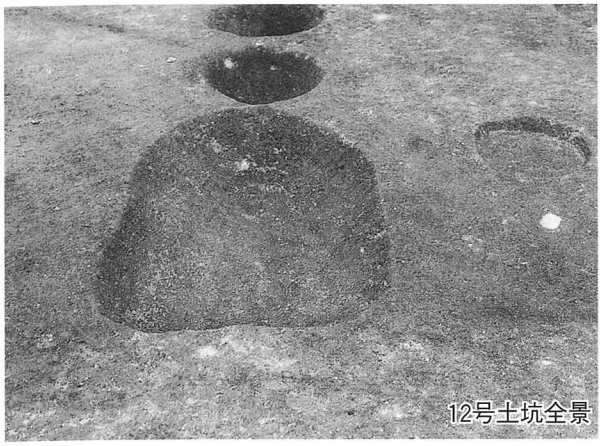


第２遺構面全景（北から）

図版４　第２遺構面検出地割痕（北から）

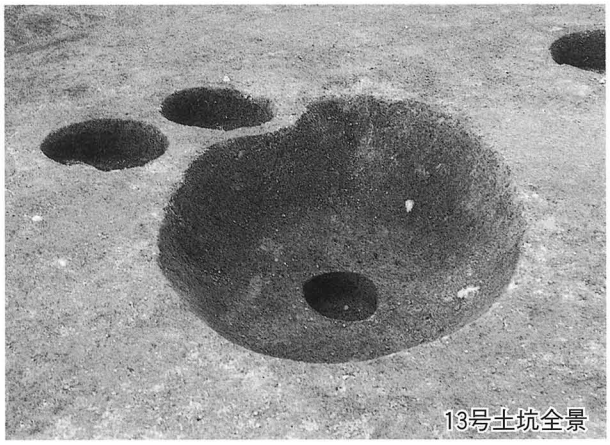

8号土坑全景


10・11号土坑土層断面


12号土坑全景

10号土坑全景

13号土坑土層断面


13号土坑全景

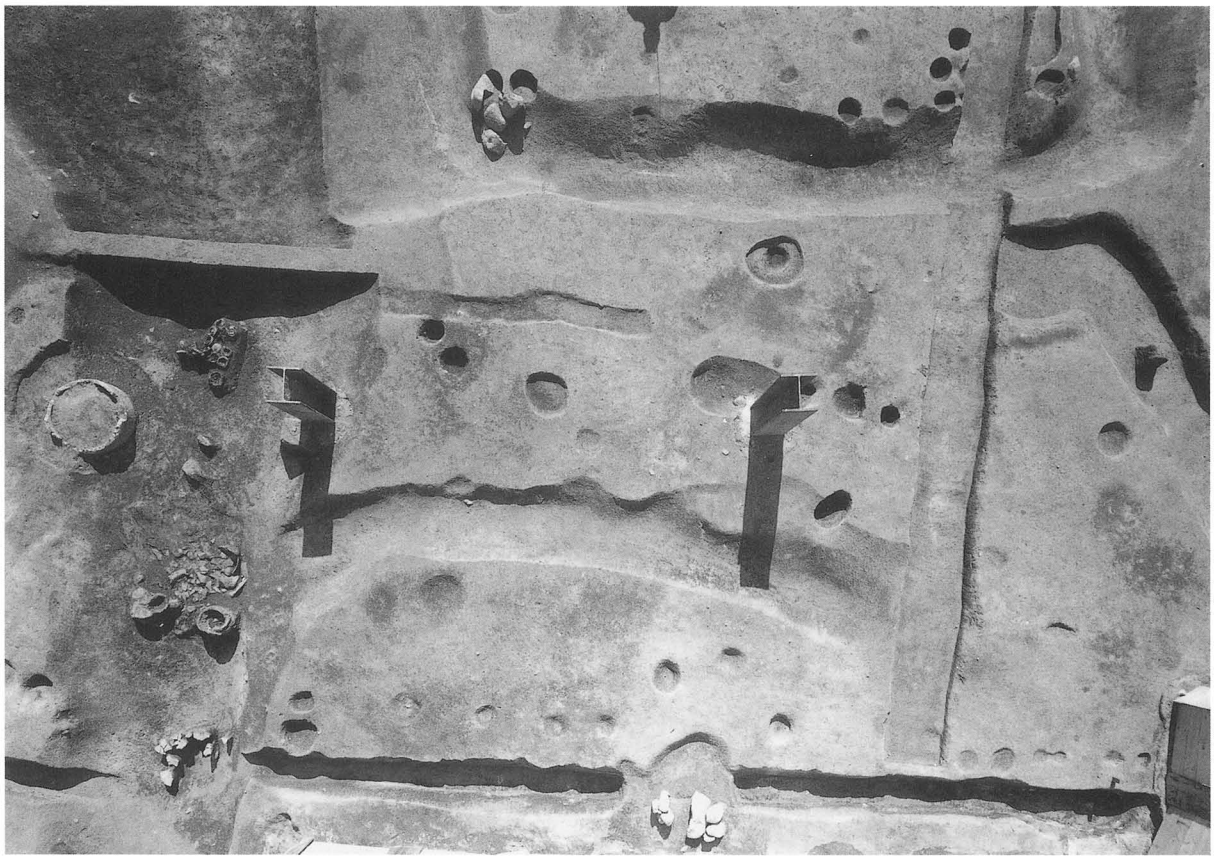
14号土坑全景

15号土坑全景

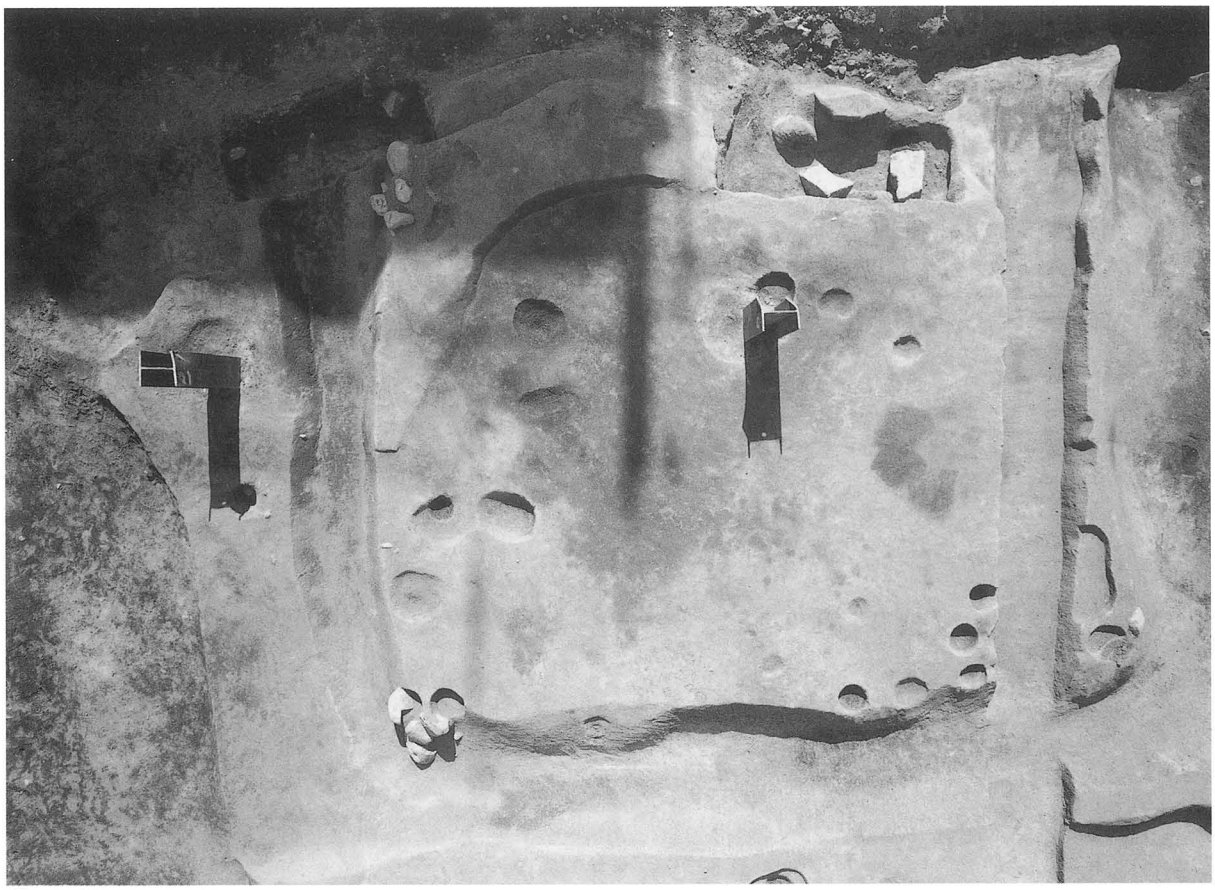
図版５　第２遺構面　検出遺構

図版6　第3遺構面全景

第３遺構面全景（南から）



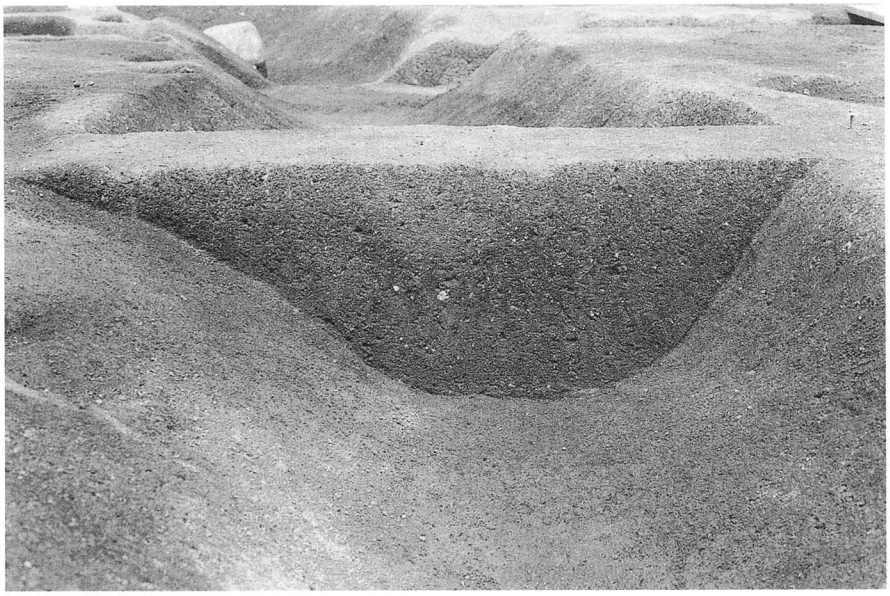
図版７　１号墳全景



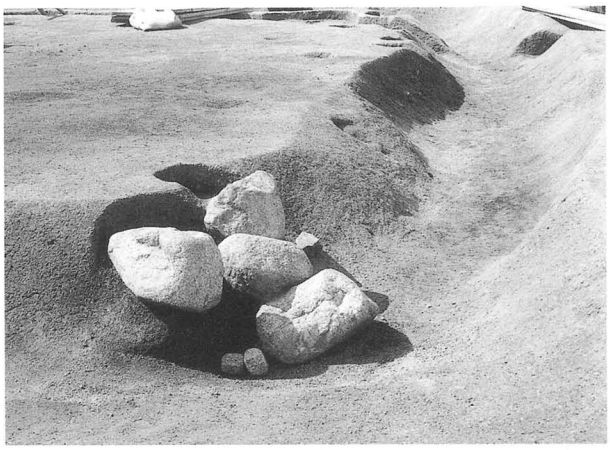
2号墳全景

図版8　2号墳全景（南から）

2号墳南側周溝
土層断面（C-C'）



2号墳東側周溝
土層断面（A-A'）



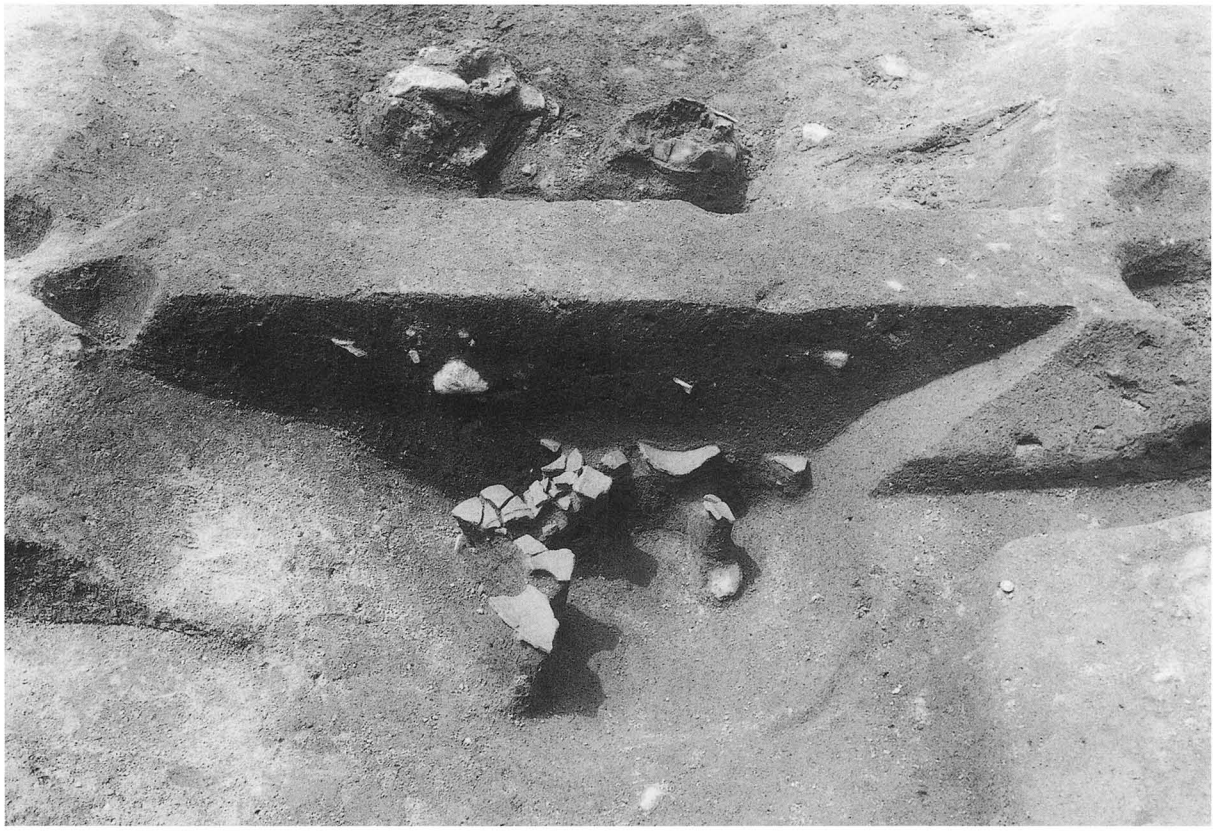
図版9　2号墳南西コーナー　　2号墳南東コーナー

3号墳全景（西から）

図版10　3号墳　北側周溝遺物出土状況（東から）

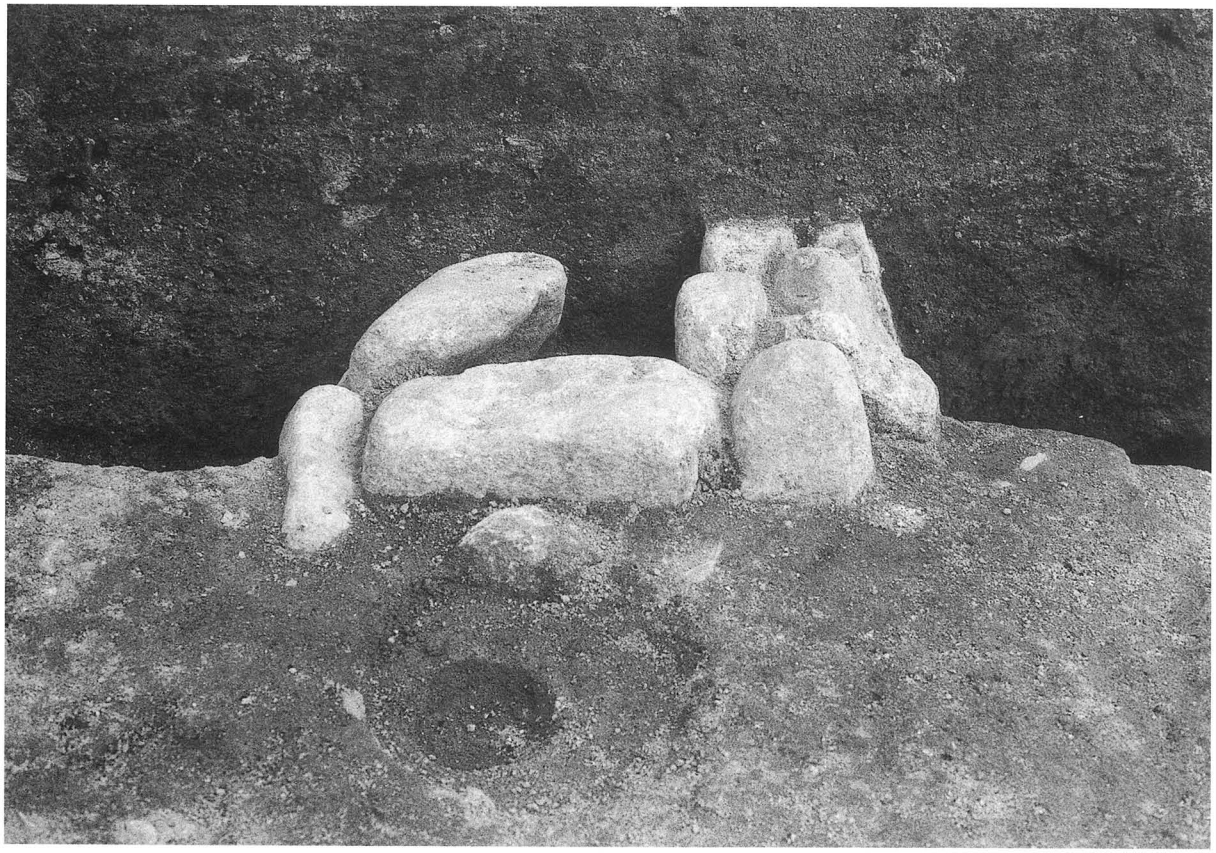
3号墳　北側周溝遺物出土状況（西から）

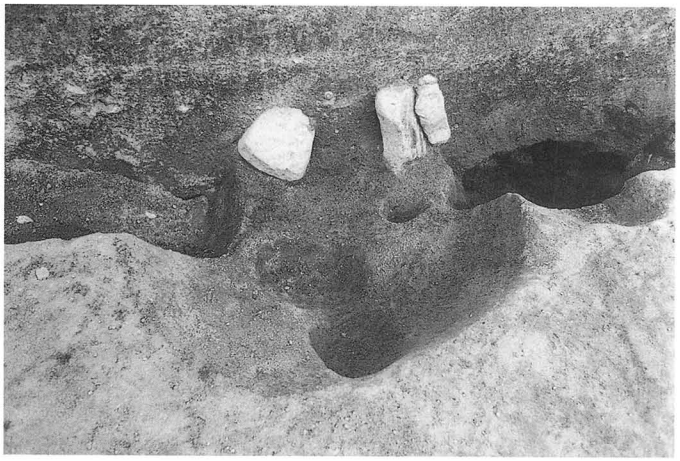
図版11　3号墳　北側周溝遺物出土状況（北から）

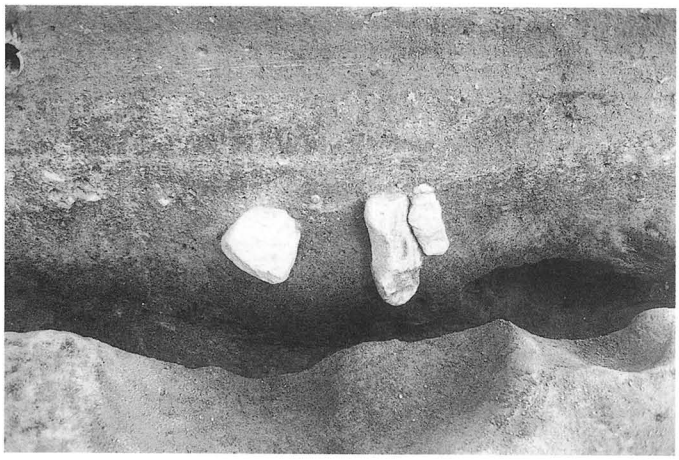


3号墳　北側周溝埴輪出土状況（東から）

図版12　3号墳　西側周溝埴輪出土状況（北から）







1号小石槨全景（上）

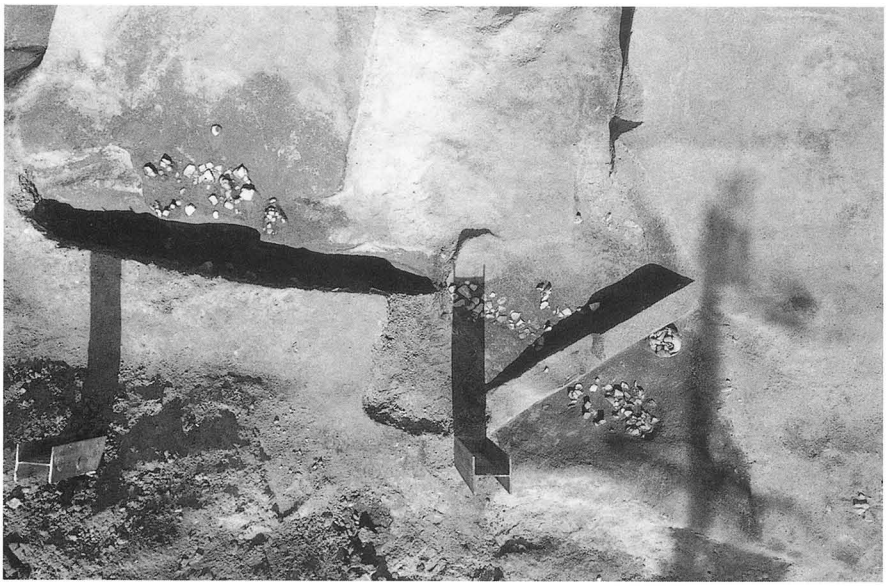
1号小石槨　掘方（左中）

1号小石槨　土層断面（左下）

図版13

第４遺構面全景（北から）

図版14　第４遺構面全景（南から）



2号溝跡全景

2号溝跡土層断面
（南から）

2号溝跡全景（南から）

図版15

第Ⅴ層遺物
出土状況（2）
（北西から）

第Ⅴ層遺物
出土状況（2）
（南から）

第Ⅴ層遺物
出土状況（1）
（南から）

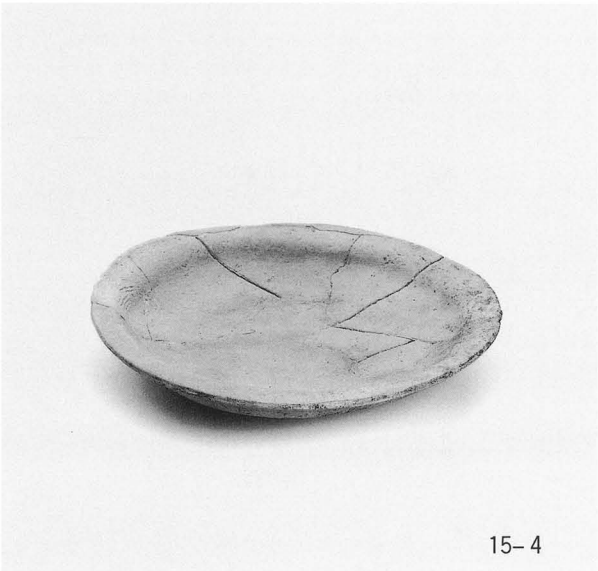
図版16

12–17

12–16

12–18

12– 3


15– 4

15– 1 （8 号土坑）

図版17　遺物包含層・4号土坑出土遺物